

崇められても退屈

フリードg

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——帝都の空を優雅に飛ぶ1羽の鳥。

その姿は、身体の半分は白く、半分は黒い。

もしも、鳥を見たのなら、その見えている間は穏やかに暮らさなくてはならなく、それが法でもある。

そして、それは王族であろうが、平民であろうが等しく平等であり、破ってはならない。

もしも——破ろうものなら——

目次

プロローグ	1
第1話 空腹だから降りる！	9
第2話 危険を伝える！	19
第3話 撃たれたから、死ぬ！……あれ？	31
第4話 返したから還る！	44
第5話 山道は疲れる……	60
第6話 驚いたので隠れる！	68
第7話 隠れても見つかってる!?	76
第8話 可愛いし、気に入ったから触る！	87
第9話 久しぶりだから、触りたくもなる！	97
第10話 変に目覚めてしまわないか心配する！	106
第11話 いつの間にか、消えてる!?	115
第12話 空から偵察する！	130
第13話 全員で攻める！	144
第14話 助けられたけど、怒る(照)！	151
第15話 死ぬのなら頂く！	161
第16話 昔話をする！	170
第17話 温泉は混浴が良い！	183

第18話 温泉での乱闘は女の子とする
に限る！

第19話 また昔話をする！

第20話 気に入った子は助ける！

221

第21話 村に降りる！

233

プロローグ

此処は千年の歴史を誇る帝都。

その繁栄の歴史は異国と比べて……、いや、比べる事も烏滸がましい程のものであり、様々な人種の者達が帝都へ求めていく華々しい歴史。

だが、人も永遠に生きられない様に、何れは朽ち果てていく。そしてそれは、国も例外ではない。

千年栄えた帝都も、決して例外ではない。

腐敗の元凶、それは人の形をした魍魎魍魎共が、我が物顔で跋扈し、千年の歴史を誇る帝都を内側から腐らせていつている故にだ。

全てを持つている強者が、弱者を黜り、蹂躪していく国。——それが現在の帝都。

圧制と恐怖政治を続けるが故に、民衆の意志として立ち上がったのが、帝国に対する反乱軍——、そして闇より悪を裁く暗殺者。

だが、そんな腐敗し、生き地獄と化した帝都にも、僅かではあるが心の安寧の日があった。

帝都では誰しもが一日に何度か取る行動がある。それは人々を苦しめ、国を腐らせる為政者たち、必死に毎日を働く者達。虐げられ続けた弱者たちと例外は無い。……誰しもが気が向けば、帝都の空を眺めているのだ。

来る日も来る日も、空だけは欠かさずに見上げていた。

それは、意味なくしているのではない。

帝都に長年語り継がれる言い伝え——。

【白と黒の鳥の伝説】

それが、空に現れていないか確認しているのだ。

——その鳥の半分は、天使…… 半分は悪魔。

そして、その鳥が帝都の空に現れたのなら——、何もできない。

帝都と同じく、千年続いたとされる言い伝え。いや、或いはそれ以前からも続いていたのかもしれない。

——白は、天使。黒は悪魔。

異なる2つは反転を続ける。……生きとし生ける者達は全て平等。どんな悪人であつても、どれほどの善人であつても、等しく平等。

その鳥が、全ての裁決を下す。

下す相手が、悪人だろうが、善人だろうが、関係ない。

そして、その審判からは逃れる事は出来ない。

だからこそ、人々は、天の眼に見つからない様に、その日は一日穏やかに暮らす。それが帝国の幾年月、色褪せる事の無い暗黙のルールだった。罰が当たる、と言う幼稚染

みた代物ではなく、絶対的で不変なもの。

……そして、それはどれ程の強者であれ、為政者であれ、決して例外はない。

□□ 帝国 □□

「はああああ………。今日は、その日ですか。今日は本当に食が進まなくて進まなくて、悲しい限りですよ」

そこには非常に大柄な男が1人、妙に哀愁を漂わせていつつ、開口一番。

何を言い出すのやら、と思えば自分自身の頭部よりも二回りは大きいであろう肉塊にかぶりついていていた。客観的に、食が進んでない様には見えないのだが……、本人が言うのだから、とりあえず良いだろう。

「食が進まん、と言うわりには、何時も以上に食ってると思うが？ 甘い物ばかりで糖尿

病になるなよ、と言うのは今更か」

その隣には大柄な男とは対照的な女性。

透き通る様な白い肌、蒼く長い髪を僅かに靡かせながら、呆れんばかりにため息を吐いていた。

「失礼な。これでも健康そのものです。と言うか、前にも言った様な気がしますよ」

最終的にお互いのため息を吐き合っている様だった。

「それにしても、やはり 良い気はしませんな。じつとしてれば良いだけなんです、楽しい事が出来ない、と言うのは」

「それも仕方のない事だ。だが所詮は数日程。黙ってみてれば良いだけの事だろう。休息の時間とでも思えば良い」

「……貴女でも、そう言いますか。この現状は」

「ちらり、と視線を向けた。この相手の腕つぶしは半端ではない。帝国最強とも呼ばれている武力の持ち主だからだ。……その上、どS。」

「ふむ。戦が、闘争、殺戮。全て心躍る私だ。善行、悪行、全くの自覚は無いのだが、それも関係ない様なのだな。それに生憎 危険種でも人間でも、……生物でもないモノには興味は向かん様だ」

「数少ない報告では、一応、人の形をしたナニカが降りてくる、と言う話もあるんです

がね？」

「うむ。それは私も知っている。……と、言うより見た事もあるし、相對した事もある」
「なっ！」

それを訊いて、思わず取り乱す様に立ち上がる。

天災、厄災の化身とまで帝都では、称されている者で、云わば絶対に回避しなければならぬ災害そのものだ。……無論、それは悪事をしている、と言う自覚や意識を持つ者に限られている為、一般人の間では、それ程まで危惧はされていない。

正義の味方、と言う訳じゃない事は判っているから、大々的に頼る様な真似もしていない。……云わば、《国民の休日》程度の認識だけだった。

寧ろ、政管たちは自分達も齒が立たない、様な情報は極力流れないように気は使っているのだ。

それに何より……《鳥》が空に飛んでいない日に、酷い目にあう事が多々あった為、表立って行動をしたりする者こそ皆無だった。

「詳しく、訊かせ願いますかな？」

「うむ。そうだな。よくよく考えてみれば、誰にも話したことが無かった様だ」

一息つくくと、彼女は語り始めた。

厄災、災厄、災害、天災、禍害……etc

様々な比喻が並べられる帝国のトップが頭を抱える癌とも言える現象。

その一旦が語られるかもしれない、と 頬張っていた手を止め、やや前のめりになる。

「あまり期待はするな。会ったと言つても、ほんの少しの間だけだ。だが、その少しで
はつきりと判つた事がある。……一言で言えば、そうだな……。アレは、ノスフェラトゥ不死者だ」

彼女から語られるのは誰もが知らなかつた事実。

国の全てを掌握し、己の欲望を思うままに満たし続けている大臣でさえ、知らない事
実。

これは、天より下界を見下ろすモノが この広がる現世を巡り巡る物語。

色々と畏怖されている存在なんだけど実は——

第1話 空腹だから降りる！

「ふあああああ………」

大きく、大きく欠伸をするのは、1人の少年。

何度も何度も手を口許に当てては、大あくびを繰り返す。

「……………暇」

開口一番。出てきた言葉はたった一言『暇』。

一体何時からそこにいるのだろうか？

それは本人にも判っていないかつたりする。

それよりも……もつとおかしい事を、説明しよう。

実は、少年の足下には何も無いのだ。

その下には、広がる白い何か。その白い何かは 時折、少年の傍も高速で飛来してくる。が、ぶつかったりする様な事は一切なく、ただただすり抜けていく様だ。

正体を説明すると……、それはただの《雲》。

つまり、この少年、空を飛んでいる……、いや、空に浮いているのだ。

その高度は 空に浮かぶ雲をも掴める程の高い位置であり、強風が吹き荒れ、人であれば、立ち入る事の出来ない領域。

「んん……むにゃむにゃ……。……んん？」

聽て、一面雲の海だったのだが、何度も吹き荒ぶ強風により、散らされ晴れてきた。

「()……、帝国の……北あたり、かな。大分流されてた。腹も減ってきたし……、むー……むにゃ……んんっつ！」

暇な上に、眠そうにしていた少年(多分)は ぱちんっ!! と両頬を引つ叩く。どうやら、眠気を強引に吹っ飛ばした様だ。行動を開始する様子。

そして、何やら上を見上げた後。

「ちよつと行つてくる」

そう一言呟いた後、一歩、前へ足を出した。

すると、先ほどまで宙に浮いていたと言うのに、まるで急に足場が消失したかの様に、落下を始める。

それでも慌てた様子は一切なく、ただただ両手を広げて風を受け、高速で落下。

「似た匂い……。多分、そうだ。結構久しぶり」

ぎゅんぎゅん、と速度を速め、聽ては地面までの距離が殆どなくなつた。

場所は人気のない路地。人前で落下すれば、大分賑やか？ になってしまふのを彼は、学習した事もあり、知っているから、今度はしっかり落下点を狙っていた。地面との距離が0になる直前に、くるっと一回転をして、両足で着地。

何をどーやったのか、完全に落下の速度も殺して、辺りに衝撃波の1つも出さずに着地する事が出来ていた。

「確か……、ここはタイゲンって町だったっけ？」

町の名を思い出しつつ、路地から顔を出すと、随分と賑わっている事が判った。町のあちこちに、張り紙が張り付けてあり、それが理由である事も直ぐに。

「さあさあ、これから一番の目玉のショーが始まるよーっつっ!!」

大きな声が響くと同時に、元々沢山いたのにも関わらず、更に人集まりができてきた。簡易ステージが設けられており、人は沢山いるものの、一望する事は出来る。

「ああ、お集りの皆さん！ 本日のサブタイニー一座の目玉でもあり、期待の新人による、アクロバティックなバランス芸をお楽しみください！ そして、頑張ってもらうのは、こちら、アカメちゃんとツクシちゃん!!」

紹介された2人は、笑顔で周囲に手を振りながら自己紹介。

「こんにちは、アカメです！」

「よ、宜しくお願ひします。ツクシです！」

細身の長い黒い髪 of 少女アカメ、そして、幼いながらも起伏に富んだ身体付き、やや短く薄い茶色の髪 of 少女ツクシ。

2人は、自己紹介を終えると同時に、芸を始めた。

少女が無数の短刀を、ジャグリングし、更に短刀増えて、増えて、その数が増すごとに歓声を呼び込む。

そして、もう1人の少女が、大きな大きな壺を頭の上に乗せ、絶妙なバランスを維持したまま、Y字バランスを取り、またまた歓声が生まれる。

2人ともが美少女だと言っている容姿だと言う事も拍車をかけている事だろう。

だが、少年が注目していたのは、その芸の技ではない。その2人の容姿、……以前見

た事があった。

「……………んー。あ、そつか。あの時の子達？　かな。でもなんで　こんなトコに？　つてか、なんで旅芸人？」

周囲が賑わい続けているのに、まるで対照的に冷ややかな視線を送っているのは、先ほどの少年。

「どうやら、アカメやツクシの2人を見た事がある様で、不思議がつている様子だった。特にその職に。」

「まあ、別に良つか。それより……………あ、いた」

彼はステージではなく、その横の方に視線を向けた。そこには、一座の簡易控室になつている様で、何人かが目に入った。因みにその中に、いる人物に様があつたのだ。

「すいすい、と人混みの中を縫つて、時間は少しばかりかかったものの、抜け出す事ができ、その場所へと到着。」

「久しぶり。アム」

「え……………？　あつ、君はっ！」

突然話しかけられて、それに一応、部外者立ち入り禁止にしていた場所だったから、少し驚いた様だが、誰なのか判つた様で、直ぐに笑顔になつた。

「わっ、見に来てくれたの??　嬉しいなあ！」

「ん。偶然だよ。ほら、アムがやってる一座のチラシ、見たからね。大盛況みたいじゃん」

「まあね。なんとたって、新人の加入が大きいかな？ ほら、今 頑張ってくれてる2人！ あの子達が入ってきてくれたおかげで、大分儲かってるんだ。この1ヶ月はほんとは！ 偶然でも嬉しいよ。なんとたって、命の恩人なんだし！」

ぎゅつ、と少年を抱きしめるアム。

彼女は一座団員の1人で、名はアムーリヤ。

旅芸人であるが為、様々な問題や悶着があつたり、と文字通り命が危ない様な事も多数あつた。

そんな中でも、最も危険だつたのが、次の町へと向かう途中、一座が危険種エビルバードの群に遭遇してしまつた事だ。

危険種とは、1匹現れただけでも大騒ぎする獰猛で凶悪な生物。超小型から超大型まで幅広く存在し、危険度事に階級が違う。エビルバードは《特級》に分類される危険種で、その上には、《超級》しか存在しない。つまり、上から2番目の危険生物だから、そんなのが群で現れた！ ともなれば、最早災害だ。

精々単体での遭遇の経験しかない一座のメンバー達は、勿論そんなのに遭遇した事などある筈も無く、全員が等しく死を意識した様だつた。

そんな修羅の場に、ひとりの少年が降りてきたのだ。

降りてきた――、と言うのは比喻ではなく、見たまんま。上には、ただただ空が広がるだけだと言うのに、周りには岩山等の高所は無いと言うのに、エビルバード達の上へひよい、と飛び乗つて、そこからは早かつた。

まるで姿大人と子供。大人が子供をあやすかの様に、姿かたちを見ればアンバランス

なんだけど、色々やってるうちに、エビルバード達は逃げていった。

何よりも驚きなのが、村一つを容易に滅ぼす大食漢として恐れられているエビルバード。無限の食欲を持つとされていて、食欲は生存欲よりも上位に位置しており、死ぬまで攻撃性は失われる事は無い。

……にも関わらず、少しばかりの攻防らしきものはあつたんだけど、あれよあれよという内に、エビルバードの群は、脇目も振らず、逃げていったのだ。

当然、この世のモノとは思えない光景を目の当たりにした一座のメンバー達は、暫く誰も言葉を発する事が出来ず、思考も完全に停止していた。

そんな静寂な間に響いたのは、“くうく……”と言う音。

とりあえず、正気は取り戻し、一体何の音? と意識しだした所で、目の前の少年が

開口一番。

『腹、……減った』

との事だった。

どさつ、と腰を下ろし、腹部を抑える姿。空腹なのだと言う事は一目瞭然。……でも、その姿は、あの危険種を追い払った剛の者とはとは程遠く、比較的一番傍にいたアムー

リヤが持つていた携帯食の干し肉を恐る恐る渡した所……。

『つ!!』

眼を輝かせて、ひよいつ！ と受け取りそのまま、ばくつ と一口。

何処か愛らしさも併せ持つ少年の仕草の1つ1つに、ずきゅんつ！ と心を打たれ、危険も去つた事の安堵感も一気にアムーリヤは、ふにやりと笑う。

その笑顔は伝染し、瞬く間に周囲が笑顔になつたのだ。

『どうもありがとう』

その後は、飲料水を一気飲みして、一息ついた所でお礼の言葉。

正直な所、特級危険種^{エビルバード}の群を追い払つてくれた事の方がそれこそ天地の差がありそうな恩なのだけれど——、と苦笑いをする面々。

訊くところによると、あくまで此処に来たのは偶然で、空腹だったから、降りてきたらしい。

降りてきた、と言うのはまさに見た通りなんだけど、当然ながら納得した者は皆無であり、その後は、少しばかり一緒に行動。

一座のメンバー達ともそれなりに打ち解けた所で、いつの間にか少年は姿を消していったのだ。タイミングで言えば、座長であるサバティーニは、彼の腕つぶしを見てある事に勧誘をしようとした時だ。

『——辞めておいた方がいいよ?』

その言葉だけを残して、音も無く姿を消したのは——。

第2話 危険を伝える！

「ビツクリしたんだよ？ あの時急になくなっちゃうんだから」

「ん。一応言つたつもりだったんだけど……」

「ほんとに、『帰る』の一言だけじゃんつ。あつという間にいなくなつてたから、仕様が無いって。あー良かった良かった。また、会いたかつたんだよーつ」

「むぎゆつ、あ、アム。苦しい……つ」

アムーリヤにぎゅぎゅと抱きしめられて、段々息苦しくなつてしまつた様子。豊かなアムーリヤの胸は、十分に少年の口許を塞いでいて、空気の供給を絶つてしまつていた。

それに気づいたアムーリヤは、慌てて離れた。

「あはは。ゴメンゴメン。逃げちゃわない様に、つて思つちやつて。ほんと、以前はビツクリしたんだからねー？」

ニコニコと笑っているアムーリヤを見て、少年は表情を少し険しくさせていた。

「アム」

「ん? どうしたの?」

その険しい表情を見て、アムーリヤは笑顔だった表情を少しだけ引き締め直した。

この少年は、自分達の一座の正体を知っている。そして、更に言えば、とんでもない力を秘めている。

つまり、ただの少年じゃない、と言う事は知っているから、何か直感した様だ。

「危険が迫ってる。アムに」

「え……?」

だけど、その言葉はあまりに直球すぎて、思わず呆けてしまった。

そして、よくよく考えてみれば、この少年は、思った事を素直にストレートに伝えていた事があったから、直球だったとしても不思議じゃない、と言う事も改めて思い返していた。

そんなアムーリヤを見た少年は続ける。

「厳密には少し違うかな。アムだけじゃなくて、一座全員に」

「そ、それって どういう……」

「それだけ。アムには、んーん。皆には色々世話になったから。伝えときたくて。気を付けてね?」

少年は、そういうと、手を挙げた。

そして、瞬きを一つアムーリヤがした瞬間、目の前の少年は姿を消していた。

「つつ!! ど、何処? あ、あれ?」

また、同じだった。

気付いたら目の前から姿を消している。

まるで、瞬間移動をしたのか、或いは透明にでもなったのか……、判らないが、ただ言いようのない不安感だけが漂っていた。

「危険——。もしかしたら、この後行く場所の——」

心当たりがない訳ではない。

自分達の一座は、単なる旅芸人の一座ではないから。ある繋がりを持つ一座だから。

——もしかしたら、秘密が漏れている? 彼が、ひよつとしたら。

アムーリヤの中に、疑惑が沸き起こるが、即座に否定をした。

「(ううん。私達を助けてくれたんだから。それに、今だつて伝えに来てくれた。混乱を誘う為だとしても、面倒すぎる方法だし。……もし、そうなら、そもそもあの時に助ける必要なんて、無い筈。……無いって、絶対。だから、きつと……シラナミ山の)」

もう一つの候補が、これから通る道はシラナミ山がそれなりに近い。

そこには、悪名高い盗賊が縄張りにしており、人々が多大なる被害を被っているのだ。老若男女関係なく、蹂躪していく盗賊。……危険、と言われればこれ以上ない。

「皆に——相談しておかないと」

アムーリヤは、一先ず自分の胸の中に留めておく訳にはいかない為、相談を決意。

舞台は、アカメとツクシの2人のアクロバティック・バランス芸が最終。直ぐにでも集める事が出来るから。

□
□
□
□

そして、皆が集まった所で、アムーリヤは話を切り出した。

「——と言う事があつて」

「……本当か。彼がそういうのなら、注意をしておこう。……移動も速い方が良いだろう。

……それにしても」

座長のザパティニーニは、はあ、とため息をした。

一座の幹部たちが、この場集っている。この場の全員が同じ気持ちだった。

「彼がウチに加入してくれたら、どれ程心強いものか……」

目の前の光景が現実とは思えず、更に救ってくれた事実もあつて、ほれ込んだのだ。
アムーリヤはそれを見て、苦笑い。

「私も頼み込みたいですよ。でも、するつと逃げちゃつて……」

そういうと、ゆっくりと目を瞑つて頷くのは、黒髪の男のコウガ。そして、その隣にいるスキンヘッドのダンカンは軽く笑みを漏らした。

「アムーリヤから逃げられたら、仕方がないな。だが、希望が全くない、と言う訳ではないだろう。……わざわざ警告をしに来たんだからな」

「だな。……今後の事を考えてもだ。コウガの言う様に、会う事が出来たら、留める方向に検討をした方が良いでしょう。勿論、あまり、しつこくない程度に」

それは、当然、と言わんばかりに大きくうなずくのは、金髪をツインテールに纏めているナタリア。

「どーだかねえ。アムーリヤつてば、情熱的に引き留めるんだから。胸の中で死ねるなんて、本望——つて考え持つてんの、童貞だけだからね？」

「ちよ、ちよつと。ナタリアアっ！ 私はそんなつもりじゃありませんっ！」

危険が迫っている、と言われているのに 自然と笑みが生まれているのは、彼らがそれなりに修羅場をくぐつてきているから、と言う理由がある。

だが、それでも いつ死期が訪れてもおかしくない事も重々に理解しているつもりだ。

以前の特級危険種然り……、そして これから戦う相手にも。だから、笑みは直ぐに無くなった。

「他の座員達に休息を取らせた後、なるべく直ぐに移動をした方が良いだろう。少なくとも、シラナミ山からは今日の明るいうちにもっと離れた方が良い」

盗賊達は、朝昼夜を問わない。だが、それでも被害が集中しているのは、夜。夜の闇に乗じて、襲ってくる事が多いのだ。だからこそ、太陽が昇っている間に、離れてしまいたい、と言うのが本音だ。そして、身体を鍛えている座員だからこそ、体力面では、問題ない事も都合だ。

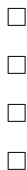
「ん。了解。アカメちゃんとツクシちゃんにはしつかりと休んでもらって、事情を話すわ。……そろそろ、アカメちゃん、空腹で倒れかねないし」

あはは、と笑うアムーリヤ。

「だよねえ。あの身体の何処に、あれだけの食料が入るのか判んないわ。でも、今日はおかわり解禁にしてあげて、それを条件に急いでもらおう！」

「そりゃ良いな」

その談笑を最後に、話は終わったのだった。



テントの外では、アカメとツクシが道具の整理をしていた。

道具の整理をしつつ、今日合った事を、話す。……重要な事だから。

「ツクシ、さっきの興行中に連絡が来ていたぞ」

「わっ！ はじめての接触だね！ それでmお父さんは、なんだって？」

『明日あたり、標的はエサに食らいつく可能性有り』だそうだ。……後、『空の状態も問題ない』とも」

「そ、そっか。……いよいよなんだね。緊張してきた……。でも、いつも思うけど、お空の天使様も酷いよねー。私達、正義なのに」

「それも仕方ない。天使は正悪を判断する知能は無く、結果だけを見て行動を移す。

……そこには、理念も意志も信念も何もない。……云わば獣も同然だ。とお父さんが言っていただろう？」

「うー、融通訊いてくれたって良いのにな」

「ぶすつ、と剥れるツクシだったが、アカメは軽く笑った。

「でも、問題は無いだろう。毎日の様に、上にいる訳じゃない。いたとしても、数日程度。……何よりも優先される事項だから、休息期間とでも考えれば、気も楽になる」

「ん、それもそうだね」

「だろう? ああ、色々と考えてたら、腹が減ってきた……」

アカメは、ひとしきり笑った後に、盛大に腹の虫を啼かせて、険しい表情をしていた。「ふふ。アカメちゃんはいつもそんな感じだよ! つとと、ほら、アカメちゃん」

アカメの腹の虫が合図になったのだろうか、アムーリヤが顔を出して、笑顔で手招きをした。

「はい、お待ちかねのご飯の時間だよ。2人とも」

「ほんとか! アムーリヤ!!」

「ほんとだよー。そして、驚いて! アカメちゃん! 本日はおかわり解禁だからっ!!」
「~~~~~!!」

言葉にならない程の歓喜。アカメは満面の笑みで、アムーリヤに抱き着いた。

「よしよし、つて、餌付けされちゃってるよ。アカメちゃん」

「ご飯が何よりも大事だ。問題ない!」

「ふふ。ツクシちゃんもほら。あなたたちには、いつもお世話になってるからね? 今

日だつて2人のおかげで大盛況だったからっ！」

「い、いえいえ。私達の方がお世話になつてますよう 拾つてくださつたんですからっ
！」

ツクシは慌てて、お礼を言い返す。

アカメはアカメで、ご飯を頭に思い浮かべているのだろう、心ここにあらずの状態だ。
「ふふ。ほんとに良いの。あー、アカメちゃん、ツクシちゃん。変わりと言つちやなんだけど……、今日の出発時間、大分速めるけど、良いかな？ 身体は大丈夫？」

申し訳なさそうにアムーリヤは言うが、アカメは全く問題ない、と言う表情。

「肉さえ食べれば、力が出る!!」

「私も問題ありませんよ。でも、どうしたんですか？ 確か、先日言つていたスケジュー
ルと違うと思うんですが」

「それがね……」

アムーリヤは、表情を険しくさせて、伝えた。

密告があつた、と言う名目で、話すのは例の盗賊たちの事だ。

「こ、怖い話でよく出てくるシラナミ山の盗賊たちが……」

「うん。北の異民族も混じつて、ほんとに好き勝手やつてる連中でね……。最近活動
範囲が広がつた、つていう情報もあつて、念のために早く離れよう、つて事になつたの。

だから、早くご飯食べちゃって、アカメちゃんの言う通り、力をつけて さっさと離れ
ましょ?」

「了解した!!」

アカメは気合十分に、炊事場用テントへと駆け込んだ。

ツクシは少々苦笑いをしつつも、その表情は強張っている。不安なのだろう、と察し
たアムーリヤは、ツクシの頭を軽く撫でた。

「大丈夫だからね。皆だって、ついてるし。……それに、助けてくれるかもしれないよ
?」

「助け?」

「うんつ。《空の王子様》に」

「え、空、王子……? 天使……じゃなくて?」

「あはは。いろいろと伝わってるみたいだね。私達が住んできた所は、空の王子様、つてよ
く言ってたかな? 色々と助けてくれた話もあって、女の子たちの間で言い出して、そ
れがずくずくと昔から定着してた、らしくてね」

ぱちんつ、とウインクをした。だが、直ぐに苦笑いをする。

「生憎、今は空を飛んでないから、無理かもだけど、もしもの時、そのタイミングかも
しれないじゃん?」

「そ、そうですね。そうだと嬉しいです」

ツクシは、アムーリヤの様に考えていないが頷いていた。

件の存在が空を泳いでいない事は、調査済みだから、そして 何よりも統計を入念にとつた周期的にも、現れる可能性は非常に低い事も判っている。だから、有りえない。……もしも 万が一 あれとすれば、非常に面倒な事になってしまう。

だからこそそのツクシの表情だった。

「ほら、いこ。ツクシちゃん」

「はい」

アムーリヤは ツクシの手を引いて、アカメに続いて向かっていった。

——大丈夫、今度も乗り越えられる。

彼女の頭にあるのは、自分自身に言い聞かせているのは、その言葉。時代はまさに混沌であり、弱肉強食と言つても良い。……己を、大切なまもるには、力が必要だと言う事も判る。

そして、これから 目指す相手は——より強大な力を携えている化物。それこそ、エビルバードが可愛く思える程に。

目的を、約束を達成する為に、こんなところで躓く訳にはいかない。

「(アカメちゃんやツクシちゃんたちも、しっかりと守つてあげないといけないしね)」

まだ幼さが残る新人の少女2人を思うアムーリヤ。

だが――、現実には甘くは無く、この世は残酷である。

それを強く思い知る事になるのは、この時は知る由も無かった。

第3話 撃たれたから、死ぬ！ ……あれ？

「いやあ、本当にびっくりだよっ！」

「確かに。運動神経が良いだけじゃなくって、すごく強かったんだね」

陽気な声が、夜の町に響いていた。

一座の全員が無事に次の興行の町へと到着していたのだ。

「〴〵むしや、もきゆ……」 正直言つて、山奥で狩つていた危険種の方がよっぽど手ごわい」

「だよね。動きも断然素早いし、神出鬼没だし。あんなに綺麗に当てられないと思う」

いつもの様に、肉をむしやむしや、と食べているアカメと、そんなアカメを見て、にこやかに話すツクシ。……2人を見て、苦笑いするのはナタリアとアムーリヤ。まだ幼い子供の会話とは思えないから。

だけど、このご時世。戦える子供は数知れない事も知っている。そうしなければ生きられなく、自然の中で鍛えられ、生きる術を学んだのだろう事も理解できた。だからこ

そ、心の底から思うのだ。

「……野生児つてすごいわね」

「右に同じ……」

そして、何よりも 苦笑いをしつつも感謝してもしきれなかったのもあった。

いつも自分にも他人にも厳しく、寡黙であるコウガが、珍しく表情を和らげた。

「ありがとうな。お前たちが奮戦してくれたから、こうして全員が無事だったんだ。

……本当にありがとう」

「……仲間なら当然だ」

「そうですよ」

アカメは別に気にする様子も無く、ただただ黙々と肉を平らげ続け、ツクシは 両手を振ってそう言っていた。

□ □ □ □

そう——忠告は、的中したのだ。彼が言っていたのは、この事なのだ、と一座の誰もが、そう思った。

それは、つい数時間前の出来事。

次の町へと急ぐ一行は、馬車を走らせていた際に、件の盗賊団に襲われたのだ。

先ずは、馬を殺られて退路を絶たれた。積荷、商売道具の全てを投げ捨てて逃げたとしても、相手も馬を携えている為、逃げ切る事はまず出来ない。

そして、数的にも圧倒的に不利。多勢に無勢だと言つていい程だ。その上極めつけは相手の性質。残虐無比で悪名高い盗賊。老若男女関係ない、と言う話は間違いなく。

『男は皆殺し、女は足の腱を切つて捕獲』

と言つていた。

もう、戦つて勝つしか生きる道は無い、と腹をくくるのは早かつた。

以前に、この状況よりも遥かに絶望的な危険種の群を目の当たりにした事から、そこまでパニックにならなかつた様だつた。

だが、驚くのはここからだ。

新人の内の1人であるアカメが徐に、盗賊のリーダーであろう男の方へと歩み寄ると。

『お前たちは、噂通り、皆にそう言う事をやっているのか？』

と平然と訊いていた。

仲間が止めようとするが、構わずに。

『決まっている』

と、下衆びた笑みを浮かべて、己の欲望に忠実な獣の顔になって舌なめずり。性欲処理にでもさせようと考えていたのだろう。アカメの事を見ながら

『皆の便所になるん』

と、言っていたのだが……、最後まで言い切る事は出来なかった。

何故なら、その喉笛を素早く、正確に、何よりも一切の躊躇いもなくアカメが斬り割っていたからだ。

『ならば、葬る』

盗賊団のボスの鮮血が舞い散る。そんな場をまさか見る事になるとは思っていない。かかったメンバー達は、一瞬だけ唾然としたものの、血の気が多い性質もあって、直ぐに反撃をしようとするが……。

『ようしつ、全弾命中っ!』

ツクシの放った弾丸が、盗賊達の頭部に命中し その命を穿った。

2人が先駆けとなり、その後の決着は早かった。

リーダーを失い、更には想像をはるかに超える戦闘能力を持つ2人。

統制が保てなくなるのも時間の問題で、瞬く間に殲滅する事が出来たのだ。

□
□
□
□

アカメとツクシ。

2人の力量を見て、……何よりも、以前 大物に断られた経緯があつた事も後押しした様だ。

「よし！ 決まつた!! アカメ達にも協力してもらおう!!」

座長の一言である。

前回と違うのは、アカメやツクシが一座に加入している、と言う点だ。彼は 全くの無縁であり、本当に偶然通りかかっただけであり、腕に惚れ込んでの突然の勧誘だったから仕方が無かつた、とも言える。

だが、アカメ本人の口からも、《仲間》と言うセリフが出ているから、勧誘は出来る、とも判断が出来た様だ。

だけど、易々と首を縦に振れないのは、コウガ。

「それは……、前回の事もあるし、子供だから、と言うつもりは無いが、まだ早いんじゃないか？」

「……ああ。確かにそうは思うが、後々でいいだろうさ。だが、2人には正体をきちんと話しておきたいんだ。あの時は、手順をすつ飛ばしてしまつたからな」

座長が告白したのは、この旅芸人の一座、で通っているサバティニー一座には、裏の顔がある。

——国を変える為に動いている存在。

平たく言えば、国の反乱軍に通じている、と言う事だ。

「その腕を見込んで頼む。いずれ、ワシ達に力を貸してくれないか?」

力ある者のスカウトも、仕事の内の一つで、各地を回っている理由は資金源の確保もあり、更には情報収集をしているのだ。

これまでの経緯を簡潔に説明しつつ、理解をしてもらおうとコウガ達が説明をするのだが……、こんな話を突然した所で、理解出来るとは到底思えなかった。

だから、アムーリヤは 混乱している、と思つてツクシに声をかけた。

「ごめんね、急に何のことか判らないとおもうけど、少しずつ 説明はするから。ゆっくりと考えてね」

ツクシの頭を撫でながら、そういうアムーリヤ。

2人が加入してくれれば、心強く、幸先だつて良いと思える。彼が言っていた『危険』をも打ち砕いてくれたのだから猶更だ。更に言えば、この勢いのままに また、彼と出

会う事が出来れば……、うまくいくかもしれない。歳は、きつとアカメとツクシ、2人と近いと思うから、話も会うかもしれない。……ひよつとしたら、もつともつと親交も……あるかもしれない。

「（んー、でも、あげたくは無いかなく？ あの子の事、好きだしっ♪）」

アムーリヤは、能天気にもそう考えていた。

圧倒的な力を見せた後に、空腹で顔を顰めて……、更には歳相応であろう綻んだ笑顔。ここまでの、ギャップは未だかつてお目にかかった事が無かったから。

「アムーリヤさん」

そんな時。ツクシから返事があった。いつもと変わらない、のんびりとした口調。……だけど、一瞬、ほんの一瞬 寒気を感じた。

そして、寒気を感じた時はもう既に遅かった。

突然、轟音が響いたかと思えば、目の前が赤く染まった。

何が起きたのか、判らない。ただ、一瞬で思考を赤黒く塗りつぶされ、次には凍てつく冷気を感じた。深い深い冷気。それがいったい何なのか。

……それは、黄泉から吹き込むあの世の風だと理解したのは、自分が倒れたのだ、と

自覚する事が出来たから。

「答えはもう出ていますよ」

轟音の正体は、ツクシの発砲音。

アカメが盗賊を斬った時、或いは、ツクシが盗賊を打ち抜いた時と同様に全くの、一切の躊躇もそこには無い。

アムーリヤが撃たれても、誰もが動く事が出来なかつた。

だけど、音を立てながら、倒れ伏した時に、漸くナタリアが動く。

混乱は隠す事が出来ないが、それでも 撃たれた事実は変わらない。だから、ツクシを止めようと、武器を構えたのだが、武器を持った腕が――、無くなってしまっていた。

「裏が取れてしまった。……用心深く隠していた様だが、訊いたからには、標的《ザバティーニ一座》………全員、葬る」

次に聞こえてきたのは、アカメの声、そして 舞い散り降りかかるナタリアの鮮血だった。

——ああ、私、頭を撃たれたんだ。

頭を撃ち抜かれたアムーリヤは、何故か 考える事が出来ていた。

自分自身が何処を撃たれたのかも、何故かは判らないが、完全に理解する事が出来ていたのだ。頭を撃たれば、普通は死ぬ。誰もが知っている常識だ。

だが、頭を撃たれば、……その本人の精神はどうなるのか、それを完全に知っている者は、現世には誰もいない。それは、当然だ。《死んだことがある者》などが要る訳が無いから。

——だけど、意識はまだ、この場に留まっている。死にたくない、と言う想いが強いから、この場にまだ存在する事が、肉体が死んでも、精神だけでも留まる事が出来ているのだろうか。時間の流れる速度と、体感時間に大幅にズレがある。

死の間際に見る走馬燈ではない……、死んだ後に、考えるんだから。

——すごく、どうでもいい事、考えてる。……みんなが、仲間たちが、殺されていつてる、つて言うのに。

眼も見えないし、耳も聞こえないと言うのに、感じる事は出来ていた。

阿鼻叫喚……、場は地獄絵図、とも言つていい。アカメやツクシの本当の仲間たちが、全員を皆殺しにしている。

長く苦楽を共にし、共に、国を変えよう、と同じ志を持つて集つた仲間達が……、無慈悲にも斬られ、殴られ、撃たれ、黜られ……蹂躪される。

聽て、誰もが喋らなくなった。……皆、死んだのだと言う事が理解出来た。

——私は、いつ死ぬ? いや、もう死んでる?

誰も、何も答えてくれない。

だけど、間違ひなく言えるのは、今の自分を意識する事が出来ている、と言うこの不可思議。……いや、これも地獄だつて言つていい。死ねば、何もかも無くなる、と思つていた。志も、記憶も、全部。

だけど、全く消えない。

——……わからない。いつまで、こんな、こんな、……いき、地獄を感じないといけない……の？ 死んだんなら、はやく……ぜんぶ、絶つてよ。わたしの何もかもを、ぜんぶ、けてよ……、こんなの、あんまりだよ……。

仲間達が死んだ悲しみ、帝国への憎しみ。あらゆる負の感情が入り乱れている。幸いなのは、痛みを感じない、と言う所だろうか。いや、それもある意味では地獄だった。

五感ではなく、云わば第六感。

それ以外に何も感じられないから、終わりがなく、永遠に続く、とさえ思えてしまうから。

『危険が迫ってる。アムに』

そんな時不意に……声が聞こえた気がした。

『厳密には少し違うかな。アムだけじゃなくて、一座全員に』

その声を聴いたのは、もう、ずっと昔の事、だと感じてしまう。

『気を付けてね?』

身に迫る危険は、盗賊達ではなく、この事を指していた。
それを理解した時

——ゴメン、ね。せつかく、おしえてくれたのに、なんにもできなかつた。わたし、たちが、よわかつたから。そう、ぜんぶ、そのせいで。

そう、世界は残酷。弱者は強者に淘汰される。され続ける。

それが、自然の摂理だとも言える。生態系の頂点。強者が糧とし続ける。未来永劫、続く事だろう。

だが、1つだけ——例外がある。この現世の理を超越する様な例外。

——!!

アムーリヤは、何かを見た気がした。

いや、眼で見た訳じゃない。……感じて、その何かの形を理解する事が出来た。心に
映写する事が出来た。……いや、させられた、と言うのが正しいかもしれない。

それは、とても、とても 大きな一羽の鳥。

第4話 返したから還る!

その鳥——半身は白く、半身は黒い。

帝国に、いや この世界に長年に渡って言い伝えられ続けた伝説の鳥。

《神鳥》の話。

その言い伝えは 辺境によって、異なる部分は出てくるものの、大筋では同じである。言い伝えられている相反するとも言っていていいその色が意味するのは、色の数2つ。

《慈愛》の白と《断罪》の黒。故に天使と悪魔とされていた。

帝国では、遭遇、そして何よりも断罪、その機会が他に比べて圧倒的に多い為、何処よりも根強く伝わっていた。

ただ その鳥には 慈愛も断罪も善も悪も何もない。ただ 無害には無害、有害には

有害でもって、空より降りかかってくる。感情無く審判を下す。そう、恐れられていた面もある。

即ち——厄災である。

そうとしか伝わっていない場所もあり。勿論、それは事実な面もあつたりする。時代によつて、異なる部分を見せるが、大体は変わらない。

だが、帝国では、弱者を糧にし続ける為政者が多い故に、脚色して人々に伝えなければならなかつた、と言う裏の事情も勿論あつた。

それは、己の身に降りかかってくる可能性のある厄災なのだから、一般市民が、神鳥を利用し、妙な企てを起こさない様に、時間をかけて、浸透させていたのだ。

だが、天をも味方につけようと、或いはその力を得ようと、帝国自体が何度も試みた事ではあるが、歴史上では一度も成功例が無い。

そんな代物を、一般人が得る等とは到底有りえない。出来るとするならば、因果律を覆す様な真似が出来る神しか無いだろうとされているが、帝国に対する唯一絶対の懸念に對しては、念には念の入れようだつた。

神鳥伝説は、情報操作によって 誰もが知っていて……、それでいて本質は誰もが知らない代物、である。

それは、帝国であつても例外ではない。

□
□
□
□

——こ、これ……は？

目の前に現れたのは一羽の鳥。(厳密には、目の前、じゃないと思えるが……)

ゆつくりと、それでいて大きく翅を羽ばたかせながら、近づいてくる。人間など、丸のみにしてしまふ程の大きさの怪鳥だった。

だけど……、不思議と恐怖の類は無かった。

さつきまで、自分が殺された事、仲間達が殺された事、帝国への憎しみ、………死ぬない永遠の恐怖。それらの感情が渦巻き、恐怖していて冷え切っていた筈の心がまるで洗い流されていく様だった。

大きな鳥は、その姿に見合う大きな翅を広げ、臆て白い輝きを放つ。

眼も眩む光は、暗黒の世界を一瞬で白く染めた。

「っっ!!」

白く染まった瞬間……、突然 眼を開く事が出来た。まるで、身体の動かし方を忘れて急に思い出せたかの様な、自由の効かなかった身体が突然言う事を訊いてくれたかの様な、そんな感覚。

「い、これは……っ」

眼を開き広がる光景。アムーリヤ自身が覚悟していた地獄絵図は、そこには無かった。

あの暗黒の広がる世界で、感じられた現世は、仲間達の鮮血が、四肢が、臍物が、………全てが切り刻まれ、血の海と化していた筈だったが、まるで嘘の様だ。

仲間達は……、確かに倒れているものの、誰一人として 血を流している者はいない。

斬られた後も、まるで無い。ただ、生きているかどうかは、一見では判らないだけだった。

そんな光景に唾然としている時だ。

『——丁度、30分くらい、だね』

突然、背後から声が聞こえた。

その声に反応して、身体に電流が走る。思わず飛び上がってしまふ反動を抑えつつ、ゆっくりと振り返った。一度、殺されると言う体感をしたアムーリヤだが、……恐怖を感じなかった。……その声が、誰のものなのか……、それがよく判ったから。

「おはよう。アム。うん。良い夢は見られなかったみたい、だね。いつもの顔が崩れてるよ。悪夢には、敵わない、って事かな」

あの少年が、立っていたんだ。

再会したあの時と、まるで変わらない笑顔で。

「つ……、つつ……」

言葉にならなかった。

少年の背後に、光の扉が開く。後光が後ろから差し込む。そんな光景を見た気がし

た。

「ちゃんと気を付けて、って言ったでしょ？ ……詳しく説明しなかったのは、悪いと思うけど。ちよつと色々とおつたから」

苦笑いをしている少年を見て、漸くアムーリヤは声を出す事が出来る。

「きみ、は…… い、いや、あなたは……、いつたい……？」

目の前の少年は、間違いなくあの少年だ。それは間違いない。自分自身の事を『アム』と呼ぶ事もそうだし、『気を付けて』と言った事もそう。あの場には2人しかいなかったんだから。

「混乱、してるみたいだね。うん。当然だと思う。全部は出来ないけど、今の、アムの……、皆の事だけは説明するよ」

正体について、答える様な事は無く、説明をした。

何故、生きているのかを。

「巻き戻した。君達の時間を。だから生きてるんだよ。色々制限があるから、あまり長くは戻らないし、さっきの子達が残つてると、色々面倒だから、少し待つ事になったけど。遅くなつてごめんね？」

「い、いや……その……」

「ん？ やっぱり、判らないかな。説明するの、苦手なんだ」

「そ、そうじゃなくって……、おどろきの連続、だったから……。でも」

アムーリヤは、自分自身の身体を見た。

手を開き……そして握りしめる。2〜3度繰り返し、その後は撃たれた(恐らく)であらう頭、額を触った。

そこには、傷口などある筈も無く。手に血も付かなかった。

「助けてくれたのは、いったいなんで……? それに、君は本当に何者……? つ……」

アムーリヤは1つの可能性を見出した。

その圧倒的な技量、超常現象。それらを可能にする存在。

「帝具……」

思わず口にしたのは《帝具》。

それは、今から約千年前。

大帝国を築いた始皇帝が国の全ての叡智を結集させて製造したと言う無数の兵器。

今までは、文献でしか知る事が無かった伝説級の装備。

そして、その能力は、まだまだ未知数なものが多く、時間や空間をも操る帝具があつても不思議じゃないのだ。だからこそ、目の前の少年がしてきた数々の超人的な力も、その帝具を用いてのモノであれば、と納得できる。

だけど、返答は違った。

「帝具？ ……んーと。それとは違うよ。天然の力」

「え……………」

そうとだけ言うと、少年は踵を返した。

「でも、これで恩は返す事が出来た。これからは、気を付けてよ。もう、あの子達はこの周辺にはいないみたいだけど、アム達が生きてるの、バレたらまた、さっきの子達が来るかもしれないから、十分に注意してね。何度も助けられないから。今回もたまたま、だからね」

「ま、まって……………」

手を伸ばすが、少年を掴む事は出来なかった。

「恩、つて。いったい…………？ 私、あなたには 何もしてあげれてない。守つて貰つてばかりなのに…………」

歩いていく少年の背中を見ながら、つぶやくアムーリヤ。

その言葉を訊いて、少年は振り返る事こそ、無かったが、立ち止まって一言。

「(は)んだよ」

「え？」

返答は貰ったものの、何を言っているのか判らないのも当然だろう。だけど、直ぐに理解する。

「ほら、初めて会った時、恵んでもらったから。アムに。……一飯の恩は忘れない。そう、決めてるからね。……勿論、アム自身の事も好きだから、と言う事もあるよ」

「っ」

アムーリヤは、思わず絶句した。好きだから、と言う言葉も多少あるが、それよりも、少年が言っている、『ごはんを恵んでもらった』と言う言葉だ。

それは、初めて会った時に、おなかを空かせていた彼にあげた保存食の干し肉。たったそれだけの事に、ここまでのをしてくれた事に、驚きを隠せられない。

「美味しかったんだ。ありがとね?」

「そ、それだけで、こんなに……?」

「うん。でも、これでおあいこだから、あまり求めちゃダメだよ? 僕みたいにするとは限らないから」

そしてその後、だった。

振り返った少年は、軽く手を振り微笑むと、ゆっくりと宙に浮く。地面から足が離れ、瞬く間に上昇していく。それを見たアムーリヤは、今更ではあるもの、大事な事を訊き忘れていた事に気付く。

「ま、まってっ! き、君の名前……、訊いてなかった!」

そう、彼と一番話したのは、一座ではアムーリヤ。

だけど、そんな彼女でも、彼の名前を訊いてないのだ。一緒に行動をした時間が短かったから、と言う理由も勿論あると思うけれど、エビルバードの群を退散させる、と言うあまりに圧倒される光景を見せられたから、なのかもしれない。

『ん……、僕の名はね』

もう小さくなっていると云うのに、彼の声だけは、届いた。……心に直接響いたのか
もしれない。

『シロ。じゃあね。アム』

それが最後の言葉だった。

《シロ》と名乗る少年の姿は完全に見えなくなり、それと同時に、仲間達も目を覚まし
始めた。

まるで、止まっていた時が動き出したかの様に――。

「み、みんな……っ」

生きている事を見たアムーリヤは眼に涙を溜める。

仲間達の誰も自分自身は死んだ筈、と恐怖していたのだが、涙ながらに飛び込み、抱き着くアムーリヤを見て、どうやったかは分からないが、自分達が助かった、と言う事実が判つてきた。

その後は、アムーリヤから状況を説明される。

簡単には納得出来なかつたが、白昼夢を見ていたにしては、あまりにリアルすぎるし、何より全員が共有している事、そして、生きている事が何よりの証拠である、と納得する事が出来た様だ。

「シロ。そう名乗つたのか……。アムーリヤ」

「うん」

コウガは、アムーリヤに再度確認を取ると、ゆっくりと頷いて、そして呟いた。

「もしかしたら、彼はシロ……。白。白と黒の神鳥の半身、……。その化身、なのかもしれない」

「「え……。？」」

コウガの言葉に皆が注目した。

「あれの言い伝えは、場所によつて様々だ。天使だったり、神だったり、様々な形容がある。……。オレ自身が何年か帝国に潜つてた時に訊いた話にも、バラつきがあつた。……」

だが、田舎の町では、こう言われていたのを思い出してな」

コウガは、空を仰ぎながら答えた。

「恩は決して忘れず、報いる童の伝説。その町では、その日、一日を穏やか暮らすだけではなく、神として崇めて、供え物をし続けているそうだ。老人たちは、口を揃えて言うそうだ。『過剰に接するのは良くない。程々を一番好む』とな」

コウガの言葉を訊いて、ザバティーニは察した。

「引き込もうとした時、嫌そうな表情をしていたが……。求められ続けるのは嫌だった、と言う事なのか……？」

「そうかもしれない。腐った帝国を根本から正したい、と言う想いは、確かに大事だ。……だが、それはあくまで人間側の都合だ。……彼には関係が無かった」

「それでも」

アムーリヤは、助けにくれた少年を、シロを思い描き、呟いた。

「彼は、とても優しくかった。だから、私達の事だつて助けにくれた。だから忘れちゃいけない。……シロの事」

「当然、だな。掛け値なし、いや釣りがくる程の恩人だから」

アムーリヤの言葉に皆が頷いた。

頼り続ける訳にもいかない事は判る。そんな事が出来るのなら、今の帝国が腐りき

る様な事は無かっただろうし、何よりも帝国が黙ってみている筈がないと思うから。あれだけの力を、得ようとしれない訳が無いから。

「さて、これからの事だが」

ぱんつ、と手を叩いて、皆の顔を見るザバティーニ。

「俺たちは一度死んだ身、もう怖い物ない、……と、言いたいが、それは無理だ。めっちゃ怖かったし、コウガ達が殺られた時は、脇目も振らず逃げ出してしまったよ。……二度も味わうなんて御免だ。だが……」

ザバティーニは全員の顔を見た。

確かに殺された。自分自身も最後は逃げた事もそうだ。痛い目をみれば、動物は学習し、回避しようとするのが常。……だが、帝国に逆らう意味を改めて知った今でも。

「抜きたい、と思う者は止めん。相手の強さも想定の遥か上だったしな。……もう、ワシ自身が偉そうに言える立場じゃないが、それでも、付いてきたいと思うなら……」
にやっ、と笑い続けた。

「これから南を目指そうと思うが、どうだ?」

その言葉に異議を唱える者はいなかった。

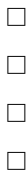
此処から南には——反乱軍……、いや、革命軍が拠点としているアジトがある。

帝国の情報の中から得続けてきた一座だったが、今回の一件で完全に消滅した（と間違ひなく思われている）。だから、同じスタンスでは、非常に危険だし、敵戦力との差を垣間見た為、無駄死にする可能性が非常に高い。

なら、意味のある行動を取ろうと思ったのだ。生きて、更に力をつける為に。

——シロ、君。ありがとう。君にもらった命、大事に使うから。……好きって言うてくれて、……ありがとう。私も、大好きだよ。

アムーリヤは、空を仰いで、高くに手を伸ばし、心に誓ったのだった。



そこは、人が、いや 生物では到達する事が出来ない領域。

青と白に挟まれた世界。

『相変わらずだ。お前は、ヒトを好き過ぎる』

そんな世界で、話し声? が聞こえてくる。

『うん。好きだよ。でも、云われた通りじゃん? 干渉しすぎて無いし。今回だって、ほんとにたまたまだったし。……って、自分では思ってるつもり。貰ったから、ちゃんと返した。それだけ』

『はあ。記憶継いでると言うのに、判らん訳ないだろ? 基本、何するも自由だが、関わりすぎると、色々とめんどくさいぞ。過剰にいくと直ぐに飽きるし、何より退屈になる。……お前の時間も少なくなるぞ? そもそも、飯なんぞ、食う必要だって無いだろ。妙な事覚えちゃって』

聽て、一面の白が晴れ渡り、鮮やかな緑が、大地が見え始めた。

どうやら、遙か上空にいる様だ。——大きな翅を羽ばたかせながら。

『それに関しては、少ない方が良いかもしれないね。逆に長過ぎるからこそ、退屈しちゃう、って思うんだ。ご飯だって、美味しいよ? 満たされるのだから、好き。自由なんだから、良いじゃん』

『はあ。まあ 一理はあるな。ん？』

大きく羽ばたかせた翅に陰りが見え始めた。

『……時間だ』

『判った』

それは、太陽が沈み、夜が来る様に…… 黒く、闇色に染まっていく。

暗黒と化した、ナニカは 羽ばたかせるのを止めて、地上へと降りていくのだった。

第5話 山道は疲れる……

それは、とある場所での出来事。

3人組が山道を歩いていった。

歩けど歩けど、続くのは山道……、時折 木々があつたりするけど、殆ど不毛の大地。何時になつたら目的地へと辿りつくのか判らない。寧ろ、目的地はまだ定まつて無い状態だった。小柄でターバンを頭に巻き付け、表情の殆どが見えない者、声色からそれなりに年配の老婆だろう。その老婆の後ろに2人の少女がいる。

その2人の内の1人、全体的に遅れ気味の少女は、げんなりと表情を落としていた。その容姿の特徴は、やや薄く腰まである長い赤毛、山道を歩くには、少々華奢ではな
いか? と思える程線が細い。

「バン族の要人の暗殺はもう済んだから、次行くよ」

「えー、次ってまだ 指令は来てないじゃないですかー。ちよつとくらいいゆつくりして

も、罰は当たりませんよー？」

「つべこべ言わず、さっさと来な。町に帰る道中に、伝書鳩は来る筈さね。……新人のアンタを更に使って、飛ばせたって良いんだよ。その方が大分短縮になるからねえ」

その言葉が、ぐさっ！ と少女の華奢な身体を貫いた。

それも仕方ない。つい先ほどまで、それこそ馬車馬の如く、動かされまくり、様々な場所の偵察やら、監視やらをやらされ続けたから。

これ以上、同じ様な事をやらされては、体力が完全にすっからかんになってしまっても不思議ではなく、体力が切れたら、氣力を、と言われかねない。……その点を考えれば、『歩いていく』と言うのは、それなりに氣を使ってくれた？ と思える。

彼女が持っているとおある道具を使えば、文字通り飛ぶ事は出来る。……が、非常に疲れるのは目に見えているので、全力で拒否をしたい所だ。

「それは、勘弁願いたいです……教官。私、昨日から飛びっぱなしで……。翹って、思いのほか、変などこの筋肉使うみたいで……。きょうかあん……。このままじゃ、胸筋がついちゃう……。女子力低下は、乙女にとってあるまじきです」

「その方が良いんじゃないかい？ さして、ふくよかさがある訳でもなし。筋トレでもして、引き締まった方がプラスになる、ってもんさ」

「ちよっ！ へ、平均くらいはありますよっ！ 平均くらいっっ！！」

「タエコを見て、同じ事が言えるのかねえ？ 女として」

「ふぐつ……」

またまた、ぐさりつ、と言葉の刃を突き立てられてしまった。

《タエコ》と言うのは、共に行動をしている3人の最後の1人。黒髪をポニーテールで結つて、一部、色合いの違う髪束が触覚の様に前髪よりも前に飛び出ている少女。

……同性の自分から見ても、確実にプロポーション負けちゃってるから、思わず自身胸元を見下ろしてしまう。

突然自分の話題にされたタエコだったが、さして気にする様子も無く（興味ないと思われる）ただ悠々と、目の前の老婆に付いて行くだけだった。

「兎も角、さっさと行くよ。休憩ならここを超えたらだ」

「……ここって、この山道を？」

「それ以外あるかい？」

「な、何km程歩けば？」

「ん、まだ耄碌してないつもりだよ。大体42km、つてところかね」

「……………」

見事な目測である。山道のアップダウンを考えれば、多少増減はするだろうが……、それでも完璧。

まだ、殆ど歩き始めて間もない、と言うのにも関わらず、早速足が棒になりそう……、と頭で思ってしまうと、益々足が遅くなる。

「トロトロするんじゃないよ、チエルシー。なんなら本当に飛ぶかい？ 飛んだらさつさと終わるから、ワシら背負って飛んでみるつても試してみたいねえ」

「歩かせて頂きます」

大きく、両手を交差させて、× の字を作り、せつせと追いつく少女。

その苦勞人女子の名はチエルシー。

「うう、殺し屋も楽じゃない……」

「当然。オールベルグの鍛錬はこんなもんじゃないよ」

「……知ってるつもりです……」

がつくりと、項垂れてしまう少女は、今日も足を棒にして頑張る他無かった。

□ □ □ □

と、言う訳で、ウン時間掛けて山登りを開始。

昇れど昇れど、進めど進めど……40kmと言う距離はなかなか遠く、険しく……つまり、さっぱり終わりが見えない、と言う事。

もうこの際、伝書鳩の1つや2つでも飛んできてくれやしないか？ と時折空を見るチエルシーだった。

「まあ、次の任務の検討はついてる」

「うへ……。へ？」

道中では、殺し屋としての心得だとか、色んな説教を受けてしまっていたが、何やら気になる話題が聞こえた為、疲れていたチエルシーも、耳を傾ける事が出来ていた。

「少し前、『反乱軍の収入源である国外との交易ルートを調査中。直に判明』って偽情報で帝国側に流してるからね。調査中が、判明になったら……。馬鹿でも判るだろ？」

「交易ルートの運び屋になりすまして迎撃する……と言う訳ですね。次の相手は帝国の部隊かあ。最近、少数精鋭のやばめな部隊が出来上がりつつある、って聞いてるし、大変そう……」

身を粉にして働き続けなければならぬ現状は、やっぱりげんなりしてしまふ、と言うものだ。

「もつともつと体力つくな。それも、生き残る為に必要さ。チエルシー、お前の変身は恐ろしく、応用力も高い。だけど、肝心な所でモノをいうのは、やっぱり体力だからね。肝

に銘じときな」

「はあ〜い。……でも、もうそろそろマジで足が棒……」

説教は小言を訊きつつの、歩き続け。ちよつとした拷問も良い所だ。だから、精神的にも体力的にも……、毎ターン、HP、MPゲージをガリガリ削られて歩く様なモノだから、とうとうチエルシーは悲鳴を上げていた様だ。

「……おんぶする」

「やったーっ！ タエコさん、愛してるっ♪」

かと思えば、見かねてくれたタエコが、背負おうと申し出て、光の速さで元気を取り戻すチエルシー。……演技力もなかなか鍛えられている様だ。本気出したら、もつと行けそう。

「全く、甘やかすんじゃないよ。と、言いたいけどそろそろ休息にするよ。……1通来た様だ」

「……みたいだね」

「わーっいっ♪」

遠い空から、1羽の鳥がやってくる。その手には巻物が握られており、通信手段の1つとして活用されている伝書鳩だ。

「30分休憩にする。色々ところちから伝える事もあるからね。適当に休んで良いよ」

「んー、この辺に水辺でもあれば良いんだけどお……」

きよろきよろ、と辺りを見渡すが、生憎今の視点では限界がある。

「きよーかん。ちよつと、探してきます。出来たら水浴びもしたいです!」

「はあ、あまり遠くに行くんじやないよ。……ま、この辺には 集落の類も無ければ、周囲に気配も無い。大丈夫だとは思うが、おつ死なない様に」

物騒な事言ってるけど、それがスタンダードである事をチエルシーは知っているし、久しぶりの休憩でテンションが上がってるから、動じない様子。

更に、汗臭さを段々感じられる様になつてきたから、この辺りに水辺、湖があつたら、と言う期待感もあつてか、色々とテンションが上がってる様だ。……さつきまでの何だったの? と訊きたいが、馬耳東風だろう。

「んじや、ちよつと行つてきます」

「付いて行くのか?」

「大丈夫ですよー、タエコさん。良い場所があつたら、また戻つてきて、教えますから。一緒に水浴びでもしましょうよ。山の中だけど、ちよこちよこ森だつて見えてきたし、ひよつとしたら……、つて期待も出来るでしょ?」

「ん。……ありがとう」

チエルシーは、ぶんぶん、と手を振つてそう伝える。

因みに、ちよつとした策士。一緒に行つて、もしも見つけたら、これまた一緒に水浴びして、帰つて来て……つまり、最短コースになつてしまう。だけど、自分ひとりで周囲の散策の名目で、行つてきて、見つけて 先ずは自分が入り、その後にはタエコに伝えて入つたりすると……、ひよつとしたら、休憩の時間が増えるかもしれない！

と言うチエルシーの少々浅ましい考えだ。

教官、と呼んでる老婆に、あつという間にバレてしまいそうな気がするから、早速行動を開始。取り出したとある道具を使用し、瞬く間に物質質量を全く無視した形態に変身。

翅を羽ばたかせながら、チエルシーはまるで、籠の中から脱出し、自由になつた鳥の様に、大空へと羽ばたいていくのだった。

第6話 驚いたので隠れる!

——やっぱり、空からであれば探しやすいし、調べやすいなあ。

チエルシーは しんどい思いをしつつも、改めてそう思っていた。

空を飛んだ為、山道も、もう少しで終わる事も確認出来て、よりテンションが上がる気持ちだった。

「鳥は……、疲れるけど、まあ よしとしようかな。目当てのモノ、見つかったしっ♪」
チエルシーが変身している姿は、メガフクロウと呼ばれる人程の大きさの鳥。元々この辺りにも生息している為、擬態としては十分過ぎるだろう。一応、警戒をして選んだ事と、この種が最近になって、少しだが慣れてきた事もあって、チエルシーはこれを選んだのだ。

そして、目当てのモノ——、そう 丁度良いサイズの湖だ。

透き通る程、綺麗な湖で 上空から見てみても、そこには大型の生物は存在していないし、見えているのは、小魚が数匹。底まで見える程の綺麗さだった事も、喜ばしい事だ。水浴びに最適だと言えるから。水棲生物も、出来ればいない方が有りがたいので、いるのが無害な魚だけで良かった。

「よっ……っ」と

翅を畳み、滑空して 手頃な岩に着地すると、変装を解除。

「ふう。うふふ……、こーいうの、待つてたのよね……。最近、野宿が多くて多くて……。まあ、欲を言えば、終わった後に温泉が一番なんだけど、この際贅言言わないわ」

綺麗な湖は、自分の身体を洗い流すには最適だ。

更に言えば、何にでも変装をする事が出来る、と言うのは当然ながら衣類も変える事が出来る。何ともまあ便利なモノ。だから、さっさと着替えを完了。

「んー、誰もいないとは言え、流石に全裸になるのは、ちよっぴり不安だからね。(タエコさんは、思わないと思うけど)」

と言う訳で、水着に着替えたチエルシー。

空からも確認したし周りには誰もいないけれど、万が一が有りえる。……その辺りの羞恥心はしっかりと持ち合わせている様だ。

ゆっくりと、足から湖の中に入っていく。

「……ひゃー、冷たくて気持ち良い。ほんと、生き返る……」

足をゆつくりつけて、温度が低めの湖の水の冷気が頭にまで昇ってくる。……山道で汗を掻き、更に空を飛んで、色々と疲れた身体には最高のモノだ。

そして、今度は、水を手に掬って、身体に掛けて慣れさせると、臆ては全身を浸からせる。

「う、あああ……」

思わず悶えてしまいそうなチエルシー。

久しぶりに味わう至福の時、と思っているのだろう。……この後は温泉であつたまり、そしてあつたかい布団の中に入る……、そんなコンボだつたら、一体どーなつてしまふのか? とチエルシー自身も思ってしまった。

だけど、そんな事よりも、時間は有限。それも休憩時間ともなれば、更に短い。今の至福を堪能する事に集中させていた。

「(あんまり遅いと、教官に説教パバアロングコースされそうだし……、あ、でも あとちよつとだけなら……)」

後ちよつと、後ちよつと、と誰に対して言っているのか判らないけど、チエルシーは延長を所望している様子だ。後で、己の身に色々と降りかかってくるだけなので、別に問題ではないよ、と言いたい。

だが、そもも言えない事態が起こる。

突然、湖に何かが落ちた様で、「ぼちゃんっ!!」　と言う音が聞こえてきたのだ。

チエルシーは、仰向けになって、耳まで水の中に浸かっていたから、更に大きく聞こえてきた様だ。

「っー」

今は静寂な世界だった、小鳥の囁きさえ聞こえなかったのに、突然音がした為、チエルシーは、咄嗟に忍ばせていた道具を使用し、水面から飛び上がり、翅を羽ばたかせた。空へ逃げるのではなく、まずは湖から出て、そして瞬時に、周囲に生えている木々に紛れる様に化した。

この湖の上は空しかない。

別に大きな木の枝があったりする訳じゃないから、空から何かが落ちてきた、としか考えられない。

もしも、空に危険種の類がいたりするのであれば、今空へと飛びあがるのは得策ではない。だから、まずは地上から様子を見る事にしたのだ。そして、逃げる事を第一に考えた。

「人が気持ちよく泳いだのに……邪魔するのは誰よ……!　って、怒って出てつたりしないけどね……、ぜーったい……」

相手が何なのか、そもそも相手そのものがあるのかどうか、それすら全く判らない状況ではあるが、それでも用心するに徹するチエルシー。……極端に言えば、変に深入りせず、寧ろ臆病を心がける事で、生き残る可能性を更に上げていたりしている。

いや、それが、生き延びる為に必要である感性、だと言えるだろう。

何故なら、この世の中は甘くない。……生き延びる者は、強者か臆病者であり、生半可な力を持つ無鉄砲者、言うなら、勇者は死ぬのだ。それが現実である。殺し屋として生きる事を決めたチエルシーは、長く見てきた事であり、今までの自分自身経験から導き出していた。

湖を、そして その上を凝視するチエルシー。暫くは何も起こらず、心配は杞憂か？
 と思い始めたその時だった。

「(っ!?)」

擬態をしていると言うのに、思わず声を上げてしまいそうになる。

だが、寸前で何とか呑み込む事が出来た。

空から——、何もない上空から、何か、降りてきたのだ。

何か……、そう、どうもいいのか、直ぐには出てこなかった。敢えて言うなら、黒い何か。

黒い霧の様な、靄の様な、影がゆつくりと上から降りてきたのだ。……自分自身の頭

の中に備え付けてある辞典の中に、あんな生物？　は存在しない。全種知ってる訳ではないし、博識である訳でもないが、それでも知る限り、危険種でも　あんなのは見た事は無い。一瞬、今所属しているチームの頭領が従えているモノ、に見えなくも無かったのだが、全くの別物である事は判った。

見れば見る程、判らない。……闇だったから。まだ明るい時間帯だと言うのに、その場所だけ、夜が現れた？　と思える程に暗い。

「(何……？　アレ……??　でも、何かヤバイ。……間違いなくヤバイ。ヤバイって信号が出てる)」

未知との遭遇は、この仕事をしていて、別段珍しい事ではないが、これまでの経験から育まれた感性が、チェルシーの中で警告音を盛大に鳴らしていた。

——動いてはダメ。逃げようとしてもダメ。

変身していても、まるで　意味を成さない。何故か、そう思ってしまうのだ。一刻も早く、離れたいのに、離れる事が出来ない。木に変身したから、まるで根が地中に延びてしまった、と思える程、足が縫い付けられてしまった様に動けなかった。

「(こんななら、タエコさんと一緒に……っ。で、でも　ダメ。私じゃないと、こんな隠れ方出来ないから)」

身体が身震いしてしまう。見れば見る程、身体が震えてしまう。恐怖から、と思つて

いたチエルシーだったが、何か判らない。恐怖以外にも、何かがある。自覚は無いけど、何かを感じていた。

聽て、その闇の塊は、湖の上に立つ様に浮かぶと……ゆっくり、ゆっくりと　闇が薄くなつていく。そして、闇の中心部が一瞬光ったかと思えば、次の瞬間　闇が周囲に吹っ飛んだ。

「!!」

そこに現れたのは、男だった。……目算ではあるが大柄の男、と言う訳ではない。自分よりは大きい。タエコより少し大きいくらいだろうか。黒い髪が一陣の風で靡く。……闇色の髪。そして　黒いコートを羽織つていて、そのコートも風で棚引いていた。

『んー……んん?』

男は、周囲をキョロキョロと見渡していた。

まるで、何かを探しているかの様に。

「(……まさか、私つつ?? 私探してるのつつ!?)」

——私、何か、悪い事しましたか!?

と、思ったチエルシーだが、現れた相手に、直接確認できる様な度量は間違いなくありません。

とりあえず、裸じゃなくて良かった、と一瞬だけ思ったけど、それどころじゃない。突然空から何か降りてきて、その何かは闇？ を纏つてて、それが晴れたかと思えば人間（多分）が出てきて……、何から何まで 妖しすぎる。

「（帝具使い……、そう考えるしかない、かな？ 只者じゃないって事は間違いなさそうだし……。……もうっ、益々動けないじゃない！ ああ、なんだってこんな事に……。）」
チエルシーは 木に化けたのは正解なのか、不正解なのか、判らなくなってしまうていた。

ここからが、ちよつとしたチエルシーの災難だつたりするのである。

第7話 隠れても見つかってる!?

突然現れた正体不明の男は、一体何を探しているのだろうか、それが判らない。

正体も目的も何も判らない以上、下手に動けないし、動いてはいけない。様子を見て隙を伺うのがセオリーだと言える。だが、そんなごく一般的な兵法ではなく、ただ単純に動く事が出来ないのは、あの姿を見たからだ、と言える。

それなりの修羅場を潜り抜けてきたチエルシーには、危機感知能力もそれなりに向上している。……その警告が過去に例を見ない程に自分自身に警笛を鳴らしているのだ。

「(……ああ、心臓に悪い)」

木に変身している為、姿を隠せている訳じゃない。相手から完全に見えている位置であり、この状態であれば、本当の意味で隠れる事は出来ない。そんな事をすれば、危険種の木獣の様に、《動く木》が誕生してしまうから。一発でバレてしまうから。

だから、変身した以上は 見たくなくても、じつと我慢しなければならぬのだ。
……相手がいなくなるまで。

『……………』

「ただ、その希望的観測は……成就される事はなかった。」

湖の水面に立ち、波紋を広げながら歩いてくる男は、自分のいる方角へと歩いてきているから。チエルシーが自身に付与しているのは、完璧な変身であり、錬度もそれなりについてきていて、自信があつた。……だけど、それを嘲笑うかの様に 一歩、一歩近づいてくるにつれて、神経をごっそりと削られてしまう。

「聴て、その男が、歩いて湖から出て、地に足を付けた辺りで、男の声が聞こえてきた。「ふーん。折角だったのに、またメンドクサイ。ま、別にこんなのも珍しくもない、か。ちよつとばかり運動だな。これは」

一体何を言っているのかはわからないが、それでも 1つだけ判つた事がある。現れてから、今に至るたった数十秒間の間で男の異常性。

- 空から降りてきた。
- 闇？ を纏っていた。
- 水面に立って歩いてきてる。
- 尋常じゃない気配オーラが感じられる（チエルシー談）

細かい所を上げ出したらキリが無い程だが、それだけ感じられた事と、もう1つの事実。

その男の容姿である。

上記の連想から、どんな化物が現れるのか、と内心更に冷や冷やモノだったのだが、以外にも、その素顔は非常に整っていた。眼の形や眉、顔の輪郭などが全て整っているのだ。いわば黄金比とでも言うべき、だろうか。その上 やや、幼さもあつて、更に引き立てている。

俗にいうイケメン。だけど纏う雰囲気は化物。非常にアンバランス。

「こんな出会いじゃなかったら、声かけても良いんだけど、ね……」

チエルシーは、冷や汗をかきながらも、まだ 自分を保つ為に、冗談めいた事を考えていた。……人の顔を被った悪魔など、何度も見てきているから、優れた容姿だけで惹かれる様な事はしないけど、軽口の1つくらい思わなければ、自我を保つのがしんどかった様だ。

そして、何かを呟いていた男がゆっくりと近づいてきた。

その方向は間違いなく、自分が化けている場所付近。……まだ10m以上は離れているから、確実には言えないが、不安感が更に倍増される思いだった。

「……私の変身を、見破ってるの!? これも帝具なのに??」

チエルシーが変身に使用している道具は帝具。

その名も、変身自在《ガイアファンデーション》

どんなものにも変身できる化粧品型の帝具であり、それは種族や生物、物質と問わない。完全な隠密型の帝具であり、直接戦闘には向いていないが、その分幅が広がる。

なのだが、初見で見破られた事など一度も無い。……そんなに帝具は甘い物ではない。だと言うのに、紛れも無く、目の前の男は近づいてきているのだ。

今更ではあるが、完全に逃げる事は、もう不可能。

そして、その男の顔がにやり、と笑ったのが判った。

「動くなよー？ 動いたらどうなるか、知らんぜ。手間あかけさせるな」

そう言われて、確信してしまう。自分に動くな、と言っている事が。……そして、動かなかとも、動いても、結末が変わらない事も。

今まではこんな経験は無かったが、ここまで来れば、ただ黙って従うよりも、一か八か、仕掛けるしかないだろう。だけど、身体が言う事を訊いてくれなかった。

「(……もうちよつと、生きてかつたんだけど、ね)」

生きたいと思いつつも、きつと、楽には死ねない。……チエルシーは、そう思い描い

ていた。

□
□
□
□

殺し屋になった以上、……数えきれない程、殺してきている以上、殺してきた相手の性質など関係なく、何れは報いを受ける日が来る事など、覚悟してきていたチエルシー。恐怖を感じていたのだが、それも臆て霧散してきていた。……死にかけてた事は何度かあるが、絶対的な死を間近に感じた事は無い。だからこそ、それを前にして、感じたこの感覚は、走馬燈なのだろう。これまでの経緯。殺し屋になった切欠、その過去の記憶が頭の中に流れてきていた。人生の最後の終焉を知らせる最後の劇場。

特にこれといって考えてなかった、出来がそれなりに良かった為、出世する事ができ、地元の役所に勤め、ただ玉の輿を狙っていたんだけど、上層部の腐敗具合を目の当たりにして、考えが完全に変わったんだ。

そして、今使つてる帝具との出会い——役所の太守を殺した。その男は、人を人も思わず、男女問わずに裸に引き剥くと、外に放ち……そして、逃げた人で狩りを楽しむ畜生だった。

それは、初めて、人を殺した瞬間でもあった。

一度、汚した手なのなら、と暗殺部隊へと志願する事にして、現在のオールベルグと言う組織に所属をしているのだ。

□
□
□
□

「(報いを受ける、それは判ってた。いつか、自分自身にもくるんだって……)」

どんな悪人であれ、やっている事は殺し――。

帝都で、いや、この世では 善人であろうが、悪人であろうが、人が人を殺せば、天より裁きが訪れる。迷信ではなく、確固たる事実がある。

上で見ている者にとっては、関係無いと言う事だ。

それを、きつと報いだと受け取る者も少なくないだろう。

チエルシーは、この時身体中の力が抜ける感覚があつた。……帝具の変装も解こうか、と思つたその瞬間だ。

“ギヤオアアアツ!”

と言う叫び声が、突然聞こえてきたのは。

あまりの突然の出来事に、悲鳴を上げなかつたのは、奇跡だと言える。

「はあ、動くなつたのに。……つて、話が通じる様な相手じゃねえか。そりやそう

だ。話せる程賢くないし、そもそも喋れねえし」

苦笑いをしている眼前の男。そして、思わず変装したまま、動き自体は最小限に抑えつつ、周囲を見たチエルシー。

どうやら、この周辺にある木は、自分と同じ擬態だった様だ。

二級危険種の《木獣》。

木に擬態し、近づく獲物を捕食する危険種で、その性質も食欲旺盛、二級と危険度は少々低いがそれでも人を好み、獰猛だ。ここまでの接近に気付かなかつたのは、目の前の男のせいだろうか、もう自分の周囲一面に取り囲む様に現れていた。

そして、しびれを切らせたのだろうか、木獣の一匹が己の枝、根を伸ばし、男を攻撃していた。

「(……これ、ひよつとして、逃げるチャンス……?)」

チエルシーは死を覚悟していた中であつたが、千載一遇の好機を見た。

無数の木獣は、逃亡する上では丁度良い隠れ蓑だ。勿論、自分自身が木獣に襲われる危険性もあるが、正体不明の化物を相手にするよりは、何倍も、何十倍もマシだと言えるだろう。

だが、その試みも無駄に終わる。

『失せろ。喰っちゃまうぞ?』

何気ない一言は、周囲の空気を震わせた。

その殺気で、周囲が一変する。

——殺気は、振動となり、周囲数10m程轟き、大気を揺らし、木獣の身体をもなぎ倒したのだ。

いや、なぎ倒す と言うよりは、木獣たちがあまりの殺気に本能的に怖れを感じたのだろう。我先に、脇目も振らず逃げようとした為、他の木獣達に引つかかって倒れた様だ。それが連鎖的に広がっていくと言う有りえない光景が広がっている。

「っ……!!」

チエルシーは、またまた唾然とした。自分自身に向けられた

危険種を威圧だけで、撃退する話など聞いた事も無かった。そもそも、知能が低い危険種には怖れなど存在するのか疑問だった。

痛めつけられて、なら 判らなくも無いが、何もせず、威圧だけで退かせる事が本当に出来るのか? いや、こうもはっきりと見せられたら、信じるしかない。

そして 1つの危機は去ったが、本命が、大本命が残っている。

「ふう。最初つからこうしてりや良かった。んでもま、これで、これが良いか……」

男は、にやつ、と笑って、いつの間にか自分の前に立っていた。

チエルシーにとつての最大の危機が眼前に、もう目の前に迫っている、のだが……何故だろうか、死の予感薄れていた。

「良かったなあ。命あつて。アレだけの木のお化けに囲まれて、生きた心地しなかつただろうに」

「(……正直、アンタを目の前にしてる方が生きた心地しないよ!)」

まだ木の擬態を解いた訳でもないのに、普通に話しかけられて、普通に接されて、正直混乱していた。男は、両手の人差し指を自分に向けて。つんつ、と一突き。

「ひゃんっ!!!」

チエルシーは思わず淡い声を上げていた。

男の指先は、木の擬態を解いていないと言うのに、正確に……、非常に正確に、チエルシーの二つの膨らみの頂きにヒット。

あまりの出来事に、更に動転してしまっていた。

「ほれ、んな変装解いた解いた。折角の可愛い顔が見られんのは、辛いわ」
「~~~~っつ」

「ほひゅんっ……、と淡い煙を出しながら、チエルシーの変装は解けた。

その手は胸元を多い、そして頬を赤く染めている。

これが、チエルシーと男の奇妙な出会いであり――、ちよつとした災難の始まりでもあつたりするのである。

第8話 可愛いし、気に入ったから触る!

「はっはは! そんなカツカすんなよ。オレ一応、命の恩人だったりするんだぜ?」

「つて!! アンタが急に降りてきたから、私が驚いて逃げられなかっただけでしょつ!

恩着せがましい! 寧ろ、アンタのせいで絡まれたのよ!」

いつの間にか、すっかり打ち解けてる2人。

男の方は、当初のイメージとは全く違い、気さくで、陽気。良く笑う男だった。……更に言えば、手癖が悪い。先ほどから、何度かチエルシーにセクハラをかましてるから。すつかりと毒気抜かれたチエルシーだが、会って間もない男に身体を許す程、軽い女ではないつもりだ。

そして、その後は早々に話を進めた。

「……で、アンタは、いったい何者? 何でここに……、私に様でもあつてきたの? ……私を殺すつもりできたんじゃないの?」

「ん? なんて俺が殺すんだ? お前……えと、名前はなんていうんだ?」

「……………」

チエルシーは警戒心はまだまだあった様で、簡単には口に出さない様子だ。

「ふくん。まあ、追々でいいけどな。さっきの質問だけど、全部一気に答えんのめんどいから、とりあえず1つ。オレ、上から見てたら、お前が湖で泳いでんの見つけてな？」

可愛いし、こりやもう、一度会って色々として……とと、お話してみたかっただけです。はい」

「嘘くさつつ!! って、色々って何っ?! 　まだ、何かしようっていうの!?!」

「ばっ! 　と胸元をガードするチエルシー。可愛い、と言われて　赤く成る程、初心ではないが、それでも易々と身体を触られる訳にはいかない様だ。

男は、ふんふん、と頷きながら。

「まだまだ、暗殺者にはなれそうにないなあ? 　暗殺者になるにや、まだ女を捨てきれない様だ。おっぱいちよつと突つつかれたり、揉まれたり、顔でばふっ! 　と埋めてみたり、と、それくらいされたくらいで、可愛い乙女な悲鳴あげてちゃ、まだまだ落第点だな? 　修行が足らん!」

「っ。よ、よけいなお世話よ! 　それでも堂々とセクハラなんかする!」

「まあまあ。手ほどきなら、オレが色々と教えてやるから」

「いーや! 　大きなお世話よ!!」

子供の様な口喧嘩。

いや、どちらかと言えば、男がチエルシーをからかって遊んでるだけ、と言う風に見て取れる。好きな子にはいじめてみたい、と言う心理？と同じ感じだ。

「はあ、はあ……、もう そろそろ戻らないといけないから、用が無いんだったら、私行くわね？」

何度も何度も叫んで叫んで……、息切れを起こしてしまったチエルシー。

男は、光る様な笑顔でニコリと笑うと。

「おう！ 俺も行く」

「……………はあ!？」

まさかの答えにチエルシー呆然である。だけど気にせず、男は続けた。

「ひっさしぶりに面白そうなコ見つけたし、も、ちよつと 一緒にいたいんだよな。良いだろ？」

「嫌よ!」

「えー、なんか無茶嫌われてるし。そんな悪い事、オレした？」

「もう忘却の彼方!？」 女の敵の癖に、何をいまさら言ってるの!？」

「えー、あんなん、スキンシップの範囲内じゃん。それに、あの木のお化け追い払ってあげたんだし、もちよつと好意的な目で見てくれても良いって思うんだが。ほれ、『タスケ

テクレテ、アリガトー』的な? 別に棒読みでもかまんぜ?」

「アレを、スキンシップの範囲内?? 私、娼婦じゃないんだから、全然アウトよ! 棒読みでおつけー、って言った時点で、棒読みすら言いたくないわよ!」

ぷりぷり、と怒ったチエルシーの唇に、男は人差し指を当てた。

「っ!?!」

「ちよい 一時ストップ」

また、何かセクハラをされるのか? とチエルシーは警戒をしたんだけど……、次の瞬間。

「よっ、と」

男は、足を上げて、チエルシーの直ぐ横の地面を踏みつけた。

「ずんっ!」と言う衝撃音と、まるで地震でも起きたかの様な振動が周囲に伝わり……、次には地面にヒビが入ってる。それだけでも十分に驚きなのだが、本当に驚くのはこの後だ。

……後方数m先の地面が盛り上がり、ずがんっ!」と言う轟音と共に、何かが出てきたのだ。出てきた——、と言うより、噴火したかの様に、吹き飛んできたのだ。

「おー、モグラが釣れたな。なんか、下にいるとは思ったけど、思ったよりも大物だ!」

「っっっ!?!?!」

男の陽気な声、そして チェルシーも直ぐに振り返った。

土中から、地上へと叩きだされて、仰向けで気絶？（多分） しているのは《土竜》どりゅう。

先ほどの、木獣よりも遥かに危険度の高い、一級危険種である。 たったのひとふみで、
 獯猛な土竜を地上に叩きだすとは、一体どんなトリックを!? とチェルシーが目を丸めていた時。

「おー、怖かったか？ よしよし。 も、大丈夫、安心しろ。 オレがついてるからな？」
 「つつつ!!」

……いつの間にか、男に背中から抱きしめられた。 がつつりと、あたたてる。 あから
 さまに 手で揉んだり、とかはしてない様だけど、イヤラシイ感覚は気のせいではな
 い。 そして、この程度で終わるとは到底思えない。

その数秒後、予想通り……、いや 予想以上の事をされてしまったチェルシーは
 「ぎゃー」と言う悲鳴を上げて、またまた、周囲に木霊するのだった。

「うう……………」

げっそりとしてるチエルシー。

何度も怒って怒って、でも 全く応えなくって、ビンタの1つや2つ、かましても良
いと思つて攻撃するんだけど、避けられては触られ、当てれた!? と思えば後ろから抱
かれ、蹴りを股間に入れようとすれば、パンツ見られ。↑現在ココ

「純白か。うんうん、チエルシーによく似合う。可愛いぜ?」

「うっさいっ!! 名前教えたんだから、いい加減セクハラ止めて!」

「えー? 楽しんでたじゃん? ……つてか、カンじてた? 若しくはそれ以上に……
イ「感じてないっ!! そっから先言うな!」 ははは、りよーかい」

反撃しても、男の思うつぼだ、と思うんだけど……、何故だか無視する事が出来ない。
と言うより、無視し続けたら、貞操の危機も有りえる。まっとうな生き方は、殺し屋に
なった以上出来ないとは思つてたが、その辺は やっぱり女の子だから仕方ない。女を
完全に捨てれる程、経験を積み尽くした訳ではないから。

兎も角、追い払うのも無理、逃げるのも無理、と言う事で、チエルシーは仕方なく、仲
間達の待つ場所へと戻る事にした。

……未知数の力量を持つ相手だけど、自分が所属してるオールベルグも異常性と言え
ば、決して負けてないと思えるから、活路をそこに見出したのである。

「それにしてもこんな山道に来て、水浴びとは、色々と大変だな、チエルシー」
「……殺し屋になつて、色々と仕事してりや、これくらい当然」

何処まで知られているのか判らないが、相手は、自分自身が暗殺者、殺し屋である事はバレてる。何で知っているのか？ と訊こうと思つたが、見返りを求められるのが厄介だつたから、一先ず口を噤んだ。色香で釣つて、その隙に……とは 思つたが、この相手は『殺せない』と判るから、手が出せなかつた。

「ま、そのおかげでチエルシーと出会えたから、オレとしては幸運だ」

「はあ、どこまで本気なのやら」

「いや、オレ 結構本気だぜ？ でもなけりや、態々降りてこないつて、あの木の連中がいるのも判つてたし。群ン中に飛び込むみたいなもんだからよ」

「アンタ程の力があつたら、片手間じゃん……。それに、アンタのせいで襲われた様なものよ」

チエルシーは、ため息を一つしてさういう。

最初の木獣に襲われた時は、確かにチエルシーは気付かなかつた。……だが、それは眼前の男に全神経を集中させていたから。木獣は何度か相対した事があるし、肉体派ではないから、楽勝つ！ とは 言えないが、回避する事に関しては、楽つ！ なのだ。彼女が使う帝具は、逃げ足に関しては、それなりに使えるから。

「ん? ああ、成る程。あの辺の木の連中、結構気配絶ちが上手いから、チエルシーは気付かなかったんだな?」

「え?」

「アイツら、最初っからチエルシーを狙ってたんだぞ? チエルシーがあその周辺に来たはじめっから。ほれ、水浴びする時、上だけ脱いで、そっから変身してたけど、服引っ掛けてた場所が変わってたの気付かなかったのか?」

「は……? え、いや、それどころじゃなかったし……」

チエルシーは、言われて、記憶の引き出しをそつと開けた。

覗かれてた事は、この際置いておこう。

服着てても帝具を使用すれば、なんにでも化ける事が出来る。……だけど、裸になるのに抵抗があった。下着だけと言うのも少々嫌だった。だから、帝具を使って化けた。この帝具は、化粧品型故に、水との相性は悪いけど、少しの時間なら大丈夫だった。

と言う訳で、帝具を使って化けた——んだけど、その前 服を脱いで 何処に置いただろう?

「(——そう、木の枝に引っ掛けて……、急いで逃げた時に 帝具しか回収できなかつたけど……、たしか……)」

手を伸ばせば届く範囲の枝に引っ掛けた筈なんだけど、そう 服は見当たらなかつ

た。その後、男が来て、木獣達を追い払ってくれて……、見つかったんだ。

「あの辺の連中、何故だかは良く知らんが、騙すの（擬態）が更に得意みたいなんだよ。まあ、更に特化しねえと、餌に有りつけなかったから、進化した、そんなところだと思うな。だから、あのまま、呑気に水浴びしてたら、ばくつ、とイかれてたかもしれないぜ？」

「さ、流石に気付くわよ。そこまで行ったら！」

「ん、その上 知能も通常のヤツと比べたら、の範囲だが 結構上がってる。だから、無防備な所に集まってきたんだろうぜ。人間が使う道具、《武器》つう、危険性を学習したからこそ、無防備を待ったんだろうぜ？　そこで、水にぶかぶか浮いてる時にチエルシー。見た通り、文字通り、無防備。あの長い根やら枝やらで、捕まえられたら、流石にきついんじゃない？　帝具そ使えなかつたら」

「う……」

確かにごもつともだ、と口を噤んだ。

戦うにしろ、逃げるにしろ、帝具が無ければ、並の人間と大して変わらないのだから。「ま、チエルシーの貞操はぜーっつたいに奪わせたくなかつたんだな、これが。と言う訳で、助けてあげたから、オレと仲良くしてくれ。もつと」

「こ、これ以上ナニをするつもり……っ!?」

「……そんなにビビんなくてもええやん。ちよつとしたジョークだし」

自分が危険種の群に襲われてたかもしれないなかった事実が、チエルシーの肝を冷やしたのだろう。男の通常通りの軽口にも過剰に反応してしまい、やや意気消沈してしまうのは男の方。

どうやら、セクハラは連発するものの、ほんとに気に入られたのは間違いなさそうだとこの時思った。

……決して嬉しい訳ではないけど。

そんな時だ。

「チエルシー、見つけた」

「……ええ？」

前方から声が聞こえてきた。

聞き覚えのある声……その主がタエコだと言う事は直ぐに判り――。

「♪♪♪」

そして次には、何やら、寒気のようなモノがしたチエルシーだった。

第9話 久しぶりだから、触りたくもなる！

この展開は、チエルシーにとっては、良かったのか、悪かったのか……。

正直なところ、判らないのが実情だった。

タエコと合流できたことは非常に好ましい。彼女の実力は、一緒に行動し、作戦を共にし、サポートにも何度か回ってきたからこそよく判っているつもりだ。何よりも、暗殺結社である《オールベルグ》の暗殺者。並大抵の実力じゃないことも、そこからわかる。

だけど……、眼前にいる男もまた、並ではない。

いや、『並ではない』どころではない。

危険種の群を一掃したこともそうだけれど、この男には、それ以上に何かを持っていて、と チエルシー自身にも、ひしひしと伝わったりしているのだ。

正直に言えば、ついさつきまで セクハラされまくったから、頭から離れてしまいうだったけれど、もともとの登場の仕方を考えれば、この男も有り得ない実力者だといふこともよくわかる。……何も言っていないが、チエルシー自身と同じ、帝具使いで

ある可能性も否定できなかった。

「(う……、ど、どうしようかな。タエコさんに 正直に話して、何とかしてもらおうのが良いか……、それよりも、てきとーにはぐらかして、荒波立てないほうが良いか……)」
 チエルシーが思考の渦の中に身を投じていた時。時間にして、数秒程度だというのに、男の行動は、もつともつと早かった。

「お〜♪」

陽気な声と共に、チエルシーの肩に手を触れつつ 前へと出ていく。そのままタエコの方へと行こうとしたんだけど、ぐいつ、と肩を掴んで前に出て…… もにゅっ……!

“ つとひとモミ。しれつと、チエルシーの胸を触るのも忘れてなかったりして。

「な、なにをするのよっつ!」

カウンター・パンチ! を食らわせようとしたんだけど、やっぱり体をとらえられずに空を切ってしまった。

男は、ゆつくりとタエコのほうへと向かっていく。

もう、チエルシーは迷わず即決。

「た、タエコさんっ! そいつ、変質者! 痴漢、犯罪者! 女の敵だから、気を付けてっつ!! なんなら斬っちゃって!!」

咄嗟に叫ぶチエルシー。

当然ながら、男にもそれは聞こえていて……。

「犯罪者つて……、チエルシーだつて、暗殺者のくせに、棚に上げてくれるじゃん？ それに！ 良い女、可愛い女の子がいたら、欲情しない方が失礼だ！ というわけだから、逆に触らない方が失礼だ！ チエルシー、ナイス体ばいっ♪」

「堂々と、清々しいまでに宣言してくれたわね?! いい迷惑よ！」

がーつと、怒るチエルシーと、指をびしっ！ と突きつける男。

妙な展開である事は、客観的にみても明らかだった。普通なら、チエルシーのピンチに駆けつけてきた、という事で、それとなく助けようとするだろう。だけど、普通なら、である。……タエコ自身が感じているのは、また別だったから。

なぜなら――。

「つとと、今はそれよりだ。チエルシー。この問答は後。ちゃんと納得させてやるから安心しろ。サービスしちゃうぜ！」

「納得なんてする訳ないでしょっ！ そんなサービス、いらぬわよっ！」

チエルシーの怒声をバックに、男は改めてタエコのほうを向くと。

「おーい、タエっち、タエっち！ うわー、すっごいひっさしぶりだなあ！」

にこやかな笑顔と共に、手を挙げて 再びタエコのほうへと歩き出したのだ。

フレンドリー。その言葉がよくあてはまる、といえるだろう。

タエコ自身も、手を軽く上げて答えている様子。

「……………へ？」

思わずポカーン……、とするチエルシー。

まさかのまさかな展開、タエコとは顔見知りの様だ。

タエコは生まれた時からずっとオールベルグで育てられてきた身だから、この男とオールベルグにはつながりがあるのだろうか、とチエルシーは思った。

「これは良いのやら悪いのやら……………、あ、でも 教官パバアがいてくれたら、大丈夫かも？」

年の功つてやつで」

淡い期待をするチエルシー。

色々と実害があった事で、もう正直うんざり気味だから、分散してくれれば助かる、とも思っていた様だ。

やがて、男とタエコの距離が近づいて行ったその時。

またまた、予想外の展開が待ち構えていた。

鞘に納めていた剣の柄を、一瞬の内に握り、そして素早く、目にも止まらぬ速さで懐に急接近したタエコ。

そして、その勢いのまま……。

「飛天」

それは、オールベルグ流剣術の1つ、抜刀術。

鞘走りで剣速をさらに加速させ、一瞬の内に両断する最速の剣技。左切り上げで男の体は2つに分断された。

□ □ □ □

タエコの一撃は、間違いなく男の体をとらえ、その一刀の元に、両断された。目に焼き付いてしまった程、鮮やかに、……最速で。

「つつ……!!」

あまりの突然の事に、チエルシーも思わず絶句してしまう。体が真つ二つに斬られるようなシーン自体は見たことないわけでもない、どころか この職業をしていると、対して珍しくもないのだ。

だけど、あれ程の気を発していた男がああもあつさりと斬られてしまった事実にはり驚きを隠せられなかった。

それともう一つ……………。

「あ……………、私 アイツに助けられたのって、事実……………だったんだよね……………」

そう、先ほどの危険種の群と遭遇した時、あの男が追い払ってくれてなかったら、正直逃げ切れたかどうか判らない。

男の言葉のすべてを信じる訳ではないが、もしも本当だというのなら、最初から危険種たちはチエルシーを狙っていて、それを助けてくれたんだから、ある意味では命の恩人である事実は間違いではないだろう。

そう思ってしまったからこそ、チエルシーは さつきまで、必死に助けられた事実を否定していたというのに……………、斬られた所を見てしまえば、複雑な感情が彼女の心の内に湧き上がってきた。

「……………女の敵、だったんだけど……………私。命を、ほんとうに、命を助けてくれたのなら……………、あれくらいは……………あれくらいは……………、そ、それに……………」

何度も、セクハラをされた。セクハラ自体は、不快感拔群だけど、時折言葉の中にあつた『可愛い』や『良い女』『綺麗』という褒め言葉。軽口だと思つていたけれど……、それでも、今は……。

チエルシーは、ぐっ、と目を閉じた。

考えをやめて、気持ち切り替える様に、努力した。

人の死は何度だつて見えてきている。悪党ならなんとも思わないが、善人が、顔見知り、世話になつた人が死んでしまつた、殺されてしまつた時にも、心を抉つた。でも、それでも、自分の行動に支障がないように、必死に切り替えた。

今回も同じ事だ。……いや、まだ軽いとだつて言える。

だからこそ、僅かにだが芽生えかけてしまつた感情の芽を摘んでいつたその時だ。

『おー、なかなか良いな!? 腕を上げたな、タエつち』

「……ええっ!？」

先ほど、斬られたシーンを間違ひなく見たはずなのに……、血が噴き出すシーンも、見えたはずなのに、あの男のあきれ果てるほどの陽気な声が響いてきたんだ。

「つ……、やはり、貴方には届かないか。わたしの剣術も、まだまだ未熟……」

「まあまあ、タエつち。すげー、上達してるぜ? 前より剣のスピードが0.5秒ほど上がった。現状の段階でさらに腕を上げるなんて、大したもんだ。お兄さん、驚い

「ちやつたよ」

タエコの頭をぼんぼん、と叩く男と、剣を鞘に戻しているタエコ。

「いったい何がどうなっているのか? とチエルシーは首を傾げていたその時。

「いやあ、育ちも育つたっていうのに、あーんなに早くなっちゃって、重くないのか?

そーんな立派になっちゃって。うんうん、肩もこりそーだと思っけど? だいじよーぶ

?? ん? んん??」

「んっ……!」

両手で、タエコの両胸を「もにゅっ」……つと。

触る所じやなく、掴む、鷲掴み、両手で鷲掴み。大事なことなので、2度言いました。

タエコは、一瞬だけ体を震わせたけれど、反撃するような素振りはなく……。そのまま

2度、3度と止める気配はない。

チエルシーよりもさらに豊満なタエコの2つの膨らみが形を変えるのを、4度見たと

ころで。

「ハ、ハの……!!!」

めくくいいっぱい振りかぶって——。

「へんたーいっつ!!」

ぎゅんっ! と拳大ほどの石が、男の頭にジャストミート。チエルシーの華奢な体から、どこにそんな力があるのか? と思える様な剛速球を眉間にすこんっ! と受けた男は、あおむけに倒れてしまったのだった。

第10話 変に目覚めてしまわないか心配する！

見事な剛球を額に受けてしまつて、仰向けで倒れている男。

そして、実を言うと、今の結果は、チエルシーにとつても、ちよつとばかり意外な展開でもあつた。

何せ、先ほどのあの男は、タエコの一撃、それも最速だと言つていい抜刀術を難なく躲してのけたというのに、非力だと自覚している自分の投石。……たかだか、そんなものが、急所であるといつていい眉間に直撃してしまつたのだから。

まあ 正直ギャグっぽいからそれ程までには驚かないし、何より……。

「おおつ、中々良い球投げるな？ 良いモン持つてるぞ。エースになれるな、チエルシー！ うんうん、身体がやっぱり資本！ やっぱりチエルシー、NICE BODY♪」

右手挙げてサムズアップしてるから。

そう言われても、全く嬉しくないし、更にイヤラシイ。

チエルシーは、何個目になるのか判らないけれど、口の中で転ばしている飴ちゃんを

がりっ！ と嘯み砕きながら。

「うっさいっつ!! こんのアホお!!」

と盛大に罵声を浴びせるのだった。

通じているとは到底思えないけど、言わずにはいられなかつた様子である。

大きく息を罵声と共に吐いてしまった為、チエルシーは咽てしまっていた。

「チエルシー、大丈夫?」

「はあ、はあ……、ん。大丈夫。タエコさんは? 大丈夫??」

「問題ない。胸を触られたくらいだし。身体に支障はない」

「う、うくん……、タエコさんが……そういうなら……」

本当に何ともない様子のタエコ。……触る、というより、揉まれる、なんだけど、行為の最中は兎も角、今は ほんとに表情も全く出てない。

女の子としての恥じらいは無いのだろうか……? いやいや、あの男が言うように、その様なものを持つていては、暗殺者としては欠点だといえるだろう。だけど、どこか納得のいかないチエルシー。

そんな中であつても、男は健在であり、現在進行形、ノンストップだ。

「おーい、バカを言うなよ? チエルシー。オレが傷つけたりする訳ないだろ。綺麗な身体なんだ優しくするさ。なんたって、タエっちもチエルシーも大好きなんだからな?

あいらぶゆ〜!」

ひよいつと起き上がっては、齒の浮くようなセリフをさらつと言つてのける。

完全に女の敵だと思えるんだけど、ここでまた興奮してしまえば思うつぽだ、と思つたチエルシー。

漸く、学習をしてきた様子だ。学習能力の高さも、暗殺に必要なだ。

「……も、変態に何言つても無駄つてわかつたから。というより、タエコさん。こいつと知り合ひだつたんだ」

「ん。以前、鍛えてもらった事があつたんだ。大分世話になつた。それに、私だけじゃない」

「そーそー。あの頃のタエつちも可愛かつたなあ。今は綺麗になつた、つてとこかな? うんうん、しばらく見ない間になあ」

「つつ!」

ぱしつ、と叩くのは、タエコのお尻である。こんな場面でもさりげなくセクハラを忘れてない。ここまで来れば大したものなんだけど、看破は出来ない様子で、またチエルシーは投石開始。今度は無言で。

頭にしっかりと命中したけど、くるりとチエルシーのほうを向いて、今度は真面目?

顔になった。

「それはそうと、チエルシー。オレの事を変態っていうのはやめてくれよ」

「何だよ。ほんとの事じゃない」

これが報いだ、と言えませめてもの抵抗、ささやかな抵抗だ。相手が不快に思っているのであれば、絶対止めない、と思つてたチエルシーだったが……。

「違う。そーじゃないんだ。変態はなんか嫌だから、せめて『えつちいゝ』くらいに一番良いも『ぼかんっ！』いてっ！」

またまた 訳の分からない事を言い出したので、もう一度、無言で投石をしたのだつた。

そして、更にその後。

「なあ、タエつち」

「？ 何ですか？」

何はともあれ、セクハラ連発も息をひそめだした様子（多分）。

「チエルシーとタエっちが一緒にいるって事は、チエルシーもタエっちのいる……、えと、なんてつたっけ? オ、なんとかって会社」

「オールベルグです」

「そ、それ。それん中に入ってるの?」

男の質問に、タエコはゆっくりと頷いた。

暗殺者である事は判っていた様子だったが、何処かに所属しているかどうかはわかってなかった様だ。……別にだからと言って不都合でもある訳もないし、言っただけで問題ないだろ、とチエルシーは思いつつ、気を静めていた。

そんな時に目が合っただけ。

「……………そうか。ううーん。それはそれは…………。チエルシーの事が心配になってきた……………」

「はあ?」

今度は、いったい何を言っているのか判らなかつた。

セクハラ行動は兎も角、確かに危険種から助けてくれた事は事実だが、いったい何が心配だというのだろうか。

「暗殺稼業の危険度を言ってるの? でも、今更じゃん。盛大にダメ出ししてくれた癖に、何を言ってるのよ、あんた」

手を腰に当てて、そういうチエルシー。だけで、男は首を横に振る。

「いやいや、違うって。そーじゃない。傷つくのは嫌だけど、自分で決めたんなら否定する気はないって、ダメ出ししてもな。……………そうじゃなくて、あの会社はちよつとアレで」

「は？」

男は、そう言うと、人差し指の第二関節を折り、口元に当てながらつぶやいた。

「…………チエルシーも、変な方向に目覚めたりしたら嫌だなー。今はちゃんとノーマルだと思うし。ギルルやドラ子の2人は…………まあ、最初つからもつたいたい気がしてたんだけど、もう、仕様がないうしなあ、手遅れだし、一線超えちゃってるし。うくん、好いた惚れたは自由なんだけど、やっぱり、お兄さんとしては複雑な気持ちだとか、健全じゃないというか。…………間違ってるの、そっち！ って言った時、ぜくんぜん相手にしてくれなくなって、寂しかったとか。ううん、妹に無視される、毛嫌いされる兄ってこんな気分なんだろうーな」

うう〜ん、と唸りながら何かぶつぶつとつぶやいてる。

「?? さつきから何言ってるの? ……ついに、おかしくなっちゃった? 元から変だけど。…………変態だけだ」

「だーかーら、チエルシー変態禁止! えっちい〜にしろっ!」

「絶対嫌っ!!」

この相手が喜ぶような事は決してしないと、改めて心に誓うチエルシーだった。

「それにチエルシー……つと、チエルちゃんはさ? 可愛いんだから。メラルーと一緒になっちゃんお兄さん敵わんです」

「つつっ!!」

「お? 嬉しかった? ついにくらつと来た??」

「違う! 誰がチエルちゃんよ!!」

今度は、腹に向かって右ストレート。また、躲されるか? と思っただけで、今回は充てる事が出来た様だ。

「えー、いいじゃん。ほら、言ってなかったけど タエっち、タエコを呼んだ時もそうだけど、オレ、大体話す相手には、あだなで呼ぶんだよ」

「呼び捨てのほうが100倍マシ! 女の子に、ち……、つ それはないでしょ! 言わせないで!」

「あ……、まあ、確かにそうかな。お? そーいや、ちよつと照れてるチエルシー、可〜愛い! もつと見せてみ?」

「うっさい!」

「まあまあ、んー……、なら、チエル子？」

「却下！」

早速学習した事をもう忘れそうになつて居るチエルシーとそれをも計算に入れているであろう男の話、押し問答は、その後も暫く続いた。

楽しそう？　に言い合つて居る2人を見て、タエコは思う。

「……（チエルシー。身体能力は、並つて言つてたけど、凄く高いと思う……、あのひとに、一撃でも入れられるだけでも、達人以上の使い手……）」

そう、少々ずれた考えをしていた。

致死性のある攻撃ならまだしも、ごくんな、日常ラブコメ攻撃。当たつたほうがご愛敬である、というのを、本能的に判つて居るだけの事なのだ。

いや、むしろふれあい、とでも思つて居るかもしれない。

そういうしている内に……。

「はあ、遅くなつて居ると思つて見に来てみれば。大体事態は判つたよ」

「あつ……」

「随分とまあ、……レアなケースに遭遇したもんだねえ。久しく見なかつた顔だよ」

少々遅れてこの場に参上したのは、ババラ。

歳はかなり言つて居るものの、ババラも女は女だ。怒つて居るところや、攻撃してるとこ

ろの顔は、ちと怖いが、普段のその容姿から、推察するに、若いころは（本人も自分で言ってるけど）きつと可愛かっただろう。

と言う訳で、ババラも乱入した様だが、彼の反応は……如何に??

第11話 いつの間にか、消えてる!?

「ん?」

新たに表れた来訪者、ババラのその存在に気付き振り返る男。

「あ」

その容姿を確認し、とりあえずチエルシーから目を離すと、ババラ近づいて行った。

「よお、ひっさしぶりだな。ババアラ!」

「……わざとかい?」

軽くため息を吐きながらそう言うババラ。

ババラの事をババア、と呼ぶ(見た目もあるから)者は幾らでもこれまでにいたんだけど、大抵は『ババアじゃない、ババラ』と否定をする。それもとびっきりの殺気を含ませながら。

だというのに、この相手には 別に何もしなかった。本当に。ただ、ダメ出しをしただけだ。

それが、教官ババラらしくない、と思うのはチエルシー。

「(やっぱ、それだけ別格って事。タエコさんも、完全に上に見てる相手だし。……かなり心強い相手かもしれない(変態じゃなかったら)、って事でもあるか)」

2人の様子を見て、チエルシーはそう考えていた。

「はっはは、わりいわりい。ちよつとした茶目っ気じゃん?」

「あんたがそんな風にしても、可愛くないさね」

「まあまあ、そんな風に言いなさんなつて。バーバラ!」

「……はあ」

相も変わらない能天気な男を見て、もう一度ため息。

どこかで聞いた事のある様な名前とわざと間違えているから。そして、ムキになつたら負けだと強く思っているのは、チエルシーだけど、彼女の様に強く反応する者はこの場にはいなかった。

「タエコ、チエルシー。……仕事だよ」

「!! 判った」

「はあ、りよーかい」

バーバラの出した一枚の紙きれ。それが指令書である事は即座に理解できた。さあ、仕事モードに突入、と言いたい所だが、眼前の男をどうするのが問題だ。暗殺をしないこう! と言うのに、こんな能天気な男と一緒にいて良いものなのだろうか。と言う

事。

「おっ？ 仕事か。面白そうだ」

「(ほーら来た)」

自分についてくる、と言った時とまるで変わらない顔でそう言う。

それを聞いたババラは、振り返り。

「手え貸しな、とは言わないよ。どうせ、傍観だろうしねえ」

「モチ。判ってんじやん？」

「付き合いは短いけど、あんたは濃すぎる。十分すぎるつてもんさ」

ぶんぶん、と首を横に振る。

「ま、ワシが若くて、より美しかった頃、出会ってれば、ちよちよいと骨抜きにしてやれたんだけど」

「そりやー、そうだ。ま、だけど今は無理だから。ちよいストライクゾーン、超えてるし。せめて、10〜15年ほど若かったらなあ」

「そういう割には随分と広いストライクゾーンじゃな」

軽口を言い合いながら歩いて行ってる2人。

ババラの口に乗っかる男は初めて見た、とチエルシーは目を丸くさせていた。

さらにタエコにぼそつと聞く。

「あの2人も……、結構付き合い長い？ 短いって言ってたけど、それなりに？」

「……そうだね。初めて出会った頃は、殺し合いまでしたらしいけど」

「そりやそうよね。……私に、それなりに直接的な力があつたら、殺つてる可能性、あるもん。十全に」

渋い顔をさせながら、ぴこぴこ、と新たに口に含ませた飴を転がした。

「まあ……、祖母は殺し合いをしたつもりだったんだけど……、遊ばれた、って言ってた。そう言う点では、殺し合いをした、とは言えない」

「………はあ(つまり、規格外と言う事。オールベルグのご意見番兼教育係のババアを手玉に取るくらい)」

判つてたつもりだけど、改めて思う。タエコの實力は勿論、ババラの實力もよく知っているのだから。あの男の未知数さをより感じた。……んだけど、振り返つては、ぱちんつ、とウインクされて、そんな威圧感や脅威感は、あつさり吹き飛んでしまう。白けながらチエルシーは、そっぽむき、タエコはぺこり、と頭を下げていた。

「んー、だけど、早めに会つてて、それで バーバにもし、手え出してたら、ダニーが黙っちゃいないだろ？ オレは女の子をからかうのは、好きだったりするが、男はちよつとなあ？ お爺ちゃん怒らすのは、お兄さん、ちよつと抵抗あるんだわ」

「まあ、アイツがそうそうに感情を表に出すとは思えんがね」

「まーたまた。ダニーの気持ちに気付いてる癖に、そのうえで無視しちやつて。殺し屋だったら、Sじゃないとやってけないとは思うけど、かあわいそうだと思わないのか？」

魔法使いになつちやうかもしれないぜ？ 後数年で」

「そりや見てみたいもんさ。戦力が上がるかもしれないね」

「仕事に打ち込む女つてのは、こんな感じなんだな。『私と仕事、どっちが大事なのよー』つて」

「……そろそろ止めな。キモイ」

「(ババアの口から『キモイ』つて……)」

その後もいろんなやり取りをした後に、タエコが本題を切り込んでくれた。

「それで、今回の一件はさっき言つてた？」

「そうさね。「反乱軍の収入減である国外との取引ルート」の話。それが完全に、「突き止めた」つて情報が浸透した。今頃は帝国側にもちゃんと流れてるハズさ。……密偵連中からの裏も取れた」

「じゃあ、その取引ルートの運び屋に成りすまして、迎撃、つて事で」

「ん、それしかないと思う」

仕事モードの女3人、そして傍にいる男は1人。

ふんふん、と聞いていたんだけど、何処となく暇そうだ

「まあ、タエつちとバーバラは、大丈夫だと思うけど、チエルシーは、心配だな。ポカミスするんじゃないぞ?」

頭をぼんぼん、と撫でてきた。

今までのセクハラに比べたら、全然マシな部類に入るのだが、子供扱いされた気分。つまり、これも最悪だ。

「つて、触るな! 子供扱いしないでくれる!? これでも、しっかりと立ち出てくるんだからね!」

「おー、その勢いだ。周囲にはしっかりと気を向けるよー? 今回の、きつと大仕事になるぜー」

「うっさい!」

言い合っている2人。(一方的に、チエルシーが罵ってる)それを見たババラがポツリと一言。

「ナイス、だ。チエルシー……」

「ん?」

タエコも聞いていたが、言っている意味が判らず、ただただ首を傾げていた。

ババラも言ったことに関して、それ以上何も言わず、ただただ、先を急ぐのだった。

山を越え、川を越え——、到着したのは、指示があつた場所。

指定された場所には、その印として、布が木の枝に括りつけられていた。

「ゼー、はあー、ぜえー……はあー……」

肩で息をするチエルシー。

それを隣で。

「だーから、『おんぶするぞ』って言ったのに。無理しちゃつてまあ。大丈夫かチエルシー。足腰震えてんじやん。生まれたての小鹿つて感じ」

「う、うっさい……、アンタ、絶対触ろうとする癖に……、私は、……そんな安くない！」

よくよく考えてみたら、チエルシーにとっては休憩時間など無かつた。

殆ど働きづめであり、休息の時間だつた、と思えば、妙な男に出くわし、更には、危険種に襲われ、更には色々心労が重なつて……。

そんな状態で、山を越え、川を越え、としていたら、体力面で難のあるチエルシーがどうなつてしまうのかは、見るも明らかだ。

そして、そんな弱つた草食獣を狙う肉食獣……。幸いな事に実力行使じゃなかつたの

が良かったけれど、隙を見せてはならぬ!　と言う事で、チエルシーは己の身体にしつかりと鞭を打って、ひたすら歩き続けたのだ。弱音を吐かず。……タエコに頼んでもよかったけれど、無防備になる背後で何されるかわからないから、それも駄目だった。

「今後の訓練では、同じよう同行してもらおうかねえ?　チエルシー」

「絶対嫌ですっつ」

と、言い合っていた数秒後。

「おいおい……」

背後の木陰より、複数の男たちが出てきたのは。

出てきた瞬間に、いや近づいてきた気配を感じた時にはもう、口は兎も角、殆ど臨戦態勢、隙なく待っていたタエコとババラ。

チエルシーも、漸く落ち着けた様で、振り返った。

「この女達と組むのか?」

「本当に凄腕なのかよ」

現れたのは、特徴的な装束に身を包んでいた男達。いや、中には女もいるが、少数だ。

「(ん?)　女達??　あれ……?　アイツは?」

チエルシーは、周囲をきよろきよろ、と見回すが、あの男はいつの間にか姿をくらませていた。……本当に、いつの間にか。全く気付かなかった。

そんな動揺を感じたのか、ババラは チェルシーの脇に肘を打ち込む。

うぐつ、と息が詰まってしまったが、それに構わず ババラとタエコは一步、前に近づいた。

「おーおー、可愛い女の子もいるじゃん。つまり、2人の女の子は寝技タイプってところか？」

「かもしれないですねえ。なら、試してみてえなあ」

ひひひひ、と気持ち悪く笑う男達。

脇腹を抑えつつ、チェルシーは 苦笑い。

「(なんつー、典型的なやられ台詞。……大物見た後だったから、尚更判るってか?)」

いなくなってしまう男の事を考えつつ、チェルシーはそう思った。

強さの格が違うから、仕方がないといえそうだ。

「けけけ。胸もよく育ってんじゃん。見せてみ……っ」

そこまで言った所で、突然 僅かではあるが、地面に亀裂が入る。

伸びる亀裂は、男の足を引っかけて。

「ぐべっー」

転がした。

タエコもババラも表情は変わらない。

「……あ」

チエルシーは、何が起こったのか、大体察した。

頭の中に、『チエルシーとタエっちの貞操はオレが守る!!』とか、聞こえてきたから……聞こえなくなかったけど。多分、あの男が何かしたのだろう。

土竜を一踏みでたたき出したほどの男なのだから、これくらいは朝飯前だろう。

だけど判らないのは、なぜ この場にいらないのか? と言う事だ。むかついたのか、威圧感、殺気の1つや2つを飛ばしてやれば、それで終わりの気がするのだが。

そう思ってたチエルシーだったが、直ぐに考えるのはやめた。

ばつが悪そうな連中だったが、話かけてきたからだ。

「それはそうと、ババアは何でここにいるんだ? 炊事係か?」

ぶつ倒れた男を無造作に引つ張り上げて、後ろへと追いやると、精一杯悪い顔をさせながら、威厳をちよつとでも出しながらそう言っていた。小者感満載なのだが……、それなりのチームっぽいから、プライドはある様だ。

ババラは、別にツツコミを入れようとせず、ただ、淡々と返す。

「ババアじゃないよ。……ババラ、って名前さ」

2度目の訂正ですね? と言おうかな、と迷ったが、男達のほうが早かった。

「ま、まで……、ババラって、あの……ババラ・オールベルグ?」

「暗殺結社の……?」

そう、オールベルグ、と言う名は、その道では非常に有名なのだ。暗殺結社の中では、群を抜き、その存在感を遺憾なく闇世界で轟かせている故に。

「うむ。オールベルグのご意見番じゃぞ。誰か殺して証明してやろうか?」

小柄な老人、老婆だった筈なのに、その背後に見える黒い闇の炎。触れようものなら、即座に灰にするかのような、炎を纏っている。男達にはそう見えた。

「い、いや、悪かった。この殺気だけで十分だ……。悪かった。まさか、実物を見るとは思ってたなかったから」

恐らくはリーダークラスだろう。

その男を筆頭に、全体的に、萎縮してしまった様だ。人数では圧倒的に勝っているのに、攻める事が出来ないのは、一瞬で戦闘力の差を知ったからだろう。

「そうそう。……そのタエゴは、我がオールベルグが赤ん坊のころから育てた暗殺者じゃ。……下手に刺激しない方が良いぞい」

さして男達に興味なさそうに、ただ佇んでいるタエゴ。

それだけだというのに、男達には、先ほどまで子猫ちゃん、程度にしか見えてなかつ

たというのに、強大な猛獣に変わった、と実感していた。殺気を出した訳でも、向けられた訳でもないというのに。

「はい！ 私はそのババアに弟子として鍛えられているチエルシーですっ！」

小者っぷりが面白おかしかつたのだらうか、チエルシーも本来の性格であるちよつとしたいたずらっ娘が表に出てしまっていて、意気揚々と声をかけていた。

「ただ、あまり看破できない言葉があつたので。」

「今、ババアって言わなかったかい？」

「えー、言つてませ〜くん♪」

「ふむ。訓練メニューを変えようかねえ。正式にオフアーを出しとくよ」

「つつ!! す、すいませんつつ!!」

こんな陽気なやり取りがあつても、男達には余裕の1つも生まれない。

チエルシーは、傍から見れば、何も感じないおとなしい女の子、だというのに。

「(……何も感じない、とは、やっぱり言えないが、それでも、そこが……、何も感じないと思つてしまう事が、逆に恐ろしい……)」

暗殺者は、本来は知られてはならない。直接的な戦闘力も確かに必要だが、基本的に、暗殺者は必殺が基本。暗殺から戦闘へと持ち込まれた時点で、マイナス点だ。だから、自分自身の殺意は、最後の最後まで隠すのが熟練者である、と言う事は判っているから。

つまり、チエルシーの事を、本来の彼女を知ったその時が……死ぬ時だ、と思えたのだ。

……さつきまでのチエルシーを見て、知れば……一気に霧散すると思うけど、それはご愛敬だろう。

「ああ、俺たちは……」

「その恰好から見ると、傭兵部隊の天狗党だろ」

ご意見番、教育係、博識であるババラは、男達の正体は直ぐに判っていた様だ。そのことにはさして驚きを見せない男たちは、これ以上説明は不要、と言う事でそれ以上は言わず。

「……オレ達だけじゃなく、伝説のオールベルグにまで依頼を出すとは……、今回の敵は、それほどまでにやばいのか」

そうとだけ、言っていた。

確かに、その点に関しては、ババラも同様に感じていた。天狗党の小者っぷりは目の当たりにしたのだが、働く時はしっかりと働くのは知ってる。

……そうでなけりゃ、この世界では生き残れないから。

「気を引き締めていかないけないねえ……」

ババラは、そう呟き、タエコとチエルシーの方を見た。

うなずき合う2人。それを見て、軽く首を振って移動を開始する。天狗党たちに案内をさせる為に。

「それにしても、アイツ……、どこ行ったんだろ。まさか、ビビつちやった、とか?」
「違う」

チエルシーはやや不満気にそう言って、タエコは否定した。

「あのひとは、過剰には干渉しない。公には姿を現さないんだ。危なくなっても私たちの力で何とかしろ、と言う事だろう」

「……ただの気まぐれ、って気がするんだけど」

嘘っぽい、とチエルシーは、渋い顔をし。

「アイツに気に入られたチエルシーなら、助けてくれるかもしれないねえ。処女でも捧げてやんな」

「い・や、ですっ!! 師匠命令でも、それは!!」

大きく手で×をして、チエルシーは叫んだ。

「(……ここまで気に入られたのは、チエルシーとタエコの2人だけ、なんだよ。あの強大な力を懐柔できる可能性を秘めてるのは、ね)」

ぎやーぎやー言ってるチエルシーを見て、そう思うのはババラ。

過去に出会った事はある。……勿論敵としてだ。オールベルグの本拠地に、のこのこと現れたあの時の事は——今でも忘れる事はない。

飄々とした様子で、我が物顔で 不法侵入。オールベルグの頭領も舌を巻いた程の實力。オールベルグ総出でも敵わないと悟るだけの力量を、感じたらしい。……ババラ自身もその内の一人である。タエコに関しては、特別講師、程度に認識させたから、そこまでの脅威は感じてないのだ。

そして、今回の様に、神出鬼没。正体不明の異常者。その正体のすべてが不明だ。諜報班総出で調べても、何一つ判らず、出会えた事もない。

強く求めてはいない。だが、万が一にでも、もし、こちら側についたとすれば……、これ以上ない成果だろう。

「(メラ様は良い気はしないとと思うが——)」

それは、現頭領の名。

ちよつと色んな事情があり、そこがたった一つの悩みの種、であった。

第12話 空から偵察する!

天狗党と合流を果たしたオールベルグの暗殺者達。

格の差を見つけた後は、特にトラブルもなく、任務を全うするだけ。

場所は、帝国・北東部(国境付近)の白狼河。

国境付近であり、非常に大きく、穏やかな河。国外との交易も容易に行える事から、通常の特産品も流通されている。……勿論、その波に紛れて、活動をしていると言う情報があつても、何ら不思議ではない。

その地理的条件を逆手に取り、偽の情報を流す所までは成功した。

河の畔で、今まさに牙を研いでいる猛者たちが息をひそめて待っているからだ……。

そう、暗闇の中 静かに息をひそめ……速やかに始末する為に……。

……つて、あれ??

「つてな訳で! 今度こそ、コル姉を超える時つ!」

「よし、来なさい！ ポニー」

シリアスな説明が入っていたが、完全に雰囲気は真逆である。

この場にいる者たち全員が、猛者たちである事に嘘偽りはない、が……、その容姿、今の行動……それらを見てみれば、一目瞭然！ 可愛らしく、中には美しさも併せ持つ美少女たちが遊んでいる様に見える。(勿論、男子もいるが)

そして、一応 行っているのは 訓練の一環で男女分かれての体術勝負だ。

一目散にとびかかった少女だったが、あつさりと手を取られ、そのまま手首を極められて投げられる。

「ぶへっー」

「まだ甘いつ」

一矢報いる事も出来ず、投げられてしまい、一本！ と勝負は決した。因みに、決勝戦である。

「はい、コルネリアの勝ちー！ さっすが！」

「女子体術勝負は、コル姉の優勝だね」

一足先に、訓練を終えていた男子組が観戦をしていて、称賛を送る。

そして、勝つつもりでいた少女は、頭を掻きながら少々悔しそうに呟く。

「くう……、打撃ありの勝負ならなあ……」

負けてしまった少女の名は《ポニー》。ポニーが得意なのは、拳・脚ありの打撃戦であり、小難しい体術は苦手なのだ。

シンプル・イズ・ベストが信条なのである。

「つてな訳で、今度は——」

称賛を送っていた男の内の一人が良い勢いで立ち上がると、ゆつくりと構え。

「じゃあ、コルネリア! 男子優勝のこのオレといざ勝負を!!」

目を血走らせながら突進していった。

顔に幾重の傷跡があり、筋骨隆々、ワイルドな姿だと言える男なのだが……、その表情には邪な感情がはつきりと見えてとれる。なんだか手つきもイヤラシイ。

どこかの誰かの様に、明らかに狙っている。

両手をワキワキ、と動かしながら突進していつて——、その邪な気配を正確にキャッチした女子体術勝負 優勝者の《コルネリア》は、きゅっ……と拳を握りしめると、そのまま 体術勝負だ、と銘打っているのに カウンターパンチを食らわせていた。

因みに、襲い掛かった大柄の男の名は《ガイ》。

体格では圧倒的に不利であるが、鍛えている身である事と、突進の勢いを利用してのパンチは、なかなかの強力で、たまらずダウン!

反則技だから、当然クレームを入れるが、隠そうともしない下心もあつて、無駄に

終わって、そのまま 女子軍団 vs 男子軍団で、水の掛け合い、つまり完全な遊びモードに入ったのだった。

□
□
□
□

無邪気な少女たちと、ちよっぴりエツちな男達の仄々としていた空気も——、やがては消え失せる。

それは、朝に太陽が昇り、夜になれば必ず沈むと同じ様に。

そう——仕事の時間がやってきたのだ。

全員の表情が冷たく……暗く沈み、音も無く移動を開始した。

全員が移動をして、いなくなったその時、闇が辺りを支配したその空高くに、一瞬だけ影が映った。影は輪郭がはつきりしてゆき、形を成した。

「……ううん。あの子らもナイスバディっ♪ ぶっ飛ばされた奴の気持ちわかるなあ」

♪ うんうん。まだまだ発展途上っていうのもグッドっ! ……切り替えもなかなか上手いなあ。結構できるみたいだ」

こちらは、まっくつたく隠そうともしてない本能のままの感想をポツリと一言、である。

漆黒をマントを纏っているかの様に、その身体は見えず、ただただ声だけが辺りに響いていた。

そして、声の種類は、1つではない

『……つたく、お前もか。本当にお前らは人を好き過ぎる。……性格は実に対照的だと言えるがな。お前ら、自分達が何者であるか、その本質を間違えてないか?』

あきれ果てた様な声が響く。闇夜の中、淡々と会話が續いていた。

「そうか? オレは思いつきり楽しんでるだけですが、何か問題ある?」

『何か問題ある? じゃないって。知つての通り、この契約は、100年ぶりに沈黙する。周期が来た、と言う事だ。これ以上現代の人と関わり過ぎてると、後々が面倒なんだぞ? 忘れた訳じゃないだろ』

「忘れる訳ないじゃん。判つてると思うけど、オレだって継いでるんだし。ゼーんぶ知ってる。……お前さんが退屈しきった事実、人間との関わりを最小限にする理由も全部。……そもそも、何でそうなったかも含めて」

首をぶんぶん、と振って更に一言。

「オレにとつたら、楽しむ事が一番。退屈になるような事はするつもりないし。……それに、そもそも、以前の事だつて調子に乗つて力を誇示した、し過ぎたせいでもあるでしょうが。そりや、あんだだけの事やつたら、人の見る目だつて変わるつて。やーりーすーぎーだ」

『……まあ、確かに間違いではないが、いや、大言耳が痛いな。だが一応 お前もある意味じゃ一緒、同じなんだぞ』

「判つてるよ。だからこそ、今はただただ 楽しんでる。……面倒な事は、裁^{ヤル}くのは 任せた！ 結構久しぶりにあつた娘もいるし——、新たに気に入つた娘もいるしっ！ 只 今手が離せられません！ 楽しんでますから。これからも色々ありそうで！」

『はいはい……。とは言つても時間もあまりない。それまでは好きにしろ』

「あ、よ」

と言う訳で、話は終わりだ。

月明りに照らされていた大きな影が姿が消えたのだった。

残ったのは、影のみ。

その影はゆつくりと形を変え 暗黒の鳥となり、翅を広げて飛び去るのだった。



夜。

白狼河を渡る船が無数に闇に紛れて運航をしていた。

勿論、それが餌である。……反乱軍に通じている。国外との交易ルートが存在する、
と言う情報を裏付ける為の行動だ。天狗党のメンバーは、それぞれの班に分かれて、船
に乗り込んでいる。

襲撃が来るであろう、ポイントにある程度予想を着けて。

「……ふむ。襲撃にはもってこいのポイントだね」

「うん」

タエコとババラは、最後尾。

天狗党のメンバーを先頭において、後方から様子を探っていたのだ。

そして、何よりこちら側には偵察のエキスパートのチエルシーがいる。……その力を
見られない様にする為、最後尾にいた、と言う理由もあった。

「チエルシー。行きな」

「OK!」

呼ばれたチエルシーは、素早く帝具を使用し、大きな鳥に化け……空高くへと羽ばたかせるのだった。

「（よーし……、敵を丸裸にしてやるもんねー……）」

チエルシーは、少々ではあるがいつもよりも気合が入っていた。

理由は勿論、あの男に色々と言われたからだ。

『チエルシーは心配』『ポカミスするなよ』

と癪に障る事を言われているから。恐らくは何処かでしれつとみているかもしれないから、寧ろ見せつけてやる思いなのだ。完璧な仕事を。

「（ふんっ！ ……つとと、兎も角冷静に、冷静に。一先ず、空から見た感じ、異常は……ん？）」

空高く上がり、船の前方を注視したその時、不自然な一隻の船を発見した。

勿論、先頭の天狗党のメンバー達も気付いている様で、警戒をしていたのだが……。

「(!!)」

船をつけた瞬間だ。……一瞬だった。船の中に隠れていた男が、先頭の船に乗ってい

た天狗党の2人を斬り割いた。抵抗する事も出来ず、全身を斬り刻まれ……、絶命した。
「続け、雑魚ども」

男の合図だろう。

しびれを切らせたのだろうか、無数の人影が現れ、瞬く間の内に、周囲の船に襲い掛かった。

「(……いや、やられ台詞を残した人たちとはいえ、ああもあつさり……)」

チエルシーの背中には冷たいものが伝う。

今までも色んな人間を見てきた事もあり、相手の力量も、少しであれば感じ、計る事が出来る。小者感満載な天狗党のメンバーも筋肉のつき方や、オールベルグの名を知った後、一瞬で切り替えた事、携えた武器等の情報だけでも、間違いなく弱くはない。

弱く無いのに——文字通り、一蹴されてしまっていた。

この奇襲は、最後尾のタエコとババラも当然判っていた。

「……先頭、それに中央への奇襲。位置取りを誤ったか」

タエコが剣を構えて、突入しようとした時。

「ちよい待ちな」

ばあんっ、と何かを叩く音が響く。

ババラが、タエコのお尻にパシッと一撃を入れたのだ。……さっきの男のセクハラではなく、割と痛い一撃だった。

「っ!？」

溜まらず、タエコはお尻を抑える。

中々のシーンで、喜んでいそうな気がするが、とりあえず今はスルー。

「逆さ。ワシらは最後尾で逆に良かったのさ。ほら見な。天狗党のやつらがすごい勢いでやられているよッ！」

河に流れてくるのは、ババラの言うように、天狗党のメンバー。……無残にも殺された天狗党の死体だった。

「地の利が無い。ここは敵が来る前に退く。飛び込むよ！」

「……了解した」

迷わず、タエコとババラは水中へと飛び込み、場を離脱した。

「(後はチエルシー。お前の仕事だよ。……危険な相手とは思いますが。……まあ、心配はしてないがね)」

頭上を見上げるババラ。

夜ゆえに、チエルシーの姿は確認出来なかったけれど、チエルシーは大丈夫だ、と安

心していた。

もしも——チエルシーがドジを起こして、鉢合わせをしたとしても。

ここに現れたあの男が。チエルシーをそれなりに気に入ったであろう、あの男がむぎむぎ殺されるのを見ているとは思えないから。

そして、タエコとババラが離脱したその数分後の事。

天狗党を全滅させた男たちが、残りの船に残敵がいなかを調べていた。

「……………あれ? 誰もいない……………」

「……………無人だったとは思えない。河に飛び込んだか」

「じゃあ、水中にいるアカメの仕事だね」

「……………」

周囲を確認する男……、この集団のまとめ役である《ナハシユ》。そして同行しているのは、《グリーン》

ナハシユの優れた感覚は、何かを感じ取っていた。

確かに敵は見えない。水中にもぐっているのであれば、間違いなく船の上にいる自分達の事を見ている訳がない。だというのに、何かを感じていた。

「……この感覚は、だれかに見られているのか？ ……む」

そんな時だ。

羽音が空から聞こえてきたのは。

「（あれは、メガフクロウか。……この周辺にいる生物と記憶しているが、神経質で人を嫌がるはず）」

近づいてくる一羽の鳥に不信感を抱いた。

優れた指揮者であり、優れた頭脳の持ち主でもあるナハシユは、あの鳥に何かある、と瞬時に察すると。

「（おい、雑魚）」

「ん？ どうしたのチーフ」

「（声を小さくしろ）」

小声で、グリーンに話しかけた。

メガフクロウに何かを感じたナハシユ。

それは、正解だった。

「(もうちよつと。……さっさと背けちやつたから、アイツの顔を確認できてない)」

メガフクロウは、チエルシーが化けている鳥だからだ。

この場に生息する鳥だという事はしつかりと調べていたチエルシーだったが、その性質……、神経質で人間を強く警戒する事は把握しきれなかったのだ。

「(しつかりと見て覚えて、人相書を広めたら、仕留めれる確率も上がる……。もうちよつと——)」

警戒をしながら、徐々に高度を下げるチエルシー。

チエルシーは、この時いくつかのミスを行っていた。

1つ目に、完璧な仕事にこだわってしまった事。

あの男に色々と言われたから、と言う理由が一番だが、それでも 自分自身の感覚を、感性を乱してしまったのは、チエルシー自身の責任である。

そして、2つ目。

これが最も最悪なミス。

「今だ。雑魚」

眼下の男の――、ナハシユとグリーンの力量を見誤ってしまった、と言う事。

第13話 全員で攻める!

——本当に、不注意だった。注意力に欠けていて、……散漫だった。

普段だったら 間違いなく深追いせずに、即座に逃げる事を選んでいた筈なのに、更に接近してしまった。本当に、不用意に近づきすぎた。……チエルシーは、自分の見栄を、優先してしまった。それは、殺し屋としてあるまじき行為だ。

そして、これがその代償、なのだろう。

「つつつあぐつ!」

一瞬だが、永遠にさえ感じる事が出来る時の矛盾を感じたチエルシー。痛みが脳に伝達する間の刹那の時ではあるが、その間に長く後悔をしていた。……聽て、焼ける様な痛みが、右肩に感じる。

右肩だけでなく、脇腹にも同じ強い痛みが襲ってきた。

「(肩……、腹……、とび道具……、武器……、不味い…… 致命傷)」

ぐるぐると、脳が回転を速めるが、最早手遅れと言つていいだろう。

鳥が翼をもがれてしまえば、どうなってしまうのかは明らかであり、飛べなくなってしまうたら、何が待っているのかも、明らかだ。

そして、強烈なダメージを受ければ、ガイアファンデーション 帝 具の擬態も完全に解けてしまう。

姿を晒し、且つ下にいる化け物たちの元へと落下してしまえば、待つのは死だけだ。

「動物虐待は趣味じゃないんだけどなあ、チーフ」

見事、一瞬の間をついて、攻撃を当てる事が出来たのはグリーン。それは、本当に一瞬だった。チエルシーの散漫さもあつたかもしれないが、それなりに離れている上空。そこにいる鳥チエルシーに攻撃を当てる事が出来たのは、グリーンの持つ武器にあつた。

それは《臣具》と呼ばれる武器の一つ《サイドワインダー》。

扱いづらさはあるが、持ち主の意のままに動く鞭状の武器である。先端には鋭利な刃を備え付けてあり、鞭の回転速度と音速を超える武器捌きで、直撃させたのだ。

等のグリーンはと言うと、チーフのナハシユの指示が動物虐待、としかとらえて無かつた様で、少しばかり嫌な表情をしていたのだが、それを一括する。

「黙ってみてみる、雑魚」

上空を睨み付けるナハシユ。

「え？」

それにつられて、グリーンも空を見上げた。

——ああ、私……ほんとバカだ。

2人の会話は、嫌と言う程、聞こえていた。

どうやったのかは、正直判らないが、変装を看破されてしまった、と言う事は理解できた。つい最近、自分の変装を見破られたばかりだというのに、同じ轍を踏んでしまった事に、チエルシーは、心底自分自身に呆れてしまっていた。

だけど、もうどうする事も出来ない。

鳥の翅の部分は、自分の肩。……そして、もう一か所は腹部。そこを貫かれてしまったのだから。

今日だけで、二度も死の覚悟をするとは思ってもみなかったが、今回は本当にダメだと、チエルシーは、諦めていたその時だった。

『だーから、言っただろ? ポカミスするなよーって』

あの声が——、あの、陽気な声がかまた 頭の中に響いてきたのだ。

ナハシユ、そして グリーンが上空を見上げた時だ。

メガフクロウがいた場所。その空域を覆うかの様に、黒い霧が生まれていた。「あ、あれ？　ちゃんと当てたのに、あの鳥はどこ行つたの？」

「……………」

グリーンは困惑し、ナハシユは、自身の剣を握りしめた。

この時のナハシユの脳裏に浮かんだのは『パンドラの箱を開けた』だった。

不信感を持ったまでは良かった。だが、予想が完全に外れてしまった。

——あのメガフクロウは、敵側の伝達役を担っているのではないか？

程度にしか考慮していなく、落とせば 敵側の情報を得る事が出来るだろう、と考えてグリーンに指示を出したのだ。…………だが、現れたのは 黒い霧であり、それも 広がっていつているのだ。

日も落ち、闇闇が辺りを支配する時間帯だというのに、夜の闇よりも暗い何か、現れたのだ。

『…………余に、手を出したのは、うぬらか？』

その霧、暗黒がゆつくりと左右に広がっていき、聽て 形を成していく。

それは、人の形。…………闇を纏った何かが生まれてきた。

『いい度胸だな…………、人が、余に手を出すとは。…………余はただ無害な小鳥を演じ、ただ見ていただけなのだがな』

黒い何かは、口元に手を当てて、くくつ、と笑みを見せていた。

「……ちーぷ? アレ、なに??」

「……構えろ、雑魚。今までの相手とは違う」

ナハシユは、剣を素早く構えた。

グリーンも慌ててナハシユに続いて構えた。

「……何者だ?」

空にいる何かは、ナハシユの問に答える様にゆっくりと降りてきて、水面に立った。

『闇』

そう答えた瞬間、翼の様なモノが、何かから生えた。

圧倒的な威圧感を携えながら。

「おい、ナハシユ! 一体なんだってんだ、アイツあー!」

残党狩りを終えたメンバーが次々と戻ってきて、同じ船に飛び乗った。

ガイ、ポニイ、ツクシ、コルネリア、アカメ、グリーン、ナハシユ。

幼き日より、帝国の暗殺者として、鍛え上げられ、帝具には劣るもの、強力な兵器である臣具を操る強者たちである。

「雑魚共。油断するな。……アレは、異常だ」

一筋の汗の滴が、ナハシユの頬に伝っていた。

この暗殺グループのチーフ。まとめ役であるナハシユの実力は、この場の誰もが知っている。自分達のN.O. 1だという事も、含めて。そんな男が見た事もない程表情を強張らせている。

「チーフが、相手を《雑魚》って言わないの、初めてかもしれない……」

「(気味が悪いよお……)」

ナハシユの隣に来ていたアカメは、いつもと違う様子を見て、警戒心をさらに上げ、相手の不気味さを見た目ですぐにはわかったツクシは、ただただ 怖がっていた。

「(……これまでの相手とは、桁が違う様ね……)」

「アイツ、いったい何なのよ……。なんか気持ち悪い」

警戒心を上げているのは、アカメだけでない。N.O. 3のゴルネリアも同じだった。そして、いつも勝気なポニイ、どんな相手でも正面突破を繰り返してきたのだが、今回ばかりは、安易に動く事が出来なかった。

これまでに見た事もない相手と戦う事は決して珍しくないが、それでも、今までで、最強の相手と比較しても、全く話にならない、と言うのが第一の印象。

危険度を肌で感じた面々は、夫々の武器を構えた。

手甲、鞭、布、剣、鎧、銃、刀。7人其々が、決まった武器ではなく、異なる武器を所持しており、それらは全て臣具。強力な兵器だ。数で勝り、武器の強さもあり、普通

であれば圧倒的に有利だ、と言えるだろう。……だが、今回の相手は普通じゃない。相手の強さを理解できるのも、強さの内である事を、ナハシユは知っている。そして、肌で感じたのだ。その相手の異質とも言っているいい力を。

武器を構えたメンバーをゆっくりと見渡した後、闇はまた笑った。

『くくく……。面白い。余興も面白いかもしれん。……余が直々にぬしらに稽古をつけてやろう。……そうだな。これは褒美だ。余の正体を看破した童への』

翅をさらに大きく広げた瞬間。

『うりゃあああ!!』

『うおおおっ!!』

闇を纏った何かと、ナハシユ率いる暗殺部隊が激突したのだった。

第14話 助けられたけど、怒る（照）！

——ここは……何処、なんだろう？

深い深い闇の深淵の中で、チエルシーは、何かを感じていた。あの陽気な声が聞こえてきた、と思つたのだが……、今は何も聞こえない。

今、自分が何処にいるのか、一体どうなっているのか、それさえも判らない。

だが、殺し屋として生きていく以上、……自分の手を血で染めた以上、いつか、報いを受けるのだという事も判っていた。……その、つもりだった。

でも、当然だけど——死ぬのは初めてだ。ここから、何処へいくのかも判らない。

ありきたりな話では、自分が過去に殺してきた者達が、黄泉への案内人となり、自分を苦しめながら、連れていく。死後の世界は、様々な諸説があるが、誰一人として知る者はいない。……現世には、死んでいる者はいないのだから、当然だろう。

——殺し屋には、闇の中がふさわしい、かな……？　でも、何？　なんだか……力強く、抱かれてる気が……。

そう、見えない闇の中だというのに、殆ど感覚がつかめないというのに、触覚だけは伝わっていた。暖かくて、何処か安心できる。

ふっ、と身体から更に力が抜けた次の瞬間だった。

目の前に一筋の光が現れ——、闇が払われたのだ。

「……………」

チエルシーは、突然の光に、目を閉じてしまったが、ゆっくりと開いた。まだ、ぼやけている視界。少々息苦しさも感じるが、まだ大丈夫だった。……そして、目の前に何かがあるのは判るが、それが何なのか、判らない。……それでも徐々に鮮明になっていき……輪郭が……。

「ん……………」

「……………!!!」

目の前に、いるのは……、顔だった。そう、目の前。……眼前。零距离。

そして、今——自分がどうなっているのかが、ゆっくりと——確実に、理解する事が出来てきた。

息苦しいのは……、口を閉じてしまっているから。……開く事が出来ないから。

何故なら……、自分の口は……。

「んっ……………、ふう……………」

ちゅぷん……………、と 艶やかな音を奏でながら、眼前の顔は、ゆつくりと離れていった。そして、更にチエルシーの感覚が鋭敏になる。元に急速に戻っていつてる。

「あ……………、な……………、な……………」

後は1秒もかからないうちに、チエルシーは完全に身体の感覚を取り戻す事が出来ていた。

今、何がどうなっていたのか……………、何をされていたのか。……………目の前にいるのが誰なのか、全部、全て。

「お、目を覚ましたな？ 大丈夫か？ チエルっち」
陽気な声、そして にこやかな顔が、眼前にある。

そう——、自分はこの目の前の男に——、自分の唇を——。

「なななななな／＼／＼／ 　　な、なにすんのよ————っつつつ!!」

「ぶっ——」

かあっ！ と一気に顔が紅潮し、その赤くなる勢いと同じくらいの速度で、頭突きを

打ちかました。初めて、攻撃する事が出来て、妙な達成感も覚えなくてもいいが、今はそれどころではない。

「あ、あああ、あんた!! わ、わた、わたしのつつ」

「あたたた……、ほれ、チエルっち、元気になったのは結構な事だが、ちよつと落ち着いて。暴れると落ちるぞ?」

「落ち着いていられないわよ!! わ、わたしのファースト…… えっ?」

羞恥から激高していたチエルシーだったが、ここで漸く今の自分がいつたいどういう立場に立たされているのかを理解できた。

今、自分がいるのは上空。ガイアファンデーション 帝 具を使っていない。つまり、ただの人間の状態。

そんな状態で、この空にいれる訳は無い。

つまり——。

「そつ、そゆこと。チエルっちは、今お空の上。でも、大丈夫。オレがしーっかり、抱きかかえてやつてるからな。安心しろ。別に下心なんてないんだぜく♪」

「わ、わたしには帝具があるんだから! そんな事しなくてもいいじゃないっ!! つて、説得力無いわよ! 手つ、むねつ、むねつ、触るな、揉むなっ!!!」

お姫様抱つこの要領で、抱えられているから上半身に回されている手で、悪戯をされている事に十分気付けた。

「おおっと、これは失礼っ！ 動けない所にするのは 面白味半減だなく。……でもな、チエルっち。帝具^{それ}使う事が出来るコンディションじゃないだろ？ 体調が万全じゃないと、コントロールが効かなくなるんだぜ？ 帝具^{それ}つてやつは。どれだけ慣れててもな？」

「そ、それはそうだけど……、つて！ そんな事より!! どどど、どう云う了見よっつ！ セクハラしただけじゃ、飽き足らず。わ、私の ふあ、ふあーすと、きす／＼……奪うなんてっ！」

殺し屋に身をやつした以上、まっとうな生き方は出来ない。と、判つていても、やっぱり乙女な部分がチエルシーにはある。だからこそその猛抗議だった。

そんなチエルシーの、柔らかい唇に人差し指を当て、言った。

「いや、これはほんと。マジで悪いと思つたんだがな？ チエルシー。チエルシーの受けた傷、結構深手で、内1つは、肺にまで達していた。だから、ちゃんと治すのに時間がかかる上に、ああでもしないと、身体ん中の負傷は治せないんだ」

「え……？ 傷?!」

チエルシーは、何時になく真面目な顔になった事に驚いたのと、本当に一体何を言っている？ と思つたが、ここでまた1つ思い出す事が出来た。

自分がいつたいていどうなつてしまつていたのかを。……そう、追跡をしていて、見つ

かかってしまった挙句、撃ち落されてしまったという事実を。

「いやあ、あの坊やたち、大したもんだ。チエルシーとあんまり歳変わらないうって感じなのになあ。それに……あの子らも、な」

じ、っと眼下を見下ろした。そこでは、まだ戦塵が立ち上っている。

「わ、私——、そつか。ケガ、したんだ」

チエルシーは、傷の痛みも、何処を貫かれたのかも、全て思い出した。

改めて、自分の傷を確認する為に、視線を向けた。……治療をしてくれた、と言う事なのだろう。服にこそ、穴が開いているものの、身体そのものには傷は全くなかった。痛みも、今は全く感じられなかった。

あんな傷があつさりと治る訳がない。……でも、間違いなく彼が治してくれた事も理解できた。

「ケガの一言じゃすまないくらいに傷を負ってたな？ だから、ポカミスするなよー、って忠告したのに」

「……悪かったわよ。それに、その……」

チエルシーは、顔を背ける。

「ん？ どーした、チエルっち」

背けた側に、にこっ、と笑いながら顔を向けて、視線を合わせた。……からかつてい

る事は判る。それでも、チエルシーは今回ばかりは。

「あり、ありがと……」

今回は完全に命の恩人だから、しっかりと礼を言った。

「ははは!! とーぜんだろ? オレ、チエルつちの事、気に入ってるんだから。それに、チューもした仲だし、更にとーぜんっ! つくまりく、チエルつちはオレのくっ☆ ごちそうさんでしたく☆」

「わ、わたしは同意した覚えは無いっつ! それに、さっきのキ……、っ じ、じんこーこきゅーみたいなもんでしょっ!」

「まあ、それは 否定はしないけどね。しっかりと、チエルシーを攻略してやるからな? かーくごしとけよー」

男はそういうと、腕を少し強め、チエルシーを強く抱いた。

移動をする為に。

「も、もう……// //」

チエルシーは、それ以上は何も言えず……ただただ、身を任せるしか出来なかったのだった。

そして、暫く飛んでいて、疑問に思った事があった。

「それで、あの凄腕集団はどうしたの？ ……ひよつとして、全部片付けちゃった？」
 そう、それだった。

自分が撃ち落されて、彼が助けしてくれたのなら……、間違いなく鉢合わせをしている筈だから。

「ん？ 馬鹿。そんなもつたいたい事しないって。あの子らは、これからなんだ。若い芽を摘むつもりは毛頭ない。……茶々は入れてもな？」

「んっ！ もうっ！ 呼吸をする様に、セクハラするな！」

「ははは！ つと、真面目に答えとくと、あいつらは、今稽古してる最中」

「は？ 稽古?？」

チエルシー、何度目かの混乱である。言ってる意味がよく判らないから仕方ない。

「ほれ、見てみ」

男が人差し指と親指で、○の形を作り、チエルシーに見せた。

一体何がしたいの？ と思ったチエルシーだったが、聴て吸い込まれるかの様に、その○の中を覗き込む。……すると、驚く事に、まるで望遠鏡でも覗き込んでいるかの様に、しっかりと見えたのだ。……それも、ピンポイントで、音声付き。

『ははは。なかなかやるではないか。久しぶりの戯れ、余も満足しておる』
『この、化けモンが!!』

あの集団の中でも一番の大男。何やら全身に防具? の様なものを身に着けていて、顔は見えないが、大きな拳に更に何か大きな岩? 石? の様なものを纏わせて殴りつけていた。

が、その拳もどこ吹く風。全く届いていなかった。

『おい、雑魚。冷静になれ。……あの男……、実体がない、と言うのか』

『ほう……、何故そう思う?』

恐らくリーダー格の男。金髪のつり目の男が疑問視し、それに興味を持ったのか、あの黒い何かが、面白そうに聞いていた。

『オレの攻撃。殆ど躲されたが全てではない。……間違いなくとらえた筈だ。だというのに、まるで手ごたえが無かった。……水や霧、無を相手にしている様だった』

剣の刃を確認しながら、そう呟く。

『私も同じだ……。剣が全く届かなかった。身体を捕らえた筈なのに』

もう一人の女の子。こちらはもうちよつとで、素顔が確認出来そう……つて所でフェードアウトした。

「ちよ、ちよつと。もうちよつと見せてよ」

「はい、だーめ。ネタバレはここまで。バーバラやタエっちの会社にチエルシーが入ってる以上、あの子らとぶつかるだろ？ 楽しみはとっとけって」

「楽しくなんかないわよ！ あんな凶暴な連中を相手にするなんて！」

「そこは、腕の見せ所だろ？ 暗殺者、殺し屋って、必殺が通常。正面からの戦闘以外にもやり方は色々あるし。何？ チエルっち。正面衝突するつもりだったのか？ ぶっ刺されたのに?？」

ぶぶぶ、と含み笑いをすると、非常にイラツと来る。

そして、バーバラが言っていた言葉もこの時同時に思い出していた。

『傍観』と言う言葉。……安易な情報は渡してくれない、と言う事だろう。

「（かといつて……、わ、わたしの身体を売るような真似なんて、絶対やだし……、くっそ……、ぜ、ぜったい目にも言わせてやるんだからっ……!）」

それ以上は、チエルシーは何もせず、ただただ我慢して運ばれるだけだった。

……時折セクハラしてくるのだけは抵抗して。

第15話 死ぬのなら頂く！

「と、言う訳で、無茶&無理しちゃった、チエルっち。無事に届けに来たよおバーバラ。タエっち」

「やれやれ……、アンタの取柄は、臆病すぎるってトコにあつたのに、何してんだい」
「うう……、返す言葉ありません……」

ババラやタエコが身を潜めていた場所は、古びた小屋。有事の際は、この小屋に逃げ込む手筈になっていて、それもしれっと 彼は聞いていたから、そのままチエルシーを抱えて連れて返ってきた。

因みに、連れて帰ってきてくれる間は、文句の雨霰だったチエルシー（内容はほぼセクハラに対するもの）だが、ババラに痛烈な一言をいわれてしまつて、ぐうの音も出ない様子だった。

「チエルシー！ 無事でよかつた……」

タエコは、チエルシーの傍へと駆け寄つた。

けがない事を確認した後、彼の方を見る。

「本当に感謝します」

「なんのなんの。言っただろ? チエルっちとタエっちの2人は、お気に入りなんだぜー♪」

よしよし、タエコの頭を撫でる。

珍しく、頭を撫でるまでに留まっている様子だった。

「それに、2人は媚びてこないからなっ。簡単に落ちない所も、燃える! うんうんとつても良い所だ!」

「だーれが、アンタなんか媚びるかっ!! ちょ、ちよつと助けたからつて、ちよーしに乘らないで!」

「おっ? 照れてるか? チエルっち」

「照れるか!」

楽しそうに? 言い合いをしている2人を見てババラは、再び軽いため息。

——これまで、オールベルグの頭領にも、血の滲む、断腸の思いで了解を出して、この強大な戦力である彼を懐柔する為に、タエコに似た少女や、美しい娘たちを使い、尽させた事がある。

因みに、タエコ自身の性質は彼には完全に把握されている為、掌を返す様な対応をさせれば、心証が悪くなるだろう、と言う事で彼女は任務に入れなかった。

当初こそ、オールベルグの誰もが、彼は強さを除けばただの好色家だと判断していたのだが……、続けていく内にそれは誤りである、と言う事を直ぐに理解する事になった。何度も何度も尽そうとしては、失敗し続けてきた。それどころか、飽きた、と言わんばかりに、だんだん姿を見せなくなつた。

どういう訳か、心を腹の底まで読めるとでも言うのか、仕込んだ女達は全て失敗。気にかけてくれる様に残つたのは、タエコを含む、僅か数人と言う状態になつた。

諦める切つ掛けになつたのは、心底つまらなさそうな顔。何の興味もない、と言わんばかりの乾いた顔を見た時だつた。

「それで、チエルシー。ちゃんと手掛かりは得たんだろうねえ？ 何もありませんでした、出来ませんでした。なんて言つた日には、コイツにマンツーマン訓練コースを受けられてもらうよ」

「つつ、ちゃ、ちゃんと見ました!! 見ましたつて!!」

「えー、それ、ゼーんぜん、罰になつてないじゃん。そんなにビビんなくつてもチエルつちー オレ、優しく教えてやるぜ??」

「うっさいー!」

と、言う訳で色々とおつたが、ちゃんと何人かは覚えていたチエルシーが、人相を必死に紙に書いていた。

さらさらさら、と書いたのは2人分。

「なんだい。子供じゃないか」

「……私より、少し小さいくらいだ」

2人に見せて、その素顔から大体の年齢を察した。

まだまだ、大人になり切れていない幼さが残る子供だという事も。

「他のヤツは? たった2人ってこたあないだろう?」

「はははは。チエルつちは、勇敢にも突っ込んでいつてさ? バーバラ。敢え無く返り

討ちにされちゃってー」

「私が説明するから黙ってて!」

チエルシーは、両手で男を追いやると、ちゃんと説明をした。

「打ち止めです。……ちよつと、目が曇ってたと言わざるを得ませんが、そつちの眼鏡をかけてない方。直前まで殺気を消して……、今更ながら思い出しますけど、威圧感も半端なかったです。幸いにも、顔はバレてないですけど……、もう近づきたくないつて感じです。帝具使つたとしても」

「……もうちよつと早くにその感覚を出しとくべきだったね。まあ、命あつただけでもマシつてもんさ。それに、相手の顔が判つたのも同じだ」

次に巴巴ラは、タエコを見た。

人相は、確かに子供……だが、天狗党の連中を軽く一掃されてしまった事實は変わりない。子供である事も考慮したら、非常に危険な相手だという事は間違いない。

「(だが、若いモン同士だったら、ウチのタエコに勝てるヤツはいないさね……)」

絶対的な自信がそこにはあった。

幼いころから育ててきた逸材なのだから。

「……次はこつちから仕掛ける番だね」

タエコも、自分と近しい歳の刺客が相手である事を聞き、静かだが……氷の様な冷徹さと炎の様な闘志を胸に秘めていた。

こんなシリアスな場面なのだが。

「まあ、まあ、楽にいこーぜ？ タエコち。それにチエルっちも」

がくつ、と腰が抜けるかの様な発言が飛ぶ。

「はあ……、あ、私密偵さん達に、この顔が町にいないか、周囲を調べてきてもらいます」
「ん？ 一人でだいじょーぶ？ また、ついてい「来なくていい」はいはい」

速攻の拒否に、両手を上げていた。その仕草を見て、チエルシーは思う。……今回は何だか、早々に引き下がった気がした、と。だが、それ以上は気にせず、町の方へと向かっていくのだった。

「あ、チエルシー。私は着いていく。少し、心配だから」

「た、タエコさん……、ありがとうっ！ 大好きだよー！」

「ぶーぶー、せーつかくオレ、助けてあげたのになあ」

タエコと2人で、チエルシーは町の方へ。

文句言つてた彼に対して、チエルシーは悪戯つ子な顔をして、舌をべーつ、と出して
いた。

「ふむふむ。可愛いからOKかなあ」

なお、彼にとってはその素顔も可愛いので、OKとした。

「ババラ」

「……あん？」

所が一転。突然、名前を呼ばれて……、それも普通通りに読んで、少々驚いたが、バ
バラはそれを表情に出さずに、振り返る。

「タエっちは、確かに強くなったけど、今回の相手は、なかなかやる子達だ。久しぶりに
ワクワクしたくらいだからな」

「……成る程。アンタ チエルシーを助ける為に応戦した、って事か。いや、遊んだ、と
言つた方が正しいかい？ ……で？ ただ忠告をくれただけじゃないだろうか？」

「勿論。チエルっちもそうだけど、タエっちは元祖。知つての通り、オレのお気に入りで
もあるんだなあ。タエっちが死ぬ様な事になったら、攫つてくけど、文句ないよな？」

メラルーもOK出してるとし」

「……(タエコが負けるかもしれない、と言う事か? ……それ程の使い手が……)タエコを失うのは痛手だが、それでも、育ててきた情つてもんはある。死ぬくらいならマシかもしれないねえ。他の誰でもないアンタが連れてくならね」

手を振って答えるババラ。

殺し屋が情を持つというのは、御法度だ。情と言うものに、流されて死んでいった者は数知れないのだから。それを踏まえてでも、ババラは一笑した。

「ふん、何処に連れてくか知らないが、嫁に貰ってくれるつて事かい?」

「おつ、タエつちが嫁さんかあー、悪くないかな? だけど、オレ、どつちかっていうと一夫多妻が心情だしなあ、タエつちつてば、ちよつぱり一途つばいとこ、あるしー、どうしよつかなあ。困つちやうなあ〜♪」

「後ろから刺されない事だね。鬼の住処が何処なのかわからないが、メラ様が了承している以上、儂は構わないよ。だが、泣かせたりしたら、承知しないよ。……ああ、後はタエコの子供が生まれたら、オールベルグで引き取りたいね。良い使い手になりそうだ」

「おばあちゃんと言うより、お母さんだな。バ―バ―は」

暫く笑いあつた後、いつの間にか煙の様に男は姿を見せなくなつた。

「ババラでも見る事も、追う事も出来なく、そしてもう気配を察知する事が出来なかった。」

「ヤツあ、ほんと一体なんなんだい……」

以前オールベルグの隠れ家にて、一戦交えた間柄。

戦える者を総動員しての戦いだったが、完全に子供扱いをされてしまった。……オールベルグのトップ、頭領をもだ。

「パンドラの箱、と言わざるを得ないだろうねえ。……いや、或いは」

ババラは、ゆつくりと空を見上げた。

雲が流れており、間に顔を出す太陽の光。……その光の中に大きな影はいないかどうかを、目で追った。

それは言い伝え、伝説の話。

長らく戦ってきたババラも、勿論その伝説は知っている。影が出ている時に——悪行を働いた者。そう、と判断された者が、目の前で突然、光が降り注いできて消し炭にされたのも見た事があった。

「(……アイツが、アレだっていう可能性だってあるだろう。だが、アレに人格があった？ ……考えても答えが出る訳じゃない。な。……忠告は聞いておいた方が良いだろうねえ)」

ババラはそう呟くと座ったままの体勢で、暫く目を閉じ 休息に努めるのだった。

第16話 昔話をする!

「……タエコさん」

「ん? どうかしたか、チエルシー」

それは、オールベルグ直属で雇っている密偵達に人相を伝え終えた後の事。

何やら深いため息を何度かしていたから、タエコは少なからず気になっていた様だ。

「ほんつと、アイツって何なのかな。今回だって、訳わからないままだったし……、そ

の、攻撃されて 負傷した……違う、重症を負った時。私、死ぬって思った。……だけ

ど、アイツが笑いながら引つ張り上げてくれた。……アイツは、何でもできるの?」

「……チエルシーが言いたい気持ちは私にも判る。あのひとが、一体何なのか。自問自答、してたから」

長い歴史を持つオールベルグ。その歴史の中でも極めて大きな事件。

それが つい数年前の《オールベルグ本部襲撃事件》

その時、タエコもいた。……その力を目の当たりにしたのだ。



『……あなた、一体何なの？』

まさに白昼堂々だった。

オールベルグは、闇の世界では誰もが知ってる程の暗殺結社。その圧倒的な実力は誰もが畏怖し、闇より狙われれば生き残る事は出来ないとまで言われている集団。帝国もオールベルグに関しては 最も警戒している。だが闇の中で蠢く暗殺者を視界に捕らえる事は出来ない。密偵を潜り込ませても、瞬く間に殲滅されて手掛かりさえも残らない。

残るのは——狙われた相手の無残な死体だけだった。

そう、相手の死体だけなのだ。……その筈なんだけど……。今回だけは違った。

音も無く突如現れた侵入者の男は、瞬く間にオールベルグのメンバーたちを圧倒していた。誰もが暗殺者として高度に訓練されてきた兵士達だった。……なのにも関わらず、まるで子供扱いだった。

『はあ……。つともー！ ちよつと話すくらい良いじゃん良いじゃん！ なーんで

ここの皆してそんな邪見すんの？ って、あれ？ お前さんがここのボスかな？

……ちよつと何とかしてくれない？ オレそんな悪い奴じゃないからさ！』

男がたっていた。

一目見て異常だと分かった。

その男は漆黒を纏っていたのだから。それだけでも十分警戒するに値する。そしてその佇まいは今まで出会った強者。暗殺者を含めた手練れ、己の戦いの歴史の全てと照らし合わせても比較にならない程の何かを感じた。陽気な表情で近づいてくる。除だらけに見えるその歩法。……見た事も聞いた事も無いモノだった。

今 相對しているのはメラルド・オールベルグ。現オールベルグの頭領にして 最強の暗殺者。

その秘密は彼女が持つ《蟲》に秘密があった。

その蟲の名は《蠢くもの》

オールベルグ頭領に代々受け継がれる昆虫型の危険種の群の総称。

虫たちは様々な特性を持ち、術者の意のままに動かす事も出来る。影より忍び込み肉体を斬り割り、穿ち、そして食い荒らすもの、毒を放ち動けなくするもの、身体そのものが爆発するもの。様々な種類がいて、その全てが危険種。……無限に思える蟲が瞬く間にターゲットの命を食む。

その筈だった。例外はない筈だった。

『攻撃が……全て通じない。とでもいうのかしら』

幾度となく繰り出された攻撃。当たっていない訳はない。倒れている仲間達の攻撃も間違いない。当たっている。なのに——まるで効果は無いのだ。自分自身が操る蠢くものさえも例外じゃなかった。

『あー、うー……。虫はあんまし好きじゃないんだよねえ……。君はとっても素敵なのに、なんか非常にアンバランスだよな。虫より花の方がぜってー似合う』

『虫唾が走るわね』

『おっ？ 虫を使うだけにか？ 中々面白い事言うなっ？ 余計に気に入った！ って

か、可愛いくて強い子は結構大歓迎だぞ』

陽気に両手を広げながら近づいてくる男。

それを見て、左右から飛びかかるのは先ほどあしらわれた2人組。

『この……っ！ メラ様に——』

『近付くな!! ケダモンが!!』

1人の娘は拳を、もう1人はチャクラムを使用し連携して攻め立てる。

ギルベルダとカサンドラ。

左右から迫る2人をちらりと見た男は そのまま両手で2人の攻撃を受け止めた。

渾身の一撃をあつさり止められ、特級危険種の固い鱗をも容易に斬り割く刃を素手で止めた。

何度も何度も攻撃を躲され続けた。漸く当たった。当たればそれで終わると思っていた2人だったから驚愕の表情をする。驚き目を見開いていた。

『蠢くもの——』

だが、2人の攻撃のおかげで生まれた唯一の隙を逃さず、メラルドが蟲を使って再び攻撃を始める。

今度は全力の攻撃。全ての蟲を使った物量で押し潰す攻撃。

まるで闇が蠢いているかの様に、暗黒となった蟲の群あつという間に男を覆い尽くしていった。

『骨も残さないで——』

メラルドの命令のままに、命を食む蟲の攻撃。

だが——、それも届かなかつた。

『いやほんと。熱烈な歓迎ありがたいんだけどー。……オレ、そんな酷い事したかな？
元々は、あの剣習ってるお嬢ちゃん。タエコ……だったかな？ その子が可愛らし
かつたから、声かけただけなんだけど。……なーんか一緒にいた おっかない婆ちゃ
んに怒られながら攻撃されて、その上 おばあちゃんと一緒になつてお爺ちゃんにも攻
撃されて。今度は可愛らしいお嬢ちゃんのタエコちゃん？ には斬られて、結構オレつ
てば傷心気味なんだよ』

声が聞こえてきた。

それも、3人の後ろから聞こえてきたのだ。

聞こえた瞬間、3人共々死を予感したのは言うまでもない。それ程容易く——男は3
人の死線を横切つたのだ。

『……………これは勝ち目がないわね』

メラルドは両手を上げた。

確実に殺せる間合いに入ってきたのにも関わらず、命を穿つどころか攻撃もしない。……ただ話しかけてきた。甘いだけの男かもしれない。……だけど 圧倒的な実力差があるからこそできる芸当だという事くらいは理解できる。

つまり——目の前の男は、いつでも殺す事が出来るという事だ。

それを認めたからこそ、メラルドは両の手を上げたのだ。

そして 彼女が負けを認める所をみるのは初めての事だった。そして メラルド自身も初めての事だった。戦いは勝ち負けではなく生き残る事こそが全てだ。負けを認めても死ななければまだ取返しはつく。

だが、メラルドは完全に降伏をしている様にも見えた。

だからこそ、激震が走った。

『メラ様っ！ 私達は命を懸けてメラ様をお守りします！ だから、最後まであきらめないでください！』

『私もだ！ こんな優男に、メラ様を奪われてたまるか!!』

ギルとドラの2人が激昂する。

メラルドが男に殺されてしまうのを連想したからだろう。

『だから なーんでそうなるんだっての！ オレはただ遊んでたら 此処見つけて入っただけじゃん!! ……あー、確かに 不法侵入かもしないけど、そんな邪見しないでよー。可愛い子ちゃんたちに邪見にされちゃったら辛くて仕方ないんだ。これが』
『黙れ！ 寒気がする様な事を言うな！ 私らは メラ様一筋なんだ！ あんたなんかに一ミリも靡いたりするか！ 気色悪い！』

『……………へ？ メラさまって、あの虫を使う君らのボスの事?? ……ええ??? 女の子同士なのに!』

『女の子は女の子に恋をするのが正しい姿なのです……。あなたが付け入る隙なんて微塵もありません』

今の今まで 殺されるのでは? とも思える様な展開だった。なのに 殺伐としていた空気が弛緩していくのがよく判るといふものだった。

そして 男が混乱しているのがよく判った。

『うえー? なんてー。そんな可愛いのに、勿体ないなあ……』
『やかましい! いきなり不法侵入してきたヤツに口説かれる様なヤツはここにはいないよ! さっさと出ていけ!』

『……うぐつ。痛いトコついたな……っ』

ぐぐぐ、と何処か悔しそうに男は唸っていた。

先程までは圧倒的だった。たった1人でオールベルグを潰せる。潰されるとも思えた。

だというのに、今は何だかその男が押されている。……それが何処か滑稽に見えた。ずつと警戒をしていた。負けを認め、反撃する気も削がれ、命を奪われる覚悟も決めていたメラルドだったのだが、いつの間にか、仄かに笑みを浮かべていた。

『……男に、ここまでの興味を持つのは初めての事だわ』

異常な力を持つ男の前に、そう呟いていたのだ。

その言葉に一番驚いたのは、メラルドの前に立っていたギルとドラの2人組。首が一回転するのではないかと、と思える速度でぐるりとメラルドの方へと視線を向けた。

『!!!
め、メラ様っ!!!』

『ま、まさか……メラ様が……、私達を導いてくれたメラ様が……あ、誤った道に……?』
道を外れようというのですか……?』

驚きの表情をしているギルと涙目になってしまってるドラ。

そんな2人の頭をそつと撫でつつ、ゆっくりと前に歩み寄るメラルド。

『勘違いしないで。興味を持つのと好意を持つのは違うわ。……私は女の子が大好き。』

それは変わらない』

『おお、奇遇だな。オレも女の子は大好きだ。良い目をした子は尚更！　ここにや沢山そんな子がいて、ドキドキの真っ最中のよ』

『そう？　でもそれは当然ね。……私の大切な子たちですもの』

メラルドは何処か誇らしげな表情をしていた。

そして、ドラもギルもその言葉に感涙する勢いだつた。

『それで、改めて聞くわ。……あなたは、一体何？　私達を狙う輩……　帝国の回し者じゃないの？』

『つとと、そりゃそつか。オレ自己紹介もしてなかったな』

メラルドの質問に　手をぼんつ　と合わせてニカリと笑う男は高らかに応えた。

『オレの名は《クロ》だ。可愛い子　綺麗な子　良い目をした子は大好きだ！　つてな訳で君らも好きだぜー！　仲良くしてくれ』

『誰がするか!!　寄るな触るな近寄るな!!　さっきのセクハラはわざとだつたんだな!!　このクソ野郎!』

『えー、不可抗力じゃーん。すつごい攻撃ではつやい攻撃だつたから　慌てて防御したら、当たっちゃった!　てへっ☆』

舌をペロリ、と出す男……クロだが。その表情に　仕草に真っ先に切り替えすのはギ

ル。

『……可愛くありません。気持ち悪いです』

『ひでっ!!』

まさに会心の一言で撃沈してしまった。

『ふふ。……ご生憎様。この子達はちゃんと真実の愛に目覚めているんですもの。付け入る隙は無いわ』

『うぐぐ……。うー、ぜってー 口説いてやる!!』

『絶対無理!』

『嫌です』

と、その後は ババラやタエコ、そして ダニエルも交えて更に一戦行った様だが、やはり単純な戦いでは全く勝負にならない結果になって 暫くは子供の様な口喧嘩で上回るしか無かったドラ達だった。

□

■

□

■

そして場面は元に戻る。

「そして、あの人は暫くオールベルグの当時の本部に暫くいたんだ。そこで私も剣術の手ほどきを受けた」

「………………。オールベルグの本隊って言われてる人達のだ真ん中に入って、遣りたい放題したって事ですか…………？ タエコさん」

「ん。そうだね。あの人は色んな意味で真っ直ぐだった。興味がある事には 真っ直ぐな眼をして見つめていたんだ」

「タエコさん！ 絶対よからぬ目で見てますって！ あまり隙を見せない方が良いですよ！ ……………ってか、アイツの名前《クロ》って言うんだ…………」

よく考えたら名前を訊いてなかったな、とチエルシーは今更だが 思い返していた。だけど、あまり深くは考えなかった。

「まあ、色んな意味で黒い奴だから。そのまんまって感じかしらね…………」
「チエルシー」

「あ、うん!? どうしたんですか？ タエコさん」

「いや、前。危ない」

「つて きゃあつ！」

タエコが声をかけてくれなかったら、前方不注意。小岩に足を取られて転びそうになっていた。…………が 何とか回避。

「チエルシーもあの人の事を考えてると思うけど……あまり深入りをしない事を薦める。本当に底が見えない人だから。色々と見失ってしまおうよ」

「つつ！ 大丈夫です!! 深入りなんか、するつもりはないです!!」

今までも色々であった。……あり過ぎたチエルシー。

タエコにそう宣言しつつ、自分自身にもそう言い聞かせるのだった。

第17話 温泉は混浴が良い！

……と言う訳で今は休憩タイムだ。

「ふああゝ、ここって良い旅館って評判の場所じゃん？　おー　バーバラっ！　良いトコにしたな？　グッチョイス♪」

1人でテンションが上がってる男。

暫くは行動の拠点とする街の一番の旅館に泊まる……と言う事になって　宿泊場所を決定し　到着した途端に合流した様だ。

「いつもいつもアンタは心臓に悪いね。老人を労わろうとは思わんのかい？」

「まーたまた。そーんなタマじゃないだろ？　バーバラは」

「ワシヤ　タマなんざ　ついとらん」

「それくらいしってるって、言葉の綾ってもんを知らんのかいつ？　って言う、ツツコミは置いといて……」

男はくるっ　と振り向いて　ババラの後ろについてきている2人と目があつた。

勿論 チェルシーとタエコだ。チェルシーは目が合った途端に視線を逸らせ、タエコはぺこりつとお辞儀をしていた。実に対照的な2人だが、構う事なく男は2人の背後にするつと移動。

「わっ!」

「そーんな、酷い対応しなくても良いじゃん、チェルっち! ほーら、ここつて海産物が美味しいんだぜ? 美味しいモン喰つて、一緒に騒ごう♪」

チェルシーに頬刷りする勢いで接近するが、チェルシーは『お断りです!』と言わんばかりに、右掌で押しやる。

「何が『騒ごう!』よっ!! 遊びに来てる訳じゃないのよ!」

「ここつてさあ、温泉も気持ちいいって評判だぜ? なんでも肩こりとか腰痛にも訊いて、お肌つるつるで♪」

「人の話訊け!! そして、次いでみたいに胸揉もうとするな!!」

如何なる時もチェルシーへのセクハラを止めない男は するつと滑らか鮮やかな手捌きでチェルシーの膨らみに手を忍ばせたのだが、何と阻止されてしまった。

「おー、やるじゃん! チェルっち。どーよ、バーバラ。オレが鍛え上げたチェルっちの動き。こんだけ動けば不意打ちとか喰らつても、多分対処できるぜ?」

「うっさい!! こんなんだだのセクハラよ! 何『鍛えてやったぜ』みたいな顔して

言つてんのよ！」

チエルシーが盛大にブーイングをしているのだが、実の所はと言うと、ババラも少しばかり驚いている。男の動きは色んな意味で神出鬼没。行動の後の先など取れる筈もなく、例えタエコであったとしても、妨げる事が出来ない。(ババラにはセクハラしないから、出来るかどうかわからない)

だが、チエルシーはそんな動きを呼んでいたのか、意図も容易く防いでしまったのだ。「正式に教育係として雇おうかねえ」

「止めてください!!」

チエルシーは、大きく手を交差させて?を作る。

その間に。

「タエつち。行こうぜー。また 剣術見てやるからよ」

「はい。宜しくお願いします」

タエコは従順そのもの。

今 腰に手を回したりしているのだが、拒否したりはせず 身を任せたままだった。が、当然チエルシーは許しません。

「コリアア! タエコさんの純血は私が守る! 手え出すな!!」

と 男の腕を取り上げてガード。

「おっ? チェルシーってばヤキモチ?? ぜーったいそーだろ? だいじょーぶだいいじょーぶ。オレ2人とも愛せる! 愛してるぜえ〜♪」

「誰がよ! 迷惑っ!!」

「と言う訳で、今日は一緒に風呂にでも入ろうぜ? 裸の付き合いだって大切だ」

「絶ツツツ対ツ 嫌ツツ!!」

「ほっほ〜 じゃ チェルっち。オレから逃げてみるよ〜? 本気を出したオレはヤバイぜ? 『手が2本あるみたい〜!』って巷じゃ女の子達の間で有名でさあ〜」

「手は普通2本よ!!!」

口喧嘩をしながら(一方的にチェルシーが怒ってるだけ)2人は宿の中へと入っていく。

「バランスが大切、ってことさね。タエコ」

「……うん」

2人を見つつ タエコに助言をし続けるババラ。

「極端に崇めて、懐柔しようもんなら あの男の興味は速攻で失せる。そもそも、オールベルグの本隊は色事には向かんから大丈夫とは思いますが、無理に取り込もうとは思えない事。覚えときな」

「判ってる。……あの人こそそばにいるだけで、こっちにとってはプラスの面が大きい。

標的が女だったら邪魔される可能性があるけど、それ以上に得られる物が大きい」

「そうさね。……オールベルグの名よりも、あの男を優先する場面もある事も忘れない事。メラ様もその辺は了承済みさ。(頭領が代々受け継ぐ『蠢くもの』も軽く一蹴する相手だ。その気になったら、オールベルグを崩壊させることなんざ、容易いだろう……。まあ、しないと思うが)」

組織を潰される危険性は0ではない、と判っているが、それでも全く心配はしていない様子なババラ。何故なら。

「(オールベルグの戦士の殆どが女。……メラ様の趣向のおかげとも言えるね)」

女を相手にする時、命までは取らない。そういう印象を今までに何度も受けている。

「さて、ワシらも行くかうか」

「うん」

ババラとタエコも旅館の中へと入っていったのだった。

旅館内でも色々とあつたチエルシーは、頭を突つ伏している。旅館の部屋に備え付けられているテーブルと対面している様だ。

「チエルシー大丈夫?」

「……大丈夫、じゃないかも……」

タエコの声かけにも反応が薄い。

「あの人は、そこまで酷く体力を消耗させる様な事はしないと思うのだけど……」

「………違うのー」

チエルシーは、ゆっくりと頭を上げるとタエコの顔を見て、また、がくつと頭を下げた。

「ど、怒鳴りすぎて、頭痛くなって……、おまけに声が枯れ気味で………」

一悶着どころじゃないやり取りがあつて、大声を出して罵倒し続けたチエルシー。

普通に叫び続けるのにも体力は使うし、度が過ぎれば、こういう風になる、と身をもつて知つた瞬間でもあつた。

「さらつと流すのが、プロつてもんさチエルシー。さつさとあの男にあげちまいな」

「……何を? とかは聞きません。嫌です」

教育係のババラに真つ向から反対するのは結構凄い事だ。のらりくらりと躲すのがチエルシーだったが、生憎今は余裕が無くなつてしまつている様子。

「これが続けばチエルシーはとんでもなく鍛えられるかもしれないな。過程はさておき」

「いやですー……、体力もちませえん……」

「泣き言いう暇あつたら鍛えな。本気で考えてるんだからね。それ程までにアイツの力は魅力的過ぎる」

からかう様子ではなく、真剣味のあるババラの言葉に、チエルシーもそれとなく真剣になりつつあつた、が。中々頭だけは持ち上がらない。

「確かに、出鱈目なヤツですけど…… あんなの、コントロールできる筈ないじゃないですかあ……。ほら色気で計算ずくで…… ってしたら駄目なんですよ？ 直ぐ見抜かれるとか。ドーしよーも無いじゃないですかあー」

ぐでえ とやる気皆無なチエルシー。いや やる気無いじゃなく、体力無이었다。

「そこはチエルシー。お前の出番さね。その本気で抵抗してる感じがアイツを興奮させんだろう？ 使わない手はないね」

「感じじゃないです！ 本気の本気！ マジと書いて本気！ 嫌です！」

腕を起用に上げて？を作るチエルシー。その表情までは見えないが、何だかんだと言つても 最初と比べてそれなりには柔らかくなつてる。チエルシーの事を助けた辺りから、少しだが変化がある、と言う事くらい見抜いてるババラ。

「素材だけを見れば 良い男だと思ふがね？ ねえ タエコ」

話題を変えてタエコに容姿について同意を求めた。

タエコは、少し考えた後。

「ん……。整った顔立ちはしてる……。と思う」

顔を思い浮かべてそう返答。

鍛えて貰った事が多々あって 至近距離で何度も見ている。そして 街で歩いてい
る無数の男性の顔も思い浮かべて……。そう判断した様だ。

「タエコは色事^{そっち}方面は鍛えてないからね。でもそこまで感じ取れるんなら それもあの
男の影響」と言った所か。乳や尻を何度も揉まれた甲斐があったと言うべきか」

「……………」

ふむ、と大真面目に言うババラ。チエルシーはもうツツコまなかった。

「所で、あの男は何処に行つたんだい？」

「んえー……。女の子漁りに行く。とか言つてた様な気がしますよー。なんでも 匂
うとか何とかって」

「そんなこつたるうと思つた。ほれ 今の内に温泉にでも入つてきたらどうだい？」

チエルシー、アンタ臭うよ」

「つつ!!」

色々と運動? をし続けた。

あの男がいるから肌を見せる様な真似出来る訳もなく、逃げ続けて風呂(混浴)拒否
続けた。長い長い時間がたったかの様に感じたが実際に時間は経っているのだ。髪や

肌はべたべた。確かに女の子が発して言い匂いではない。

「お、おんせんく……!! アイツいないし……、い、今の内に……」

よろよろと立ち上がったチエルシーは、至福の時を求めて温泉へとGO.

「まー、気を付けるんだねえ。いっどこで狙ってるか判つたもんじゃないよ」

チエルシーがいなくなつたと殆ど同時にそう呟くババラ。

この後、お約束。『ぎゃー!』と言うチエルシーの叫び声が旅館内に響き渡る……様なお約束な展開には実はならなかつたのだった。

何故なら——、男は また別の桃源郷へと行っているから。

場所は郊外。

少し街から離れた森の中には評判の天然温泉が数点存在している。勿論 外だから色々なりスクは有つたりする。……当然、命に関わる様な事だつてありうる。それは危険種の生息域だから。覗かれたりするリスクなんて、それに比べたら随分と可愛いものだと言えるだろう。

そして、今夜もお客さんが数人 天然温泉に足を踏み入れていた。

ぴっちりぴちの肌。引き締まった身体。起伏の富んだ身体。まだまだ幼さが残る少女たちが、露天風呂を満喫しているのだ。

それも女のみだから危険では？ と思うのだが、恐れるなかれ 彼女達は超がつく野生児。一級の危険種でも逆に狩って喰ってしまいう程の剛の者達なのだ。

勿論、言うまでも無いが アカメやツクシ、ポニー コルネリアである。

「……はあ ここらへんは温泉が湧く、とは聞いていたが、良いな」

「だよなー。ほれツクシ。きつと肩こりに効くよ?」

「べ、別にこつてないよ! ポニーちゃん!」

楽しそうな会話が聞こえてくる。世の男どもにとつての桃源郷はここ。巨〇 貧〇

美〇 と色とりどり様々……と言うのは置いときます。

アカメは温泉の湯を顔にばしやん! と搔けると皆に言った。

「……反省はしなければならぬな。……私達が完全に遊ばれた上に、情けをかけられた。あの男は一体何者だったんだ?」

アカメは河での戦いの事を言っていた。

あの戦いでは、異常な敵を前にして、誰もが一番の危機を感じていたのだが、結果は誰も負傷者を出す事なく、終わった。……でも それは納得のいく結果ではなかった。

よくよく考えてみれば、黒衣を纏った男は、攻撃らしい攻撃を一切してこなかったのだ。受けばかり。受け流して同士討ち等はあったが、それでも追撃をみせる様な事はなかった。

「あんなの初めてだったよね……。パパに訊いてみたけど、正体は不明だつて言つてたし……」

「うー、アイツとは二度と会いたくないわ。チーフの剣とか普通に当たつてるのにまーっ！ たくこたえないし。あたしのキックも直撃した筈なんだけどなあー」

ポニイは、シッ！ と脚を上げて蹴りを放った。

全裸だと言う事を忘れてないでしょうか？ 見事なY字開脚になってます。秘境が露わになってます。

「コラっ！ お風呂の中で暴れないの。はしたない」

「別に良いじゃん。男どもが来てる訳でもなさそうだし」

ポニイは脚を元に戻して、コルネリアにそういう。

ここまで覗きに来る男は、知る中では一人しかいない。ガイと言う名の性欲魔人。

こんなハダカでいたらいつみられてもおかしく無いけれど、そこはしっかりとガードをしてくれる様にチーフたちに頼んでいるから大丈夫だと言う安心があった。

「気配は確かにないけど、それでも 止める」

「はいーいコル姉え」

コルネリアに怒られて、とりあえず返事をするポニイ。

姉と呼ばれるだけあって、色々と無視しそうなポニイでもちゃんと聞いている様子だった。

「うーん…… 話、戻すけど もし、アイツがまた来たらどーすれば良いかなあ。カエルうちにしてやる! つて、普通の敵なら思うんだけどー ちよつとアレはなあー」

「それを言うなら返り討ちだよ? ポニイちゃん」

冷静にツクシからのツツコミが冴えわたる。

結構深刻な悩みだと思うのだけど、ツクシのツツコミやポニイの天然で 場の空気は和んだ。

「えくくい! こっちは真剣に考えてんのにー! そんなの、どっちだっていいジャロっ!」

とりやあ! とツクシに抱き着くポニイ。

「あわわっ ごめんごめんっ!」

「おおー、天然の大きな大きなクッションをお持ちでー 動きづらいんじゃないのー」
「きゃー も、揉まないでー」

チーム一の大きさを誇るツクシの胸を鷲掴みにして揉みしだくポニイ。

楽しそうなスキンシップを見ていたアカメは、自分も疼いた様で。

「私も混ざる!」

と言つて ポニイとツクシに向かつてダイブ!

「きゃんっ!」

「ほれほれ」

「あははは!」

「こらこら。暴れないのーつて」

3人は楽しそうに遊んでいて、それを見ながら注意しつつも微笑むコルネリア。

そして、もう1人がコルネリアの横で風呂を満喫。

頭にはタオルを乗せて温泉に来てます雰囲気もばっちり出して、コルネリアと一緒に遊んでいる3人を見ていた。

「いやあ、それにしても絶景かな絶景かな。成長が著しいなあ。まだまだ皆成長すると思うぞ? 歳の割に見事なもんだ。あの子のおっぱいなんか すっごいなあ。そう思わね?」

コルネリアに話しかける。

「うーん、ツクシの事でしょ? まー 見慣れてるけど、やっぱり凄いわよね。……ちよつとうらやましいかも」

「ん?? だいじょーぶだつて、コルネリアだつて良い形してるぜ! ほら、美乳つてヤツ?
? いやあ 膨らみの先つぽも良い色してるし、眼福ですなあ はい」

「ちよつと、胸の話ばかり! おっさんみたいなの……と……と……と……?」

ここで漸く違和感に気付く事が出来た。

本当に自然に会話に入り込んでいる。何故だろうか、ドストレートに色々口に出していると言うのに、声色を訊いたら明らかに仲間内の誰の物でもないと言うのに、直ぐには気付く事が出来なかった。

「!!」

遅れながら3人も はっ! と視線を向けた。

コルネリアがいる方に向かって――。

「いやあー 良い湯だなー はははんっ♪ いっ、い 湯だくな、あばばんっ! ゆっげに、かゝすんだ、大きな2つのふくらみ♪ さわりごこちちは? はははんっ♪ きつと良いだろっ!?! るるるんっ!」

呑気に歌までうたつてる侵入者。

あまりの事に数秒ばかり安心していて、一番早くに動く事が出来たのは。

「誰だ貴様は！」

びゅんっつ！ と前蹴りを放ったアカメだった。

湯につかっているが、それでも持ち前の脚力を活かして 放つ強力な攻撃はなかなかの速度で侵入者の顔面に叩きこまれた。

「ぶげっつ！」

歌に夢中だったからかアカメの蹴りを、まともに受けた男はそのまま沈んでいったのだった。

第18話 温泉での乱闘は女の子とするに限る！

温泉の中に蹴落とした突然の侵入者、或いは変質者は 起き上がってくる気配は無かった。

アカメの蹴りで完全に仕留める事が出来た、殺せた……とまでは思えないが 文句ない手ごたえだった為、意識を刈り取られたかもしれないと 考えている。

それでも あらゆる可能性を想定しつつ 間合いには入りすぎない様に全員が距離を取っていた。

いや違った。これ以上近付く事が出来ないと言うのが正解だった。それは相手が変質者だからだ、と言った理由ではない。

……得体のしれない相手だったから。思い返せば返す程、異常な相手だと言う事がこの短い間でよく判ったから。

女性陣の全員が この温泉に入っていた。

厳しい訓練も受け続け、暗殺者の集団の中でもトップクラス。即ちキルランクの上位に位置しているから 強くなったと言う自覚だつてある。常に頭の何処かでは緊張を

残っていて、対処できる様に備えてきたつもりだった。

あの川での一件から 追う側から追われる側を意識した時から、全員が備えてきた事だった。

だが、この相手は違った。如何に陽気に遊んでいたとは言え、全裸だったとはいえず有事の際にはしつかり動ける様に備えてきた。機動性、瞬発力等の身体能力においてはトップだと言つていいポニイさえ 直ぐに動く事が出来ず、冷静沈着にチームを纏めてきたコルネリアもコンマ数秒レベルではあるが、何が起こったのか判らなかつた。アカメだけが攻撃に転じる事が出来たのは 皆よりも僅かにだが距離があつた為以外にな
い。

それでも、こんな傍まで接近された事は今までない。……今の今まで侵入してきた気配さえしなかつたなんて、今までに無かつた。

此処は温泉だ。入ろうと衣服を脱げば衣擦れの音が、湯の中に入れば飛沫がたつてその音が必ず出る。

なのに、あの男が話しかけてきて、何度か話をし、更には陽気に歌をうたつてから漸く気付く事が出来たのだ。 完全に出し抜かれた。これでもしも——相手が命を奪いに來る暗殺者であつたとしたら？ と考えただけで背中に冷たいものが走る。脚に

感じる温泉の温度を忘れてしまおう程に。

「……アカメちゃん。武器、持ってきてる?」

「……ここには無い。服を脱いだ場所に」

ツクシがアカメに武器の有無を確認するが……やはり持ってきていない様だった。傍にある事はあるが、現状からでは、気が遠くなるほどの距離においてある。つまりは全員が丸腰の状態。常に最悪の状態を想定しなかつた落ち度だと言っている。

だが、今は反省をするよりどうやって乗り切るかだ。

アカメを初めとする全員が 武器のある脱衣スペースに目を一瞬だけやると、その次に間合いを図りつつ 水面から目を逸らさずに見ていた。

ぶくぶくぶくく と泡が湧き出てきているから、まだあの下にいるのだろうか、決して油断は出来ない。

「……できればこのまま沈んで欲しいんだけどね。そうもいかないかな」

コルネリアは ハダカを完璧に見られた事に少なからず動揺をしていたが、今はちゃんと引き締めている様だ。女としての羞恥心の全てを捨てられた……と言う訳ではないが、仕事モードに入れば そんな事を気にする様な愚行は起こさない。

両腕で咄嗟に胸を隠していたのだが、それは止めて構えつつ 全員を後ろに下がらす様に手で指示をしたその時だ。

「いやあ……、随分と酷い事するじゃん！ オレが何したんだよー。あー 顔いてっ」
「「「!!!」」」

有り得ない。

そう言える光景を目の当たりにしていた。自分達は一番最初に脱衣スペース、つまり臣具を置いてある場所に目をやったが、それはほんの一瞬だけであり、その後は一瞬たりとも目を離さなかった。

ずっと濁った水面を見ていたと言うのに、あの男は……直ぐ後ろにいたのだ。丁度岩場に座っていた。

「だけどまあ 良い蹴りだったぜー！ えっと、キミはアカメ……だったっけ？ アカメっつ！ NICEキックっ♪ でも ちょーつとばっかはしたくないんじゃないかなあ？ 女の子が裸で足技は色々と問題あるだろっ♪ まあオレには 眼福眼福って感じだけどねっ♪ 皆ナイスバディだぜー！」

「っつ!!」

アカメはその言葉を訊いて 思わず顔を赤らめた。でも それは一瞬だ。アカメだけに限らず、全員が。

「へえ……」

それを感じ取った様で 男は 笑っていた顔が一転していた。

「チエルっちもしつかりしねえとなあ。この子らの方が上手だぜ? ま、この子らもチエルっちも発展途上。これからだけどな)」

よっこらしよつ、と言いながら彼は岩場から移動。それはアカメたちの脱衣スペースの方だった。

「っ! 皆ッ!!」

武器を奪われでもすればもう完全い勝機は無い。

それだけは何としても回避しなければならぬと、全員が駆け出し、湯から出たその時だ。ばさつ と其々の顔に何かが掛かり、視界が完全にふさがれてしまった。

「くっ……!! ……あつ これは……?」

アカメは素早くそれを手に取って視界をクリアにしたが、投げられたのは何なののかの方に意識が向いた。

「ほら。服着なつて。湯冷めするぜ?」

「……………」

目の前の男が投げたのは全員の衣類だった。そして 衣類だけじゃなく……。

「どういふ事……………」

其々の武器 臣具だった。

「どういふ事く も何もこれつてキミらのだろ? え、ひよつとして裸族だったりすん

のか??? そりゃ失礼っ

「そんな訳ないよっつ!!」

顔をまた赤くさせたツクシは 声を上げつつ、衣服は後にして銃を構えた。

其々が臣具を装備し、完全な臨戦態勢を取った。

「はははっ。良い具合に育つてるなあー 色んな意味でよ? でもま、今日はそう言うのやる気ないんだ。ちよつと遊びに来た程度だからさ? それにそんな殺気向けられる程、酷い事した? オレは優しいんだぜ?」

「……そんなもの信じられると思うか? お前、一体何者だ」

アカメは剣を向けながらそう聞く。

「あれ? 前に会った事あるし 話した事もあるんだけど……。覚えてないの?」

「知らないよ! アンタみたいな変態!!」

「変態は酷いなあ……。せめて えっちい☆ って言ってほしい。てか、言ってくれ

! 特にそつちの巨乳ちゃんと美乳ちゃんに行つてほしいっ!」

ツクシとコルネリア。2人の方を見てそう言った男。それに強く反応したのがポニイだった。

「ぺったんこで悪かったな!!!」

「いやいや、そんな悲観するなつて。そつちはそつちで良いぞ!」

「うっさいわっつ!!」

ぐつ とサムズアップされながら言われてもなんら嬉しくないポニーは思わず飛びかかろうとしたが、コルネリアに泊められた。

「……私達はアナタと会った事も無ければ話した事もない。……何者?」

冷静にそう聞く。

陽気を装った問答でこちらの油断を誘おうと言うのか、或いは何かを狙っているのか、それは判らなかつた。でも、判る事はある。この男は間違いなく強い。……これまでに会った誰よりも強い。隙だらけに見えて全く近づく事が出来ず、間合いが見て判る距離の倍、10倍はあるかの様に遠かつた。

「んん? あれ?? ……あ、そつか。そう言えばそうだった! わりいわりい。そりや判らんわな?」

何かを思い出した男は、ただただ笑ってそう言っていた。

その意図が判らないコルネリアは訝しむ様子で見ているのだが……次に男が取った行動で全てが判明する。

「オレだよオレ。……ほーれ これぞどーだ?」

男が手をかざすと同時に、周囲の闇がまるで蟲の様に這い回ってきた。それらが男の姿を覆い隠し、軈て漆黒のマントを纏った怪人へと変貌を遂げたのだ。

その姿——見た事がある。

「お前は!!」

アカメは もう動き出していた。

そう、この男の正体は あの河川で戦った得体のしれない男だった。全ての攻撃を無にする。当たっている筈なのに当たっていない。……斬つても斬れない。撃つても当たらない。全ての攻撃を無力化しているかの様な相手。

この場にはいない男達を含む、全員で攻撃したのに全て通じなかった男。

だが、それでもアカメは突っ込んだ。

万全の状態でも完全にあしらわれた相手だ。もしも、あの時殺すつもりだったとしたら、この場の誰もが生きていなかっただろうと思える。そんな相手がまた現れた。……それも、最も信頼する男性陣。ランクトップの2人もいない状態。

『……このままでは 確実に殺られる! でも 仲間たちは殺らさせない! 私が時間を稼ぐ!』

アカメの行動の意図は全員に伝わった。だから、それに応えようと全員が其々の責務を全うしようと行動したその時だ。

「つとと、ハッーら! いきなり人に剣を振るつちや駄目だろう?」

男はアカメの渾身の速度、力を使って放った剣撃を二本の指先で防いだ。人差し指と

中指で挟み込んで止めた剣は まるでピクともしない。

「ぐっ…………!!」

力を込め、振り払おうとした時。

「………から………から まず話は訊きなさいってば」

アカメの頭に軽い衝撃を受けた。どうやら、小突かれた様だった。

その後は皆の方を見た。真剣な顔つきで。

「………実は キミらに大事な話があるんです!」

「………」

真剣な顔だったのに、次の瞬間には霧散。良い笑顔でばっちり決まっただけで、更にはウインクしながら高らかに宣言。

「オレはキミらの敵じゃありませんっ! 仲良くしようぜ!」

「………そんなの信じられるか!!」

勿論、誰も信じる者などいなかった。

その後は アカメを筆頭に飛びかかるのだが、悉く躲された。コルネリアが攻撃した時に限っては胸を盛大に揉まれた。1つ攻撃したら2回はやられ、遠くから援護射撃をするツクシには、2発撃つたら6回は揉まれた。

激高して飛びかかるポニイには、足を掴んで足の裏を思いつきりこちよばす。失禁しそうになるまで。

アカメに何とか救われたポニイは暫く戦線離脱。セクハラ三昧を受けたほかの2人も悶死しかけた。そんなアカメには。

『クール系肉食女子も、好きだぜ？ それにうんうん。すげえ綺麗な黒い髪に、綺麗な目だ。大好きだ♪』

急接近されて、ムチユ〜☆ とその唇を奪った。

そして 暫く戦った？ 後。その場に立ってる者は1人だけだった。

第19話　また昔話をする！

まさに死屍累々……。ここに揃った女の子達の殆どが地に付していた。

時々身体を震わせながら

『も、勘弁して……』

『揉まないでえ……』

『せ、セクハラ反対……』

と聞こえてくる。

だが勿論、彼は追撃なんかしていない。やっぱり活きの良い相手とだから楽しいと思っているのだろうから。チエルシーとか何度も抵抗するから更に面白がる。そしてチエルシーがその意図に気付いて相手にしない仕草をしても、ただで触らせるのは嫌だから、先手をすればやっぱり抵抗する。つまり、チエルシーが彼にとつてのお気に入りとと言う事は当然。

強い女の子に惹かれるのだから。そう、彼の目の前でまだ　しっかりと自分の足で立ってる彼女なんか尚更。

「やるな!? アカメっち! オレの厳しい攻撃をここまで耐えきるとはさっすがる♪」

チューされたたり、触られたり、と散々な目にあつてた内の1人であるアカメ。乙女な心は持ち合わせておらず、帝国の為に人を殺す事以外は脳内では常に喰う事しかない《色気より食い気》な彼女だったから 最低限度の効果しかなかった様子である。

その辺りはポニイもそうなのだが、彼女はくすぐり地獄を受けちゃつてるので仕方ない。

「ぐっ……、こ、この出鱈目男……っ」

でも、やっぱり立っている事が精いっぱいであり、攻撃に転じられる程気力も無かつた。

斬っても斬れない、倒せない相手。そんなのをいつまでも相手にし続ける。まず先心が折れてしまうのが常だ。……つまり、彼に色んな意味で対応するオールベルグはやっぱり別格。いや ほんと色んな意味で。

「それにしても……うん。アカメって名前もそうだけど……」

彼はアカメの顔をまじまじと見つめながらつぶやいた。

「な、なんだ……こ、このっ……! なっ……!」

剣を構えて受けて立つ構えのアカメだったが、相手が姿が霧の様に霧散した。漆黒を纏っていた筈なのに、今度は湯煙に交じつて姿が消えてしまったのだ。湯煙の中に漆

黒。つまり 白の中に黒は圧倒的に目立つ筈なのに、見失ってしまう。

「ちよい失敬」

「うわっ！」

「アカメちゃんっ!!」

「アカメ!!」

背後を取られた。挙句首にもすっぽりと腕が入る。

絞め落される、否首を折られてもおおしくない体勢だった。

「すんすん……」

「こ、こら!! 嗅ぐな変態……っ！」

「変態は酷いって。えっちいくにしてっば! それに 他の皆も落ち着いてっば。さつきから攻撃してくるのそっちだけだし、オレ 手え出してないだろ? そんな事するつもり毛頭ないっば」

アカメの頭を、黒く長い髪に顔を埋める。明らかにアカメの匂いを嗅いでいる変態の構図だ。ここから『えっち』とはならないだろう。客観的に見ても変態だから。

「うーん…… やっぱ アカメつちとクロメつちは似てる。ってか姉妹かな? 顔立ちもそっくりだし。うん、違うのは髪の長さで服装くらい?」

「なっっ! クロメ、だと!!」

アカメの身体に力が戻ってきた気がした。接しているだけで、その身体が一気に熱くなるのも、それと同時に、アカメは振り払い剣を振るう。その剣閃は男の頬を掠らせた。今の今までは、斬った手応えがあつても身体に傷が入っていないと言う異常な状態だったのだが、今ははつきりと判る。

「いててっ ひつどいなあー」

男の頬から血が一筋流れているのだ。

因みに、誰もが知る由も無いが、彼が血を流す、と言うのは殆どなく、アカメの快拳である。

「でも、太刀筋は見事! うんうん。タエつちと同等? いや、それ以上かも……?」

やるなあ、アカメっち」

アカメに一撃を入られたと言うのに彼はサバサバしている。

そして、次に目を疑ったのは……。

「な……………!!」

アカメが扱う武器は、臣具《桐一文字》。それは斬った傷口が治癒不能になる刀の武器。妖刀、村雨には及ばないものの現時点では限りなく近い刀、と名高い一刀だ。血が流れれば何れは消耗する。小さな傷でも決して無駄にはならない。そこから反撃の意図を、と探っていたのに。

「ふい〜 いててて。うん。これでよし！」

手を当てて ゆっくりとスライドさせたらそこには 傷はもう無かった。
血も完全に止まっていた。

「あ、アカメちゃんの剣は……」

ツクシもそれに気付いたようだ。アカメと一番仲の良い彼女はアカメの武器もよく知っている。傷が治らず血が止まらず倒れた魔獣の事も知っているから、当たって傷が出来た時喜んだんだから。

でも、実際は。

「や、やつぱ 化けモンだよ……、コル姉、どうする……？ チーフやお父さんのトコに……」

「簡単に行かせてくれるのなら、ね。……私達じゃどうしても……」

「んじゃあ ここはセクハラ我慢して突っ切る!! アタシとしてはやり返したい気満々！ だけど、あれには勝てないし、空回りするくらいならそっちの方が……」

胸触られたり、股間を触られたり、チューされたり……女の子にとっては最悪だが死ぬ様なら別だ。

ポニイにしては よく考えた。頭、初めて使った！ と褒めてあげたい気分だった

が、首を横に振るのはコルネリア。

「確かに、死ぬようなことはしてきてないけど、そこは相手の気分次第でどうとでもなるんだよ。……あいつは女だったらだから 今楽しんでるだけのようだけど…… チーフやパパは男。……あの時みたいナモードに入られたら 今度こそ殺られる可能性の方が……」

「うっ…… あ、あれも半端無かつたし、んじやあ……どうすれば」

コルネリアが言っているのは、河川上で戦った時の男についてだ。漆黒のマントを纏い素顔も見せず、感じる威圧感と圧倒的な実力、そして その口調もぜんぜん違った。楽しんでる、と言った点においては同じかもしれないが、それでも 殺す事を躊躇する様な様子だとは思えない。

色々と考えているからこそ 今 最適な解が判らなかつた。どうすればベストなのか。

「……答えろ。なぜ、クロメを知ってる? クロメに何かしたのか!」

剣を構え、これまで以上の殺気を見せるアカメ。

びりびりっ、と感じる殺気は クロメの為に、クロメの為ならば どんな事でも出来るし、どこまでも強くなれる、とそのまま体現しているかの様だった。

「愛されてるなあ、クロメっちは！　良いよ、良いよ。そーいうの嫌いじゃないし、つて好きだし！　皆皆大好きだぜ？」

「質問に、答えろおお!!」

「おつとと」

クロメの事なら暴走するアカメ。それをすっかり認識した後。

「ほいつと　没収〜」

「あつ……!」

武器が手に有れば　話もしにくい。と言うか話を訊いてくれないだろ、と言う事で没収した。

「落ち着いてつて。知ってる事話してやつから。後、クロメっちは元気だぜ？　それだけ教え解くからよ」

飄々としている男だが、全く信用していないアカメは強く睨み付けた。

「くつ……　それは、本当だろうな……?　嘘だったら　私はどんな事をしてでも……
例え敵わなくても、お前を、……殺す!!」

それは　必ずどんな事をしてでも殺すと言うすさまじい殺気だった。

でも、それでも 男の表情は崩れない。ただただ笑っていた。

「心地良いね。それだけオレを想ってくれるんだからよ? ま、殺意だけど その点は目エ瞑るって事で ホレホレ。皆集まってる 聴きたいだろ? 確か、お前さん達はなんちやらランクの上位クラス。あの長髪の渋めなコズキのおつちゃんのチームだったよな?」

男の言葉に 皆が目を見張る。

自分達の親の名が出てきたのだから。

「顔見知り〜とまでは行かないかもだけど、結構前に会ってたんだー。メズちゃんに色々手解きをしてやった時とかにも会ってるし♪」

「……嫌な顔に、嫌な手つき……。さいてー」

コルネリアは、嫌悪感を感じつつも 前に出てきた。

「よしよし。もー よーやくゆっくり話が出来るなあ。桃源郷を見つけた〜♪って思ってた心も身体もリフレッシュするつもりだったのに、まさか稽古するハメになるなんてなあ?」

「全部お前のせいだろ!! いきなり覗きに來て好き放題しまくって! 普通は刺されるぞ!!」

ポニイの盛大なツツコミも冴えわたるが、男は全然堪えた様子はない。

アカメはまだやや興奮してる様だが。

「アカメちゃん。落ち着いて。……だって、私達が大丈夫だもん。えと クロメちゃん、かな？」 きつと大丈夫だよ」

「あ、ああ。すまない ツクシ……」

しつかりとツクシがそばについててくれるから大丈夫だった。

「んじゃあ、話そう！ クロメっち達との運命的な出会いを……。うーん 自分で言っ
といてなんだけど、どーだろ？ 運命的くとは違うかも？」

「知らんわ!! 話すなら早く話せ！」

「わーったわーった。ほらほら、もっと笑顔だって ポニイちゃん。ほれほれく」

「わきやきやきや!! く、くすぐりは、はんたつ、やめ、やめつつ」

話が進まなそうだったから、コルネリアは持った桶で盛大にお湯をぶっかけた。

「(さつきまで本当に死に直面する程の修羅場だったのに……。なんなんだろ、この状況
……)」

ため息を吐きながら、改めて座って話を訊く事にしたのだった。

因みに 別に逃げててもよさそうな感じだったが アカメが梃でも動かなさそうだと

言う事、そして アカメの妹については以前から気になっていたから、と言う理由があった。

そう、あれは帝都近郊にある草原。直ぐ傍には村があつて 少しばかり休憩してまた飛んだ時に 彼女達を見たのだ。

『やっぱ 下の方が良いよな。上でゆらゆらしてたつてつまんないし。どつちで退屈するにしても 下の方がなんぼかマシだ。それに…… そろそろ期限迫つてるし……ん

『？』

そこでは争いが始まっていた。

ルボラ病がどうかとかと、騒いでいた事もあつて結構殺伐としていた雰囲気个村だったが、それに拍車をかける様に始まっていたんだ。

『でも、面白そうかもな！ うーん、村から出てきてる男たちはむっさいから 置いても、あの子達は可愛いなー』

基準はそこである。

無類な人間の女好きな男 クロ。

宙に浮いていた身体をゆっくりと下降させた。そして徐々に 速度を上げた。

何故なら 危なかったから。

『あの子、油断してる。……危ないな、斬られる』

そう、一際幼さが残る長い金髪の少女。身体の四肢が斬れ、血飛沫が舞散るこの修羅場でも笑顔を見せれると言うのは 凄いと思うが 如何に訓練を受けたとは言え 身体の方はどう見てもただの人間だ。あの刃を受けたら、ただじゃすまないだろう。

『うん！ 笑顔が可愛い！ 死なすの、絶対だめだ！』

と言う訳で、全く関係ないのだが参戦？ をする事になったのだった。

第20話 気に入つた子は助ける！

戦いはまさに一瞬だったと言えるだろう。

帝国側の暗殺者は5名、同じく村から飛び出してくる様に出てきた標的が8名。

数では劣るものの、帝国側の闇の暗殺部隊。その任務を確実に遂行する為に血の滲む様な命を削る様な訓練と身体を強化する薬を服用し続けてきた。

その為、その身に宿した力は一般人を遥かに凌駕している。それに加えて外見はただにの子供だ。その外見に油断し 飛び出してきた標的の3名が一瞬で死んだ。

このまま、暗殺者側の圧勝だと言える戦いだっただが。

「いけるいけるよ〜！ 私達、全員生き延びられる——！」

標的側にも曲者、強敵と呼べる者はいたのだ。

斬られ、死んだであろうと思っていた者はまだ生きていた。敵を殺して完全に油断している少女レムスの背後へと迫り。

「え……………」

背中を刻まれた。続けざまに2つの凶刃がレムスを襲った。

薬の影響なのか、痛みこそはそこまで感じてない様だったが、斬られたと言う事実は実感できていた。

「き、斬られ……ちやつた……」

重くなる脛に抗う事が出来ず、眼を完全に閉じ そのまま地に伏した。まだ完全に殺した、と確証が得られなかったのだろうか、男達はもう一度倒れた少女に刃を突き立てようとしたが。

「レムっ!!」

割って入ったもう1人の少女クロメにそれは阻まれた。一瞬の内に相手の喉笛を斬り割り、絶命させていた。

そして 強敵は1人ではない。まだまだいる。

「(あと1人です……!)」

1人、また1人と殺してきた勢いのままに、攻撃を仕掛けようとした。

相手の力量を正確に見極めようとせず。

「ガキ共が! 動きはもう見切つてんだよ!!」

向けられた刃は容易に弾かれた。読まれた軌道、そして元々のパワーの差もあつた為か。

「攻撃がお行儀良すぎてワンパターン、それに軽すぎなんだよ! 死ねエツ!!」

「つつ!!」

剣で防御をしようとしたのだが、その剣諸共唐竹割りをされ、身体は真つ二つに割かれた。

「ウーミン!!」

「馬鹿やろうつつ!!」

仲間がまた一人殺られた。それに一番動揺を見せていたのは班のリーダー ナタラ。

だが、その動揺はこの戦場において最も最悪だつていい愚行だ。その隙を狙つてナタラに攻撃をしようとしている男を阻んだのが ギン。

「ボサつとするなボンクラ! お前もああなりたいのか!!」

「つ……! わ、わるい!」

全ては戦い終えてから。仲間を弔うのも、悲しむのも。

「ウーミンを殺つたな! お前も真つ二つだ!!」

「返り討ちにしてやる!!」

クロメがウーミンを殺した男に飛び込んだ。

それを待つていたかの様に、強靱な斧を振り下ろすが 最小限の動きで躲される。残像が見える程の速度で。一撃目も、二撃目も。

「!? (こ、このガキ……! オレの、攻撃……を……)」

返しの攻撃で首が飛んだ。

首が取れても数秒は意識がある。男は首を斬られた実感もあつた。

「(もう、見切り……やがった……)」

そして 全ての戦いが告げた。

敵側全て全滅させ、……帝国側の暗殺者は2人死んだ。

『う………。かつちよよく助けて『きやー素敵……』って感じになる予定だったんだが……』

死なすの駄目っ! と思ひながら行つたのにも関わらず 結果として死なせてしまった。それは 正直相手側と味方側の力量を……。

『見誤っていた!! くっそー!!』

と言う訳でクロは全速前進。まだ地上にまでは200m程あるから、身の内の闇を解放する。

背に負うは 今の夜の闇にも負けない暗黒。その闇を周囲に撒き散らしながら接近

していった。

「ウーミン……、レムス……」

仲間の死。

今まで苦楽を共にしてきた仲間達の死。如何に人間の死を見続けてきた暗殺者であつても 仲間の死だけは慣れるものじゃない。涙は留めなく流れ続ける。

だから、だろうか 今までの攻撃も奇襲も全て読む事が出来たのに。

「っ！ クロメ!!」

頭上から迫る闇に、気付かなかつた。

一番先に気付いたのがナタラ。

それはただの偶然にして幸運だ。皆より少し離れた位置にいた為視界に捉える事が出来たから。気配を感じた、とかそんな事は一切ない。虚無をその闇に感じたから。

ナタラの声に反応して、クロメは2人の亡骸から距離を取った。

闇は2人の身体を完全に覆い隠した。

「ふーむ……。オレはアイツみたいになんかに戻すのは得意じゃないけど、数十秒前くらいなら、何とかいけるか」

完全に死んだ少女には 別の術を。

「あ……………」

「ほつ、こつちは生きてたな。よっこいせつと」

レムスの小さな身体を抱き起こした。

「あ、あなた……………だれ？」

「ん？ セーぎの味方！ つて、違うか…………。キミみたいな美少女はほつておけないナ
イスガイさ」

「ないす、がいつて…………、じ、じぶんで いう？ それに わたし、死なないよ。だつて、
だつて、死なないでつて みんなに いったの…………わたし、だもん…………。しんで、みん
なにめいわくや、かなしいおもい、させたくない」

明らかに致命傷だと言うのに、ここまで喋れる所を見ると、見えてくるものがある。

「ふーむ…………、無理に強化してるつてトコ、か。今も昔もエゲツナイ事するのいるんだ
なあ…………。それ身体壊すだけだつてのに」

「えつ…………？」

「いやいや 何でもねえよ？ ほれ、目閉じて」

「い、いま眠つちやつたら…………。ほんと、しんじやいそうだから…………」

「だーいじよーぶ！ 信じて目瞑れつて！ あ、いや 別にそのままが良いか。んじや

あ、失礼してー」

「え……？ ふむっ……!?」

クロはレムスの唇を唇を塞いだ。

「(き、きすっ……!? わたし、きすされてるー?!?!? そ、それもいきなり、はじめてなのにつ!?)」

当然混乱する。いや、だが 死にかけてるのに そこまで混乱できるものなのだろうか。

「(きやつ な、なにになに? なんだか……え……? きもち、いい? なんだか……ここち、いい……?)」

だんだん身体が軽くなつていくのを感じる。

「んっ ほい! とりあえず これで大丈夫」

ちゅぷんっ と艶やかな音と共に、唇を離した。

レムスは知る由もないだろう。……その身体の傷が急速に完治して言ってるという事に。

「そつちの子は…… うん。とりあえず 範囲は超狭いし、成功したな」

身体が縦に割れていたのにも関わらず、何も無かったかの様に繋がっていた。意識まではまだ戻ってなかった様だけだ。

『レムス!! ウーミンっつ!!』

外から声が聞こえてきた。

「つとと、仲間の皆さんか。……んー、でもこの子らそつちにやって大丈夫なんか？ タ
エつちとかみたくない逸材ならまだしも……」

この倒れてる2人の力量をしっかりと見た。確かに薬で大分強化出来ている様だ
けど、本当にそれだけだ。折角助けたのに、次も助けられるかどうかは判らない。何より、
綺麗な笑顔のこの少女は……どうにか欲しかったり？

「うし、決めた!」

と、言う訳で 覆っていた闇はそのまま、仲間たちがまつ外へと出た。

「っ! 何者っ!!」

「……………」

その姿は同じく闇を纏って。それっぽいオーラを出して。

帝国の暗殺者からしたら、まるで死神か何かに見えるだろう。身体から噴出されてい
る闇のオーラの演出? が更に際立たせている。

「あの娘らは……余が頂いた」

「なんだと! ウーミンとレムスを返せ!! 誰がお前なんかに渡すか!!」

「クロメ！」

クロメが飛びかかって斬りつけるが。

「落ち着け娘」

「なっ……!!」

剣が身体を通り過ぎた。何の手応えもない。透き通る様に通り過ぎてしまったのだ。

その上、剣先を握られた。つまり、向こう側は触れてこちら側は触る事が出来ない。

「あの娘の命はもう尽きている。……判っているであろう？」

「くっ……、なら どうするって言うんだ！ 2人を、2人の身体を弄ぼうと言うのか

！」

「ふむ。そう言う趣味は我にはない」

「なら、返せ！ 2人は私達の大切な仲間だ！ ……私達が、弔うんだ！」

剣を力任せに引っ張り戻そうとするが。

「話を最後まで訊くんだ娘よ。……この少女らは死ぬには無垢過ぎる」

そう言い残すと剣を離し宙に浮いた。

「ウーミン！ レムス!!」

「主はクロメ、というのだな……よし名を覚えた。また 会おう」

「待てえっ!!」

剣を振るい続けるが、全てが届かなかった。

2人を包んでいたままの闇と共に、夜の彼方へと消えていったのだった。

そして、場面は元に戻る。アカメ達の元へと。

「とさう感じて 『また会おうぜ!』 って感じて爽やかに別れたんだよー。うーん、クロメっちも可愛かったし また会いたいなあ……」

「クロメは何よりも、誰よりも可愛い。それは否定しない。……が!」

アカメは、邪な顔をしているクロの顔面に蹴りを1つ。

「いてっ!!」

「クロメには二度と近づけさせん!!」

「親父かよ、アカメっち……。それに　クロメっただけじゃないぜ？　アカメっちも可愛いつて！　負けてない負けてない！　アカメっちも可愛い！」

「む……」

それを訊いてアカメは少し顔を顰めた。

「わっ、駄目だよ、アカメちゃん！　そんな人の甘言にのっちやつ！」

「そう言うタイプって女の子だったら誰でも良いのよ」

散々な声が周囲から響くがとりあえず気にした様子はない。

「違うぞ、コルネ……っち！　コルネっち！　オレは可愛い子が好きだ！　誰でもって訳じゃないぜ!!　流石におばちゃんにとかはなあ……う？　チューするのはさあ」

「そんなん訊いてない！　って、っちって呼ぶな！」

「良いじゃん良いじゃん。気に入った子にはそう呼ぶんだーオレ」

「うっさい！　それに何なのよアンタ！　変身したら人格とかも変わるって言うの!!」

変に口調変えて！」

「んん？　ああ、そりゃ　そんな時の気分だ！　大した意味はねえよー」

「ほんつと胡散臭いヤツ!!」

色々と言いつ合っているコルネリアとクロ。そんな中で安心感を何処か覚えたのはポニイとツクシだ。2人はまだくつちと呼ばれてないから。

「んー? 2人の事も好きなんだぜ? ほれほれ〜!」

「わきゃっ!!」

「わーっ も、揉まないでーっ!」

でも、安心出来たのは一瞬だけ。その後も全員が思いつきりイタズラをされ続けるのだった。

勿論最後は爽やかにお別れになった。

「んじゃあ またねー! 皆! 楽しかったよー」

「二度と来るな!!」

「来ないでーっ!!」

第21話 村に降りる！

「ん〜♪ ほんつとみんなみんな可愛かったなあー！ いやいや眼福眼福！ 程よい感触♪ 最高っ」

ふわふわと空を漂いながら 思い返しているのだろう。少々だらしない顔をしていた。

それも数秒間のみ。

「んー、この辺って確か……」

クローは 宙を移動しながら その地形を目にして、この場所の大体の位置を把握した。

「つよし。久しぶりに戻るかな？ 結構 傍に来た事だし？ 南に100…… やー200ってトコか」

背伸びを1つすると 身体に力を入れて再び飛翔を開始。

鳥達を追い抜き、宙を支配している危険種も追い抜き、更には雲の上まで上昇し風を斬り、空気の壁を突破する。現代の科学、文明では到底なしえないその速度は、殆どワー

プと言つても良いかもしれぬ。

「とと、危ない危ない行き過ぎるトコだった」

とりあえず行き過ぎる事なくものの数秒で目的地へと到着。

そこは 山々、森々に囲まれた秘境。

自然に囲まれた未開の地……と言つて良い風景だと思えるのだが、その一部には

ぽつかりと大きな円が出来ており、明らかに人工的な建物も見える。

簡単に言えば ちよつと大きめの村だ。

クロは ささつと地上へと降りて、その村のど真ん中。広場へと着地した。

その広場では、ちよつとした出し物をしている様で、人がそれなりにいた。……突然

空から人が降つてきたら驚くだろう。『親方！ 空から男の子がっ！』と言つた感じ
で。

でも生憎、この村では驚く様な者は誰一人としていなかった。

「よーつす！ お久〜」

手をパタパタと振つてニカリと笑うクロ。それを笑つて出迎えるのは 長身の黒髪
の女性。

「おやおや。ほんつと普通に登場は出来ないのかい？ 貴方はさ〜？」

「へっへっ この方が格好良いだろ？ この方が！ ってか 結構ひっさしぶりだ

なあ。マーサ！ あ、また飯食わしてくれ〜！」

「はいよつ。あーでも ちよいとお待ち。ウーミンとレムスが捕ってきてくれた上質の肉が今さばけたばつかなのよ」

「おおおつ！ そりや期待できる！ マーサの焼肉定食は絶品だしなあー！ 肉汁絶品っ♪」

「……ふふっ」

マーサは何かを思い出した様に穏やかに笑った後、早速取り掛かった。

「作る間、皆に顔見せておやりよ。貴方が戻ってきたつて知ったら みーんな喜ぶわよ」

「おつ？ やつば オレつてモテモテ?」

「そりやもうつ。私も 後5年若かったら 狙っちゃつてるわよ?」

「いやいや〜 マーサならいつでもバツチコイだぜ〜?」

「あらあら。こんなオバサン捕まえて〜」

あははは、と陽気に笑っている間に、また人が集つてきた。

「やれやれ。ほんつとお主は老若問わず……じゃな?」

「ほんとですな〜！ でも、私はマーサよりは若いから、アタックしたらもつともつと可愛がつてもらえるかなあ?」

「それを言ったら私はもつとですよ〜? クロお兄さんは 私の初めての人なんです

しっ、っ」

「レムス……。何度言ったら判るの？ アレは治療行為だつて言ってるでしょ？」

「なくに？ ウーミンつてば ヤキモチやいてるでしょー?」

「ち、違うわよっ！」

大いに賑わつてくれて、クロも更に笑う。

「あーっはっはっは。皆マジで順応早過ぎじゃね？ ほんつとメチャ馴染んでんじゃん。まだ 一カ月？ 二カ月くらいなのによお」

因みに少しばかり説明すると、ここにいるメンバーは 少々訳アリなのだ。

レムスやウーミンは、クロがアカメ達に語っていた様に 過去に助けた少女たち。そして、その他も似た様な者なのである。

「そりゃあ 最初は戸惑ったと言うか、混乱したけどね……。結果として見てみれば、私は何か生き返ってるし……。それだけじゃなくて家族まで助けてもらってるし……。おまけに殆ど自由の身も同然だし。楽しんじゃわないと損つて言うか。皆仲良く平和最高っ つて言うか」

「儂も似た様なもんじゃな。あの乳が大きな娘……。じゃなく 可愛らしいお嬢ちゃんに見事に頭撃たれてー じゃ。んで 気付いたら お主が儂をここに招待。……。混乱せ

ん方がおかしかろう？ そのどでかいのがあったからこそその順応性じゃ」

マーサと、傍らにいる老紳士ミアン。とある村にて 殺されそうになつてた所、通りかかったクロが気まぐれに救つた。……勿論、気まぐれなのは 老紳士ミアンの方で、マーサともう一人。

「私も私も。突然 デツカイ土竜に頭を潰されちゃつたもんね……。アレつて絶対死んでるんでしようし。……それで生き返つた仲間で言えば私達3人が筆頭！ と言う訳で、ウーミンは下つ端だよー」

「んなつ！ レムスの方がっ！」

「私は死ぬ一歩手前だったから違うのー」

きやいきやいと騒ぐ村の人達。

毎日がこう騒がしいらしく いつもクロが降り立つたら大体こんな感じだそうだ。

「うんうん。こういう雰囲気好きだぜー？ やーっぱ もつかいしてみて良かったわっ

！ 前んときなんかちよつとアレだったしなあー」

「前つてなんじゃ？ ここ以外にも似た様な場所があるのかの？」

「あー、そんな感じそんな感じ。訊いてくれよ前回なんかさあ オレが調子に乗つちやつたせいってのもあるんだけどな……。ちよつとした道楽、趣味で ひと拾つてたら いつの間にか大人数になつちやつてさ？ ヤレ『かみさま』だの、『ほとけさま』

だの。オレの崇拜者? が大量に出来上がっちゃったんですよ、はい。貢物合戦、処女捧げ合戦。あそこまで行っちゃったら、流石のオレもひいちゃうんです。可愛い子もいたんだけどなあー。ちよくくと眼が変わっちゃって」

「……………なんか速攻で目に浮かぶの、その光景」

以前もこんな風に『趣味でヒーローやってます』ってどつかで聞いたキャッチフレーズ宜しくなボランティアをしてて 出来上がった町や村があった。

色々と引き継がれている記憶があるから、狂信的な崇拜者の行く末をよく判ってるク口は 早々に脱出して戻らなかつたとか。

「ク口お兄さん…………。それでみんなほつといたの? ちよつと酷いつて思うよー。それ」

「レムっちは、知らないだけなんだよー。あくんなに色々奉仕プレイの連続されたら、飽きるく と言うか 退屈するく と言うか。村人みーんな どつか人間味が無くなっちゃった気がしてさあ? それにオレ 一度興味無くなったら とことんだからなく。あー でも勘違いしないでよ? ちゃーんと今でいう帝国に送り返したから。あつはつは! いきなり雇用とか増えて、帝国がメチャ混乱したよな、確か! 困惑混乱、アレはアレでおもろかつたなあ!」

「……………」

マーサはそれを訊いて、記憶を辿った。

帝国の歴史はそれなりに知っている。親族が革命軍の内定者……と言う事で、様々な事を調べた。だが、近年でそう言う事態が帝国に起きた、と言う事例はない。そもそも、雇用が増えた所で、使える者・使えない者に早々に別けられて、薬漬けにされたり、暗殺者にされたりとするだけで、帝国はそこまで困らないのだ。……そう、今の帝国なら。「さーって。皆の顔見れたし！　そーれーに、……堪能もしたっ！」

「きゃうっ！」

「ひゃあ〜っ！」

後ろからがぼつ　と　レムスとウーミンに抱き着くクロ。スリスリ〜　と頬を摺り寄せると、くすぐったそうに笑うレムスとウーミン。

「レムつちにウーミンっ！　これからも頼むぜ〜？　皆で仲良くな？　この辺、結構やんちゃな動物も多いからさっ！」

「はーいっ！」

「お、恩に報います！　頑張ります!!」

堪能できたのは、ある意味2人の方かもしれない、と言うのは気のせいじゃないだろう。

「それはそうと、一級危険種をやんちゃとは……」

「まあまあ。問題ないだろ? 結構、連れてきた子達 それなりに選んだつもりだしさー?」

「まあ 歳は取りたくないのおく って感じじゃが。何とかな」
それだけ聞いたクロは、ふわりと空に浮かび上がった。

この場集った皆を見てにやつと笑う。

「因みにさー。最初言った事、忘れてねーよな? 別にここに留まらなくなつて良いんだぜつてヤツ。皆の故郷つてヤツに戻つたつてなーんちゃ問題じゃないつてヤツ」

間違えないでほしいのは、クロはこの場に皆を縛り付けた訳ではない。

山奥の秘境……未開の地とは言え、この場所には相応の使い手が多数いるし、何より、ヤバイ危険種自体もそこまで多くは無い。しっかりと対処できるレベルなのだ。

「最初はそれ思つたケドさー。ここもとーつても良い場所だし、第二の故郷なんですー。私にとつて! ……殺される前、故郷に帰れるつ! ってすつごく嬉しくて、それが叶わなくて絶望して…、色々あり過ぎたからさ。気がとても休まるここにいるんです! それに、クロさんは、こうも言いましたよ? 『何時までもいてくれて良いぜー。たまにチューしに戻つた時 誰もいなくなつたら 沈むけど……』 って」

「そりゃ 沈むジャン……。こんだけ可愛い子いたのに、いなくなつたら……。ま、女

の子だけじゃないけどさ〜」

「クロお兄さんに救われた命。大切に使いますよー！ もっちりろん クロお兄さんに嫌われたくないので、言っていた様な事にならないよう頑張りますよー！」

「レムスと同じ気持ちです。クロ様」

「……焼肉定食くらいなら何時でも作ってあげるわ。貴方にも疲れたり、お腹がすいたりしたら、戻ってくるおススメの場所の1つがここにあっても良いでしょ？」

「野郎の1人代表で言おう。しーっかりこの娘らは守るわい。ま、前回みたいなのにならない様に努力……じゃな。二度目は無いってのが相場じゃ」

それを訊いたクロは 更に上昇を始めた。

「はっはは。そりや色んな意味で安心だ。んじゃ またなー」

クロが見えなくなった後。

マーサ達は自然と眩いていた。

「あの人なきつと黒の神鳥。……神鳥伝説の内の一つ。神様なんでしょうね」

「うむ。じゃが 伝説では白が無邪気な天使、黒が断罪の悪魔って伝わってたんじゃが…… ありやどつちかかって言うのと無邪気の方じゃないかのお」

「伝説なんて言い伝え一つで変わったたり、反対になったりしますよ。地方によつて変わるらしいです。それに、断罪は 上空を大きな影が、空を割る様な影が通つた時に起こる。それは間違いありません。その日は帝国でさえも穏やかですから。悲鳴の一つも無い平和な一日になりますから。 後……あの人がいる時は、いつも快晴。きつと人里に下りた姿……なんでしょうね」

「……一度死んでみるもんじゃ。儂らは運が良い」

「ふふ。そうですね」

いつまでもクロ口に手を振る少女たちを見て。

荒んでいる帝国もこんな風になれば良い……と心から想った。

そして 彼の力ならそれも容易であろう事も、いつもながら思う。 それ程までに巨大な力。……そして その力に目が眩み 人々は独占しようと突き進もうとしたのだろう。それが彼の言っていた事に繋がる。

「帝国を蝕んでいるのは 人が生み出した病原菌。……なのに、丸投げするなんて 罰が当たりますよね。それは」

崇めて、崇めて 崇拜して、奉つて……、その時の人の顔は こんな晴れやかに笑つてはいないだろう。……笑っていたとしても、絶対醜いと思われる。そして次第に興味が薄れ、0になる。

その時、きつと彼は—— クロは何処となく寂しい表情をしているんだろうな、と思ってしまうのだ。

「今の儂らに出来る事は少ないかもしれん。……じゃが、いずれは何か自分達の力で行動をする。それだけを心に刻むのみじゃ」

「そうですね……。つて あっ！」

「どうしたんじゃ？」

回想シーンっぽくなってたんだけど、大事な事を思い出したマーサ。

「……………焼肉定食、食べずに行っちゃったわ」

「……………あー」

「ああーっつ 飯っつ!! 焼肉っつ!? 戻る!」

『ちよつと待つてよ。そろそろ交代』

「ええええっ!! オレ喰ってないのに!?!」

『自業自得だし』

「へぶん……っ」